

2020 年度 インターゼミ・アジアダイナミズム班 論文

パンデミックのユーラシア史とポストコロナ  
～モンゴル帝国史を起点としたペスト(黒死病)の欧州と日本の中近世史～

学部生

小出 幹、柳沢 悠介、池田 賢吾

大学院生

半田 敏章、三田 大祐、山内 美恵子、北山 智子

修了生

光永 和弘、塚原 啓弘、和泉 昌宏

指導教員

金 美徳、水盛 涼一

2021 年 1 月 23 日

## はじめに

2019 年末に中国武漢より新型コロナウイルスが発生した。瞬く間に世界に拡散し多くの感染犠牲者を出すことになった。感染爆発は中国から欧州へ移行し、その後アメリカを巻き込んだのちに南米で猛威をふるい、アフリカ諸国にも到達した。

新型コロナウイルスは人と人が直接接触するか、飛沫物を介するなど間接的に接触することで、その宿主である人の間を移動し入り込むことで広がる。一見自らに関わりのないと思われる世界のいずれかの地点で発生したウイルス感染が、今回の新型コロナウイルスのように我々の身近にも到達し、多くの人が感染し生活様式に多大なる影響を与えたことは、すなわち繋がっている世界を実感したということがいえる。

感染爆発直前の 2019 年を振り返ると、アメリカと中国の熾烈な覇権争いが生じていた。アメリカは自国第一主義を掲げ、TPP やパリ協定といった多国間協調路線から離脱し二国間関係で優位な交渉を進めようとした。一方の中国は、内政的において腐敗撲滅を掲げ民意を掌握するとともに外政では一帯一路構想やアジアインフラ投資銀行(AIIB)設立を掲げ、グローバルガバナンスへの野心を見せ、大中華圏の実体化に踏み込んでいた(寺島 2020)。アメリカと中国のスタンスは、いずれも自国の利益を最大化することにあつた。世界各国が、その勝敗の行方に注目し、自国の利益に焦点を当てることを意識した。

おりしもグローバリゼーションによる人的交流の拡大、そして時間的距離の短縮が進み、その潮流の中で新型コロナウイルス感染症が世界に急速に広まることとなった。そして人体に直接的な生命活動への影響はもちろんのこと、生産活動の停止により往来や物流も途絶え、仕事が減少し失業者そして倒産企業が急増し、各国経済は瞬く間に沈没することとなった。ここで各国ではウイルス対策の面で強圧的な抑制策を採るのか自主性に基づく微温的な対応を採るのか判断も分かれた。その判断のいずれかが正解であったのか、未だ回答は出ていない。グローバル化された世界の中で、各国間の関係性を改めて認識し、コロナ後の新たな世界や人々の行動のあり方を考えていくことが求められている。その上でこれまで人類が歩いてきた歴史や先人が築いてきた知見や教訓を見つめ直し、腰を深く据えて現代から未来を見つめながら思考を凝らしていくことが必要なのである。

我々、多摩大学インターゼミ・アジアダイナミズム班は過去 3 年にわたってモンゴル帝国の交流と衰退、そしてその周辺国への影響をテーマに研究を続けてきた。特に 13 世紀におけるモンゴル帝国の興隆は、アジアやヨーロッパ、中東に位置する諸国を次々と支配することで広大なユーラシア大陸をつなげるに至った。交通網を発達させ物流や人の往来が活発化したことから、世界のグローバル化の始まりともいわれている。この時代を見つめることで我々は少なからず過去グローバル化された世界から現代を対比しながら見つめる視点を得ることができた。

また、ユーラシア大陸で一大勢力となったモンゴル帝国は、一方で広大な地域を連結し域間商業を推奨したことにより、土着の強力なウイルスや細菌を他の地域に運搬する多大な影響をもたらししてしまった。その一つが、ヨーロッパや中東にわたって多大な犠牲者を出し続けた黒死病いわゆるペストである。短絡した世界で未知の病原体と向き合ったこと、またその病原体を前に人々の思考や行動が変容していったこと、これは 13 世紀以降の当時と現代とで多くの共通点を見出すことができる。以上を鑑み、我々は中世ペストの感染爆発いわゆるパンデミックと向き合い、その上で現代との対比を行い、その影響を見つめることによってコロナ時代の人間のあり方に関する考察を試みたいと考えた。

## 目次

|                                       |     |
|---------------------------------------|-----|
| はじめに.....                             | 292 |
| 第1章 ペストとモンゴル帝国 .....                  | 296 |
| 第1節 黒死病（ペスト）とは .....                  | 296 |
| 第2節 モンゴル帝国が広げたペスト .....               | 298 |
| 第3節 ユーラシアにおけるペスト菌の伝染.....             | 299 |
| 第4節 ペスト菌のヨーロッパへの伝染の原因を作ったモンゴル帝国.....  | 300 |
| 第5節 モンゴル帝国衰退とペスト .....                | 301 |
| 第6節 国家統制によりペストの影響を最小限に留めた明.....       | 302 |
| 第7節 経済的な背景 .....                      | 303 |
| 第2章 欧州のペスト .....                      | 305 |
| 第1節 ペストの感染拡大の原因と対策.....               | 305 |
| 第2節 ペストによる人口減少と社会への影響 .....           | 307 |
| 第3節 ペストが人々の心性に与えた変化 .....             | 314 |
| 第4節 ペスト時のユダヤ人迫害と迫害が後世に与えた影響 .....     | 319 |
| 第5節 フィールドワーク（ヒアリング）：中世民衆の宗教とユダヤ人迫害 .. | 324 |
| 第6節 パンデミックに見る人々の分断に対する考察.....         | 325 |
| 第3章 パンデミックの日本への影響.....                | 328 |
| 第1節 日本の神仏信仰と疫病の関連性.....               | 328 |
| 第2節 13世紀から15世紀の日本と感染症.....            | 331 |
| 第3節 江戸時代日本がコレラから受けた影響 .....           | 339 |
| 第4節 科学の進歩と日本における感染症 .....             | 341 |
| 第5節 感染症への日本人の貢献 .....                 | 345 |
| 第6節 地政学的視野から見た日本における感染症 .....         | 353 |
| 第7節 現代に生きる日本人特有の衛生観念と気質・文化.....       | 355 |
| 第4章 現代的意義とポストコロナ .....                | 357 |
| 第1節 パンデミック、再び .....                   | 357 |



|                              |                        |     |
|------------------------------|------------------------|-----|
| 第2節                          | ペストとの共通点および相違点.....    | 360 |
| 第3節                          | 現代的意義と、歴史から学べること.....  | 361 |
| 第4節                          | ポストコロナに向けて.....        | 362 |
| 第5節                          | ポストコロナの方向性.....        | 363 |
| 第6節                          | 日本社会が直面する課題.....       | 364 |
| 第7節                          | ポストコロナの世界と民主主義の行方..... | 368 |
| 関連年表.....                    |                        | 370 |
| 参考文献一覧.....                  |                        | 371 |
| 2020年アジアダイナミズム班年間スケジュール..... |                        | 377 |
| 最終発表スライド.....                |                        | 378 |
| 謝辞.....                      |                        | 405 |
| 執筆担当.....                    |                        | 406 |
| 図表目次.....                    |                        | 408 |

## 第1章 ペストとモンゴル帝国

### 第1節 黒死病(ペスト)とは

黒死病(以下、ペスト)とはエルシニア属細菌の一種でペスト菌(*Yersinia pestis*)感染に起因する全身性の侵襲性感染症である。ペストという言葉は、ラテン語のペスティス(Pestis)、さらに古くはサンスクリットのピー(Pvi)から来ており、「流行」「破滅」を意味する。人類に荒廃をもたらした劇的な影響を与え、全世界で2億人が死亡したと考えられている。潜伏期間は通常1〜7日で感染ルートや臨床像によって腺ペスト、肺ペスト、および敗血症型ペストに分けられる。肺ペスト患者から排出された気道分泌液により、ヒトからヒト間で飛沫感染する場合がある。適切な抗菌薬による治療が行われなかった場合、30%以上の患者が死亡する。腺ペストでの死亡率は30〜60%であり、肺ペストの場合はさらに死亡率は高まるとされている。

ペストは動物由来感染症でネズミなどのげっ歯類を保菌宿主とし、節足動物(主にネズミノミ属のノミ)によって伝播される。基本的にはげっ歯類を侵す人畜感染症であり、げっ歯類間の感染は吸血するノミによって起きる。流行は500年代、1300年代、1800年代後半の3回あったが特に大規模な流行が2、3回目であり、3回目の流行時での調査では、動物間ではまずドブネズミに感染、流行し、その後黒ネズミに広がり、その後人間に及ぶと結論づけられた。黒ネズミはこの病気に弱く、死ぬと体についているノミは宿主を探しその先が人間であり、ネズミのノミによって媒介される。

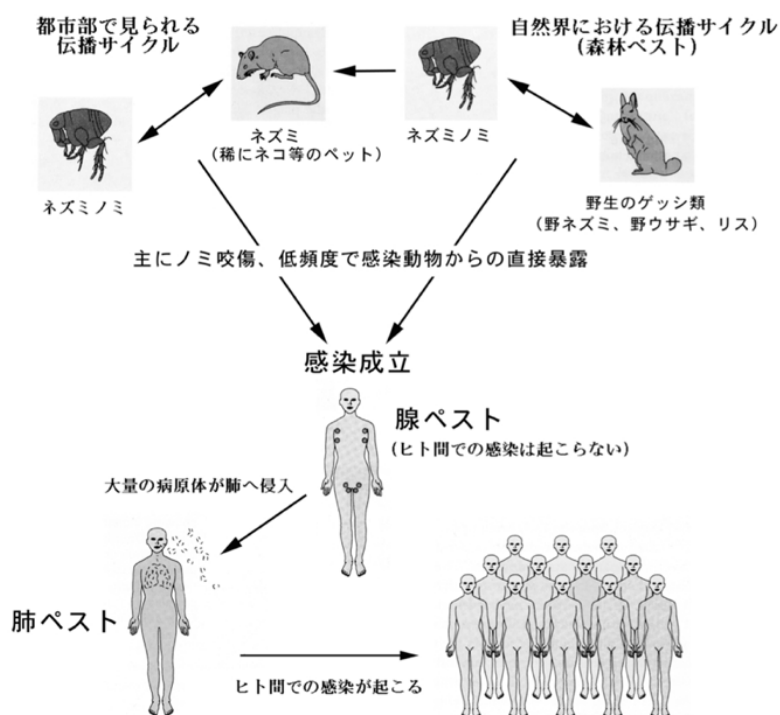


写真 1 ペスト菌の感染経路

出典:Mims C. et al. Plague. Medical Microbiology 2nd Ed. pp 372-375.より国立感染症研究所が改変

マクニール(2007)は著書の中で次のように述べている。ヒトが誕生する以前から世界の各地域はそれぞれの生態系で成り立っており、消費者である肉食動物を頂点に草食動物や微生物、植物、細菌やウイルスなどでバランスを保っていた。人類が登場したのは約200万年前のことである。衣服や住居、道具を巧みに利用しやがて生態系の頂点に君臨した。その後、ヒトは植物栽培や動物飼育を巧みに利用し自然界をコントロールしながら増加していった。一方で自然界は、ヒト増加により生態系を占拠され動植物の分布形態をゆがめ、動植物の「種」はより少なく、「数」はより多くなっていった。地域によっては絶滅種も多くなり、特に近年の絶滅種数は顕著に多くなっている。その中で自然界に分布していた多くのウイルスや細菌は行き場をなくすことに繋がったが、逆にヒトを含めた限られた種を宿主とできるウイルスや細菌は、侵入することで好ましい餌場環境を得ることができた。それはヒトを含めた宿主と共生する種もあれば毒性をもち宿主の衰弱や死亡と共に新たな宿主にうつることで生き残るものもあった。

中世までの世界、特にモンゴル帝国がユーラシア大陸に台頭するまでの世界は、それまでの文明が進んだ地域同士をつなげる何らかの安定した組織的な機構はなかった。そのため、人類が集

中する地域では寄生のバランスが整えられていたため感染症が広がる機会のごく稀だった。ウイルスや細菌が新しい宿主への感染に必要なものは、寄生する生物の総量、感染症が伝わる時間、伝播の様態、うつし合う機会の多い生活習慣である。それらを兼ね備え、ある地域から別の地域に外来種となるウイルスや細菌が入り込んだ時には、耐性を持っていない種にうつり爆発的に拡大することがある。多数の感受性あるヒトの群が移動し、間を隔てる広い空間に散在する時、まさしくパンドラの箱が開けられた状態になる。

## 第2節 モンゴル帝国が広げたペスト

マクニール(2007)は、元来ペスト菌が生息していたのは雲南省とビルマであると推測している。野生のげっ歯類が慢性的な形でペスト菌を宿し、モンゴル到着以前にも何世紀にもわたってこの感染症が存在していたとしている。草原各地の野生のげっ歯類小動物が地中に掘りめぐらす穴は厳しい冬の寒さにも耐えて、このペスト菌が年中生き続けるのに非常に好都合な局地機構を作り上げていた。またそうした穴には、動物と昆虫が複合的共同体をなして共存していたため、ペスト感染が永久的に持続することが可能であった。地方によっては感染の危険に対処すべく弱ったげっ歯類に近寄らない、触れないといった習慣的方法により自らを守ることが昔から続いていたと記されている。

諸地域の生態系に大きな影響を与えた最初の変化は、チンギス・カーンの建設したモンゴル諸帝国の支配下において、アジアを横断する陸上の隊商交通の発展・強化であった。勢力が頂点に達した 1279 年から 1350 年まで、この帝国の版図は中国全土とロシアのほとんど全土、さらに中央アジア、イラン、イラクを包含した。そして一日に 100 マイルずつ何週間も走り続ける騎馬飛脚や、緩やかな歩みではるばる遠い距離を行き来する隊商や軍隊などの織りなす一大交通網が、この帝国を 1350 年代まで一つに結んでいた。この交通網の中には、北の道も通った。中国シリア間の古代における狭義のシルクロードは、中央アジアの砂漠を横断し、オアシスからオアシスへの道を辿るものだった。この古い道筋に加えて、隊商や兵士の群れ、早馬に跨った飛脚らは広漠たる大草原をも通った。彼らは広大な地域にわたる人間の交通網を強化し、それはカラコルムにあるモンゴルの総司令部を、ヴォルガ河に臨むカザンやアストラハン、クリミア半島のカフファ、中国のカンバリク(北京)などを強固に結びつけ、さらにその間に点在する無数の隊商基地を一つにつないだ。

しかしながらその過程で、この隊商路網が北に広がったことはひとつの重大な事態を招いた。草原各地の野生のげっ歯類小動物が未知の感染症の保菌者と接触することになり、そしてその病気

にはおそらく腺ペストも含まれていた。感染したネズミとノミが穀物その他の品等を収めた鞍袋に入りこむことも、時にはあり得たはずである。そして感染が緩慢に伝播していくには障害になっていた河川なども、モンゴルの派遣軍が移動に際して示した迅速さによって乗り越えられた。モンゴル軍が初めて雲南省やビルマに侵入した 1252 年以後のある時点で、彼らは不注意にもペスト菌を自分らの故郷の草原に住むげっ歯類の群れにうつしたことが考えられる。モンゴル軍が雲南省とビルマの略奪から帰還した 1253 年のすぐ後、ペスト菌はモンゴリアの野生のげっ歯類の共同体に侵入しそこに根をおろした。以後、年々歳々この感染症が大草原を西へと広がっていった。その際、感染したネズミとノミとヒトが知らぬ間にペスト菌を新しいげっ歯類の共同体にうつすといった形で、人間の移動に助けられることもあった。モンゴル帝国がつなげたユーラシア大陸という土俵の中で、げっ歯類やノミに入り込んだペスト菌の生息範囲を人間の移動とともに広げることをモンゴル帝国がお膳立てした形になった。

### 第3節 ユーラシアにおけるペスト菌の伝染

モンゴル人のカーンのもとで政治的統一がされると、シルクロードが開通し、中国の貴重な品々とともにペストを感染させたネズミやノミも運ばれるようになった。モンゴル人がペストにかかった正確な経緯はわかっていない。マクニールによれば、1252 年に大草原の戦士たちが中国南部やビルマのヒマラヤ山麓に北から侵入した時、地上性げっ歯類に囲まれた古代からのペストの住まいで病気をうつされたのではないかという。

1331 年、中国でペスト感染が現れる。特に 1353 年以降事情は一変し、中国の歴史上最もひどい厄災に見舞われた時代が始まる。ペストの拡大と同時に、モンゴルの支配に対する中国人の抵抗が高まり、1368 年遂に異国の支配者打倒と新しい明王朝の創始に到った。ウィリアム・バーンスタイン(2019,P.265)は、モンゴルと明の人口調査から、1330 年と 1420 年のあいだに中国の人口が約 7,200 万人から 5,100 万人に減少したとし、剣よりも病原菌の方が一般人にとっても致死率の高い兵器であるのが普通であり、この期間の中国における人口減少の原因はペストだと考えるのが理にかなっているとしている。モンゴル人の残忍さだけでは、これほどドラスティックな現象を説明できず、疫病が中国人の数を減少させるのに大きな役割を果たしたと推定できよう。

ペスト菌に感染したノミは、軍馬のたてがみやラクダの体毛、ある時には積荷や鞍袋に潜むクマネズミに隠れていた。それらは、モンゴル支配下のシルクロードを猛スピードで運ばれた。ペストに感染された遠距離貿易の中では品々の運び手が移動途中で何度も変わる。それと同様にペスト

菌も途中で何度も立ち止まりながら旅程を先に進めていった。道中の各隊商宿でペストは、従業員、宿の主人、宿泊客の命を奪った。生き残ったものはあちこちに散らばり、各地の地上性げっ歯類の個体群に病気をうつしたためペストはさらに拡大した。1345 年にはカスピ海北岸のアストラハンに、その直後にカフファに襲いかかった。

#### 第4節 ペスト菌のヨーロッパへの伝染の原因を作ったモンゴル帝国

カフファはペスト菌がユーラシアからヨーロッパに飛び火した基点地域になってしまった。カフファはモンゴル帝国拡大の中でその地を狙われており、町を包囲されていた。一方でモンゴル軍には前項の動きの中でペストが迫ってきており、その後瞬く間に軍隊を蝕むことになる。それがモンゴル軍撤退の原因となるが、その際にモンゴル軍がとった行動によりカフファもペスト菌による疫病に襲われることになる。その様子を見てみたい。

カフファはヨーロッパの最果ての町であり、はるか東へ中国まで広がるハン諸国との境界の目先のまちである。1266 年頃、ジョチ・ウルス(北西アジアと東ヨーロッパにまたがるモンゴル帝国を構成する集合体の一つ)は、カフファの土地をジェノヴァに売った。ジェノヴァは、シルクロード西端のクリミア半島に位置するその街の価値を知っていた。商人たちはカフファの船着場から奴隷をエジプトへ、東洋の贅沢品をイタリア、フランス、ヨーロッパ北部の大西洋岸の港へ輸送した。カフファの繁栄を目にしたモンゴル人は売ったことを悔やんだ。やがてカフファ略奪の誘惑に耐えきれなくなり、この新たに価値を持った土地をめぐる壮大な覇権争いが始まった。ジョチ・ウルス国のトクタ・ハンは、同胞のチュルク族がイタリア人によって奴隷として輸出されていることを口実にした。1307 年、トクタ・ハンは、カフファの東にある自国の首都サライに住むイタリア人を逮捕すると、同じ年にカフファそのものを包囲攻撃した。ジェノヴァ人は抗戦ののち、1308 年に火を放って町を放棄した。モンゴル人がカフファを略奪し尽くした後、ジェノヴァ人が戻ってきて街を再建した。

カフファの真東にあつてジョチ・ウルスの国の脅威にいつそう晒されていたのが、ヴェネチアの奴隷購入拠点のターナだった。1343 年に攻撃を受けると、ターナのイタリア人は西のカフファに逃げ込んだ。モンゴルは 3 年に渡りカフファを包囲し、石弓で断続的に攻撃を仕掛けたものの結局は失敗に終わった。1308 年の後、ジェノヴァ人はボスプラス海峡を通るカフファへの海上補給路を強化し、重厚な二重の環状壁で街の城壁を補強していた。

攻守両軍とも気づかないうちに、終末兵器ともいえるペスト菌による疫病が東からやってきて両軍を追い込んだ。当初それは攻撃側を壊滅させ、カフファで身を寄せ合っていたイタリア人に思い

がけない勝利をもたらした。ペストの猛威は凄まじく、カフファ攻撃軍は直ちに包囲を解かざるを得なかった。ところがモンゴル軍は撤退に先立って、ペストに感染した死体を石弓に載せて城内に投げ込んだ。その結果、カフファの籠城軍数千人はペスト菌に感染したモンゴル軍兵士と同じ運命をたどり街はペスト感染に襲われた。

カフファでの攻防で生き延びた数少ない人々の中には船乗りもいて、彼らはイタリアの母港に帰っていった。するとそこにはペスト菌を保菌したクマネズミが紛れ込み、ヨーロッパ各港に運んだ。ペスト菌はジェノヴァのガレー船でひっそりと南へ運ばれ、ヨーロッパとムハンマドの王国を灰色の廃墟に変え、中世で最悪の疫病による悲劇を引き起こした。ヨーロッパにおけるペスト感染については後頁に譲りたい。

## 第5節 モンゴル帝国衰退とペスト

モンゴル帝国の衰退要因の一つにペストの影響があったと考えられる。1368 年、明朝の中国人はすでにペストに冒されていた草原の大君主に反旗を翻し、その支配を脱した。中国からの撤収に象徴されるモンゴル帝国の衰退が、ペスト菌がおそらく草原全域に広がったと思われる時期にすぐに続いている事実がある。病気特に腺ペストとの接触が強まったことがモンゴルの軍事力を蝕んだ真の原因だったとは証明できないが、アムール河口からダニューブ河の河口に至る全域に住む草原の遊牧民が、初めて高致死性の感染症に接した結果として大変な人口減に苦しんだのは間違いない事実ということになる。そうとするなら、中国、ペルシャ、ロシア等の定住する諸民族に対するモンゴルの支配権を維持するために必要不可欠だった、軍事上の人的資源の補充が困難になった事情は想定できる。そして遊牧民の君主たちが、全アジアと東ヨーロッパ全土のかつて自分らが支配した農耕民によって打倒されたり吸収されたりしたことも説明できる。

商品を集め、輸送を確保し、あるいは隊商路の途上や隊商基地で売り買いすることを職としていたような人々が最もペストに感染しやすかったのは確かである。随所に発生した大量死は、モンゴルの征服事業後ユーラシア大草原に出現した隊商交通路を破壊し去るに足りた。モンゴル人が、草原地帯特有の生活に内在する軍事的可能性を最大限に発揮することに成功したため、ユーラシアの遊牧生活を疫学的に大災害に見舞わせることになり、遊牧民の戦士も牧者も商人も遂にそこから立ち直れなかった。1346 年を境にしてモンゴルの移動パターンは消え、16 世紀には草原地帯西部の人の流れは明らかに逆になっていた。1405 年にティムールが死ぬと、モンゴル人の攻撃の勢いは失われた。以降、凶暴な騎馬戦士が南隣りに住む文明的な農民を略奪することは徐々に

減っていった。カーンの国の消滅にともなって旧来のホップスの状況へ逆戻りし、数世代にわたるジェノヴァ商人が利用した中国への通路は消滅した。

ここでペスト蔓延がモンゴル支配下の元の弱体化を招き、当時の明朝(中国)の国家建設が進むことになったのか、当時の人口推移を見ることで考えてみたい。ペストが中国に侵入したのは1331年といわれており世界に蔓延したのは1347年以降である。1368年にモンゴル支配下の元からモンゴルを追い出した明へと体制が変わることになるが、ペスト蔓延を挟み明の時代の人は前述のウィリアム・バーンスタインが述べている通りで減少したとされる。例えモンゴル支配下の元から明への体制変換時に、戦争などでは残忍な行為をしたとされるモンゴルによる虐殺などの行為があったとしても、これだけの人口減少が起こるのは考えづらい。もちろん戦争以外の要因で人口減少が起こったことも十分考えられるが、ペスト蔓延の時期と重なっていることを考えると少なからずペストが人口減少に関わっていたと考える。一方で、モンゴルの人口推移記録は残っていないとされるものの、その影響は元及び明より大きくモンゴルは中国本土から撤退せざるを得ず、再び進出することはなかった。ペストの主な媒介者となってしまったモンゴル人が回復するにはやや時間がかかったと考える。

## 第6節 国家統制によりペストの影響を最小限に留めた明

ペスト蔓延を期にモンゴルを北へ追いやり、国家を確立させて行った明とはどのような国なのか、疫病の影響を一定程度に抑えたことには何が影響しているのかという観点で明を見つめてみたい。

モンゴルは様々な国を取り込んで拡大しユーラシア大陸を制覇したといっても過言ではないが、その支配下にあった元も同様の一国である。その元もモンゴルに支配されていた末期には、モンゴル関係者による権力闘争や官僚の不正、貧富の格差が広がることで国家が弛緩し国民に実害が及んでいった。そのような社会の中で元の中の有力者達が競い合っていたのである。

国家闘争を制したのは朱元璋である。数々の国内闘争に勝ち抜き、モンゴルをも追い出し中国を統一して明を興した。朱元璋は儒教的論理によって国家建設を進めて社会の隅々まで統制し、謀反や汚職を弾圧した。また国家建設においては里長を任命し相互に監視する社会を構築し、秩序維持のための法整備を行うことで国民を統制した。すなわち統制社会を作って行ったのである。外国に向けては朝貢を求めることで中華思想の原点伴う中華中心思想を展開し、貿易によって国力を増強した。一方で国内外の人々の越境移動は制限し、流動性の低い社会を構築した。これらは元末の弛緩の経験から国民が求めたものであるとも思われ、結果として明の国力は増したので



あった。

これだけの社会統制を利かせた社会であり、国民の行動もコントロール下におけた閉鎖的で流動性の低い国家であった明は、疫病対策でも一定の統一感持った対策を打てたのではないか。一方で移動と交流が活発であった流動性の高いモンゴルは、記録こそないもののペストの影響を正面から受け中国から撤退せざるを得ないなど国家衰退につながっていったと考えられる。疫病下においては社会統制が取れた国家の方が有効な対策をとれ、有効的な疫病対策をとりウイルスや細菌と上手に向き合い共生していくことは国家維持にも関連性があることが、この時代を振り返って見ても考えられるのではないか。

## 第7節 経済的な背景

人は世界を移動し人々と交流の中で歴史を刻み発展を遂げてきた。同時に人を宿主とするウイルスや細菌は人と行動をとるに人から人へと移り住むことで種を維持してきた。移り住む対象がおらず、宿主にも抗体や耐性が付いてくると、そのウイルスや細菌は種を維持できなくなる。しかし、人は完全にウイルスや細菌を避けて生活することは困難であり共生するという考え方を持つ必要がある中で、それらをコントロールしていくことが必要になる。人に有害なウイルスや細菌が蔓延する中での無防備な移動と交流は、人を宿主とするそれらにとっては種を保存していくには絶好の環境となり、宿主である人に対する影響は広がる一方である。

これまで述べてきたペストあるいは現代における新型コロナウイルスも、人の移動と交流の中で疫病として拡大し人の生命や生活様式等に大きな影響を与えた。それらの影響を最小限にとどめる取り組みは過去も現代も様々行われてきたが、各個人あるいは一定の集団で行っても効果が極めて限定的であり、人の移動と交流の抑制を世界で取り組む必要がある。昨今発生している新型コロナウイルスへの国々の対応とその結果を見つめると、その国の方針あるいは政治思想(イデオロギー)が、感染拡大の結果に大きく結びついており、国々がそれぞれ選択してきた思想の課題をあぶり出し、再考するきっかけを与えたのではないかと考える。

新型コロナウイルスの発生源とされる中国では、疫病発生直後は対策や世界に対する必要な発信を行わなかったとされるが、感染症が拡大する中で国家が主導し強力な統制を行うことで結果としてアメリカや南米、ヨーロッパなどのように多数の死者を出さずに至ったとされる。移動制限を含めた都市の封鎖にも着手し、人の行動も監視することに加え IT も活用し人と人との接触を避けた取り組みも行われた。人々を統制した中国国家の危機への強力な取り組みが功を奏したともいえ、

疫病の有事には有効であったと考えることもできる。

一方で、アメリカやヨーロッパなどの自由主義国においては、中国のように人の移動と交流に制限をかけることは困難であり、必要な対応を個人にまで求めることに至らなかったことから、感染症の影響は瞬く間に拡大し、多くの死者を出すなど影響を及ぼした。ジョルジョ・アガンベンは「規制なき自由主義グローバル化の一つのかたちが、諸々の危機とウイルス蔓延に対するその傾向によって死につく」と述べている(現代思想,2020,vol.48-7,P.30)。人の誕生よりはるかに歴史を刻んでいるウイルスや細菌と向きあうという点で、国家あるいは世界がどのようなスタンス(思想)で対応していくことが有益であるのか冷静に考える必要があるのではないだろうか。

人を宿主とし、人の特性である移動と交流の中でウイルスや細菌が移り住んでいくことを考えると、現代でいえばそれらの正体が特定され、有効なワクチンが開発され人に接種し抗体ができる、あるいは特效薬ができるまでは、上手に共生するために必要な対策を打つ必要がある。そのためには個人や一定の集団での対策では不十分であり国家あるいは世界で対策を講じること前述の通りである。一方で世界の国はそれぞれの政治思想を持っており、必ずしも共通の対策を打てるわけではない。このような中でグローバル化された世界で疫病対策として最大限できることは、政治思想や人々に対する社会統制をどれだけとるかは各国で異なるとしても、ウイルスや細菌と向き合う時には、人々の生活への一定の強制力のある対策を、期間や範囲を決めて発動させ足並みをそろえて疫病の収束に向かわせることが必要ではないだろうか。その際には各国同士の違いを相互に理解しながら、共通の目標を定めることで協働していくことは疫病を早期に収束させ人々の生命を守る意味でも有意義なことであり、共通の目標に向かって歩む中で疫病と向かい合う機会だからこそ、通常では難しい各国同士の相互理解が進むきっかけとすることはできないだろうか。有事の時だからこそできることに目を向ける視点を持っても良いのではないか。

ただし、疫病蔓延下をいう機会を利用して、必要以上に社会を統制していくことで人々の権利を奪うきっかけにするリスクも意識しておく必要があると考える。国家や人々が理性を持って適切に有事に対応していくこと、そして有事だからこそ相互理解を進めることが世界の平和と安定に寄与できるのではないかと筆者は考える。

## 第2章 欧州のペスト

### 第1節 ペストの感染拡大の原因と対策

ペストは今まで一回目で5世紀にエジプト、二回目で13世紀にヨーロッパ、三回目で18世紀に中国を中心にパンデミックを起こした。そして主に紹介するのはその中の第二のパンデミックであるヨーロッパでのペストが発生した場所についてである。まず一回目のペストが発生した場所はスエズ地域だと「ペスト大流行」を著した村上陽一郎氏の考えを推す。スエズ地域では、年間を通して夏が長くペストが最初に媒介したとされているコウモリもスエズに生息している可能性があると考えられている。そのためペストが蔓延しやすく、ペストの発育適温は28℃～30℃とされていることから最高気温が28℃になる4月からスエズ地域でペストが発生したと推測する。

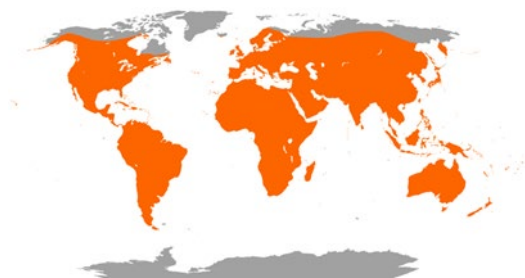


図1 コウモリの生息地

出典:「コウモリの生息地」The Encyclopedia of Animals: A Complete Visual Guide Hardcover - Illustrated, November 3, 2004 (P.92)

当時14世紀ごろにヨーロッパで世界を巻き込む第二のパンデミックが起きたのだが、そのパンデミックを起こした要因がモンゴル帝国だと言われている。モンゴル帝国は周りの国々をモンゴル帝国の領土に収めつつ帝国内で貿易をしていたが、1300年頃に中国でペストが発生し、そこからペスト菌を媒介させたネズミが貿易物資に入り込みノミから人へと移るようになり、人口が密集しているところから感染が広まったのである。

その後ペスト菌は、モンゴル帝国を汚染した後人から人へと移っていきながら徐々にヨーロッパへと進んでいった。その進行を加速させたのは、カフファの避難民と言われている。1346年キプチャク・ハン国のジャーニー・ベク・ハン率いるモンゴル軍がカフファへ侵攻し、圧倒的な強さで籠城戦にまで追い詰めたのだが、その矢先にモンゴル軍内にペストが蔓延した。その後軍内でペストが蔓延し、攻城をする余裕がなくなり撤退を余儀なくしたのだが、撤退する際にペストに感染したモンゴル軍兵士をカタパルトでカフファへと投擲したことでカフファの城内にもペストが感染してしまった

のである。



写真 2 モンゴル軍が投石をするために使っていたというカタパルト(投石器)の復元

出典:trebuchet, catapult, medieval weapon, castelnaud chapel, middle age, dordogne

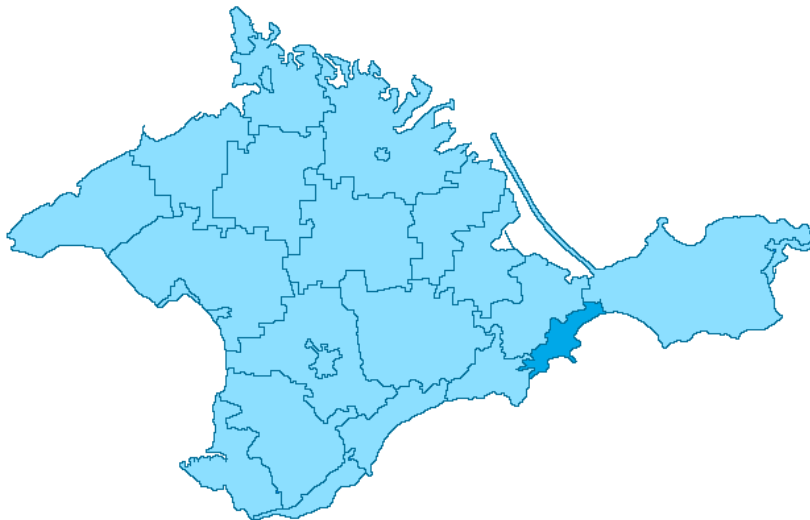


図 2 クリミア半島の都市であるカフファ(現在のフェオドシヤ)

出典:「フェオドシヤ-wikipedia」

徹底防御を固めていたことで密の環境が作られていたカフファはペストにとって好条件だった為、

一気にペストはカフファ中に広がり多くの感染者と死者を出し、遂にカフファの住民と兵士はカフファを捨て海路を使い船で別の生活の場を探しにいったのである。

そして避難民がコンスタンティノープルの港に降りたことで汚染され、その後ヨーロッパとモンゴル帝国の間に繋がった東西交易ルートによってコンスタンティノープルのみならずヨーロッパ中の港にペストが入り込んだ。その結果、モンゴルから得た貿易品を海路に渡り各ヨーロッパ中の都市や地域に送り込んだことでヨーロッパ内でのパンデミックが起きたのだと考える。

結論と言えるのは、第二のパンデミックでペストを発生させた原因はモンゴル軍だとしても、それを蔓延させたのはグローバル化によって全世界と交易できるようになった経済にあるということだ。グローバル化自体は良いことではあり、これが進んでいったことでどんなに遠くとも物によって友好関係を築くことが可能になり国を発展させることが出来る。しかしそのグローバル化した経済を優先したことでペストが全世界へと拡散し、歴史的なパンデミックになったのである。その中で現代にまで残された課題はウイルスや細菌に対しての危機感の薄さだと考える。現在もペストは治療により85%は助かるようになったとは言え中国、アメリカ、南米などを中心として今も猛威を振るっているとされている。何百年経っても尚世界に残り続けているウイルスや細菌というのはグローバル化が完成しつつある現代において非常に脅威である。しかし今回のコロナも流行していたものの経済を回し、人の移動をさせ続けていたことで全世界約6400万人の感染者を出す大パンデミックが起きてしまったのである。

以上から考えたことはモンゴル軍があまりにも国を大きくしすぎたことでこれほどのパンデミックが起こったのではないかということだ。経済的にはアジアとヨーロッパが貿易を行うきっかけとなり、世界全体を通したグローバル化に貢献したのだがそれ故にペストが発生してすぐに世界をペストが覆ってしまったので、国を大きくすることやインフラ、グローバル化には感染症という観点では相当のリスクが存在するのだと思った。

## 第2節 ペストによる人口減少と社会への影響

### 第1項 ペストの種類と致死率

ペストは症状によって、3種類に分類される。腺ペストは、ペスト菌を保有しているノミによる刺咬や、ペストに感染した動物等との接触によって傷口や粘膜から感染する。通常、2～6日の潜伏期

間の後に発症する。ペスト菌は、感染部位のリンパ節へ移行し、大きく腫れあがり、炎症が起きて激しい痛みが伴う。また、発熱や頭痛、倦怠感などの全身性の症状が出る。3 日目頃から、全身の皮膚に紫斑や小さい膿疱が現れる。重症化すると、敗血症へ移行し、死亡する。敗血症型ペストは、リンパ節が大きく腫れあがるなどの症状は現れず、血流感染から敗血症へ移行することがある。腺ペストが悪化したことによる病で、血液循環機能の低下をもたらす。通常、発症後 4 日程度でショック症状や手足の壊死、紫斑などが見られ、その後 3 日程度で死亡する。肺ペストは、腺ペストの末期症状であり、腺ペストと肺炎を併発している状態である。この状況になると、既に肺胞が壊れており、血痰や喀血などを出すようになる。発症後、激しい咳に伴う血痰を吐き、急激な呼吸困難や嘔吐などにより、最後は血液中の酸素濃度が低下してチアノーゼが現れ、通常 1 日以内に死亡する。抗生物質が存在していなかった時代は、感染すると非常に高い確率で死亡した。患者の住環境や衛生状態、社会状況などが複雑に絡みあうため死亡率は明示が難しいが、腺ペストによる死亡率は比較的 low、肺ペストによるそれは high、敗血症型ペストのそれはほぼ 100%であった、とされている。(宮崎 2015、P.5～P.6)

## 第2項 最近の発症事例と致死率

ペストは過去の伝染病だと考える人は多いのではないか。ペストは 1899 年に関西を中心に流行した。しかし、日本においてペストの犠牲者は、海外と比較して少なく身近に感じにくいことも一つの要因として考えられる。しかし、2000 年以降もペストは世界で発症していた。例えば、2017 年 8 月には、マダガスカルで都市型の肺ペストが流行した。厚生労働省検疫所によると、2017 年 8 月 1 日から 11 月 24 日までに、感染の確定患者及び可能性の高い患者や疑い患者の合計が 2,384 人報告され、死亡者は 207 人で致死率にすると 9%程度であった。報告された患者の 7 割強が肺ペストであり、15%程度が腺ペストとされ、1 人が敗血症型ペストに分類された。このように、抗生物質等による治療によって、致死率は抑えられているが、近代でもアフリカを中心にペストが発生している。(厚生労働省検疫所 HP 2017 年 11 月 30 日更新、ペストの発生報告)

ペストの発生地域 ※2010～2015年のデータ

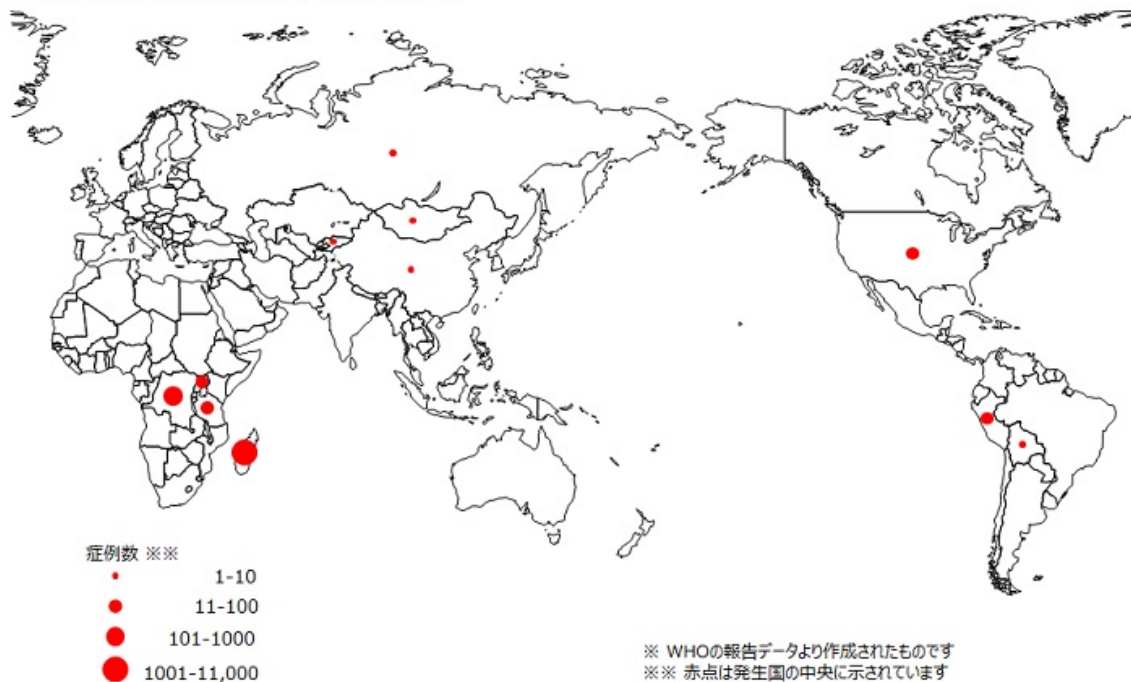


図 3 ペストの発生地域

出典:厚生労働省検疫所 <https://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name37.html>

### 第3項 14 世紀のペストによる人口減少

1340 年代後半からヨーロッパで大流行したペストの犠牲者数は多くの文献で記載されている。

フローサルが書いた「年代記」の文中では、「なぜなら、流行病と呼ばれる病気が当時世界中に広まっていて、それで世界の三分の一の人びと死んだからであった。」と記載している。その後、前後の文章が切り離されて、ほかの年代記から現在の中世史の概要書に至るまで記載され、一般的知識になった。また、ゴードフリートは、ヨーロッパ全土の死亡率を 25～45%の間とする。それに対し、ベネディクトヴはペスト当時の総人口を約 8,000 万、死者を約 5,000 万人とする。比率にすると 62.5%と高い死亡率になる。(宮崎 2015、P.95)

しかし、当時のヨーロッパ全体の人口統計などではなく正確な数字を出すことはほとんど不可能である。よって、死者数や死亡率は参考程度に捉える必要がある。2020 年 8 月 15 日(土)に実施した、後述黒川知文氏も、最低 1/3 が死亡したとしており、死亡率は 3 割から 4 割強程度と考えられる。一方で、人口の減少はペストのみでなく、戦争や飢饉、逃亡、避難など様々な要因が影響する。

よって、ペストによる直接的死亡者数は推計の域から出ない。

|          | 総人口      | 死亡者数     | 死亡率    |
|----------|----------|----------|--------|
| ゴットフリート  | —        | —        | 25～45% |
| ベネディクトヴ  | 約8,000万人 | 約5,000万人 | 62.50% |
| J・C・ラッスル | 約7,350万人 | 約2350万人  | 32%    |

図 4 ペストによる人口減少

ペストの歴史 宮崎 揚弘 (P.96 より作成)

#### 第4項 イタリアでの死者数

宮崎揚弘(2015)は著書で次のように述べている。イタリア全体では、多数の研究者のみるところでは、死亡率は40%から50%の間と考えられる。ペストの感染は、人と人とが密接し、接触することなどにより拡大しており、商業活動が盛んであったヴェネチアやジェノヴァなどの湾港からイタリアへ侵入しジェノヴァでは人口の30%から40%が減少した。湾港で大きな被害を与えたペストは、その後にフィレンツェやシエナなど内陸へと侵入した。ベネディクトヴは、トスカーナ地方全体では死亡率が50%から60%であったと推測している。異質なのがミラノである。ミラノの死亡率は15%程度と見られる。大都市において、交易も活発であったが、ほかの都市と違いミラノはヴィスコンティ家の専制政治であった。このヴィスコンティ家はペストの情報を入手すると、隔離策を強行した。そのためミラノは、他都市と比較して非常に低い死亡率に抑えることが可能となった。(宮崎 2015、P.97～P.98)

#### 第5項 フランスでの死者数

宮崎揚弘(2015)は著書で次のように述べている。ベネディクトヴによるとフランス全体の死亡率は、総人口の60%程度としている。フランスでは、主要な湾港であるマルセイユからペストは侵入した。マルセイユでは、多くの人口が失われ、50%から60%の死亡率とみられている。その後、ペストは拡大してプロバンス地方の中小都市や農村では、1340年から10数年間で人口の60%以上が減少したともいわれている。プロバンス地方で猛威を振るったペストは、アヴィニオン地方へと広がり



そこでの死亡率は 50%を超えるなど、被害を拡大させていった。アヴィニオンからは、ランドック地方とリヨン地方へ拡大していき、大都市であるパリへと流行していった。パリでもペストの脅威は衰えることなく、死亡者は 1347 年から 1353 年で 50,000 人との推計値をだしている。その後、中部のポワトゥー地方に被害を拡大していった。

#### 第6項 イングランドでの死亡者数

宮崎揚弘(2015)は著書で次のように述べている。イングランドでの死亡率は多数の研究者の主張によると、50%から 60%後半であると考えられている。14 世紀のイングランドは農村社会で、多くの人々が 1,000 人以下の村落に居住していた。このような環境下で、ペストの人口減少について、荘園毎に死亡率は差が出ていることがわかる。このように、死亡率は、荘園毎に異なっているものの、高い死亡率となっており、ペストによる人口減少は中世ヨーロッパ各国に甚大な影響をもたらしたといえるであろう。(宮崎 2015、P.104～P.108)

| 荘園              | 州        | 死亡率(%) |
|-----------------|----------|--------|
| カルストック          | コーンウォール  | 62     |
| クライムズランド        | コーンウォール  | 42     |
| 司教領ウォールサム       | パンプシャ    | 65     |
| コーハンプトン         | パンプシャ    | 54.5   |
| ダウントン           | ウィルトシャ   | 66     |
| プライトウェル         | バークシャ    | 29     |
| オウキントン          | ケンブリッジシャ | 70     |
| ドライ・ドレイトゥン      | ケンブリッジシャ | 47     |
| フィングリス          | エセックス    | 63     |
| ウォールシャム＝ル＝ウィロウズ | サーフォーク   | 60     |
| ヘイクフォードホール      | ノーフォーク   | 50以上   |
| ピリンガム           | ダラム      | 55     |
| ニュートンビューリ       | ダラム      | 59     |
| ウォルヴィストン        | ダラム      | 41     |

図 5 各荘園の死亡率

(ペストの歴史 宮崎 揚弘 P.106 より作成)

## 第7項 資産の移転

ペストは多くの人々を恐怖に陥れ、多数の尊い命を奪い取っていった。一方で、ペストの被害から生き残った人々には、合法・違法に関わらず、相続などに伴い資産の移転が発生した。これにより、ペスト流行以前は資産をほとんど所有していなかった人々が急に多くの資産を保有することとなった。突然、大金が舞い込んできた人々は、贅沢を堪能した。馬を買う者や衣服などに多くの金銭を費やす者も増加していった。このような行動により、消費活動が活発化し、物価は上昇していった。また、大幅な人口減少に陥っていた時代に、働かずして大金を手に入れた人々により、人手不足は更に進み、賃金の上昇を引き起こす要因の一つとなった。

## 第8項 賃金の上昇

ペストによる大幅な人口減少は、人手不足を発生させ、賃金の上昇を引き起こした。例えばパリでは、屋根葺き職人と石工の賃金は 1346 年から 53 年に 3 倍となった。このような賃金上昇について、パルマの年代記では、次のように記述している。(宮崎 2015、P.122)

この疫病の時期には、働き手はいなくなった。作物は農場に置かれたままであった。－それを刈り入れる者がいなかったからである。1349 年には、日当として労働者に 13 ソルド(貨幣の単位で、1 リラ=20 ソルドだが、時代と地方によって内容が異なる)か 14 ソルド、あるいは 15 ソルドが支払われるようになったが、それでもその額でも労働者を見つけることはできなかった。また、女の労働者には 6 ソルドか 7 ソルド、あるいは 8 ソルドが支払われた。

このように、多くの人の死亡に伴う働き手の減少により、賃金の上昇は各地で見られた。

このような急激な賃金上昇を抑制するために、王権や地方行政当局は規制を導入したが、失敗に終わった。都市部のみならず、農村でも賃金の上昇は発生していた。このような農民の賃金上昇により、農民の生活水準は格段に良化していった。

## 第9項 農民の地位向上

14 世紀のヨーロッパは、農村を支配する領主と農奴の間で主従関係が存在する封建社会であった。このように、領主に支配された多くの農民が、農奴として荘園で働くことで成り立つ社会であ

った。しかし、ペストの大流行に伴う人口減少により、領主の減少と農奴の減少など、封建社会を維持していくために重要となる両者に変化が生じた。例えば、農村を支配していた領主については、ペストにより死亡する者もあり、領主一族が衰退して消滅するような事態も生じていた。これを一因として、主従関係が崩壊することもしばしば発生した。また、農奴についてもペストにより多くの死亡者を出した。農奴の減少により、労働力自体が減少する中で、農奴の賃金は上昇し、領主の置かれた環境は次第に厳しくなっていた。また、賃金の高騰により、賃金の支払いが困難となる領主も増加していった。このような場合は、領主が賃料の代わりに、土地を賃貸という名で農奴に下り渡した。農奴は、一揆などで多くの犠牲を払って手に入れてきた権利や土地をペストによる環境の変化によって獲得することが可能となった。また、人口減少は前述した資産の移転などを発生させ、ペスト以前に資産をほとんど保有していなかった農奴が多くの資産を手に入れるケースも増加して、農奴の生活水準が飛躍的に上昇した。これらの要因を一因として、農奴の地位は向上していった。

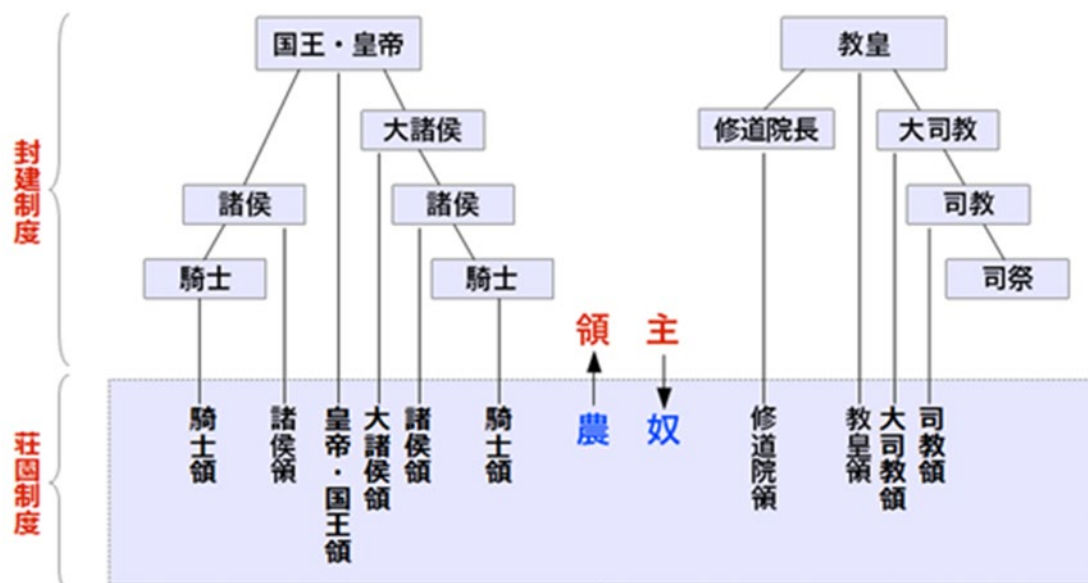


図 6 封建社会の構造

出典:[https://manapedia.jp/text/file\\_view?file\\_id=38\\_20130521195434](https://manapedia.jp/text/file_view?file_id=38_20130521195434)

#### 第10項 ペストがもたらした社会への影響

14 世紀に欧州を恐怖に陥れたペストは、多くの死者を出し、急激な人口減少を引き起こした。この急激な人口減少は、資産の移転や賃金の上昇、農奴の地位向上に伴う封建社会崩壊など社会

に大きな変化をもたらした。

2020 年 1 月に中国で感染拡大した新型コロナウイルスは瞬く間に世界中へ拡大し、社会に大きな変化をもたらしている。新型コロナウイルスは、多くの感染者を生み出す一方、感染死亡率は低水準で推移している。もちろん、死亡率を考えるうえで、14 世紀の欧州とは医学の進歩や衛生環境の変化など直接比較はできない。しかし、当時欧州で人口の 3 割程度が死亡したというペストが、社会や人々に与えた恐怖は新型コロナウイルス以上だと考える。一方で、新型コロナウイルスの死亡率はペストのそれよりも低いものの、社会に与えているインパクトはそれ以上ではないかと筆者は考える。要因として考えられるのは、情報化された現代特有の環境である。現代では、ネットを通じてリアルタイムで様々な情報やニュースが獲得できる。便利な世の中ではあるが、それに伴いフェイクニュースも増加している。情報過多であり、何が正しい情報なのか、判断を難しくしている。このような環境下で人々は情報に踊らされていると筆者は考える。これを判断するためには、全体知が必要である。パンデミックで人々が考える力を失っている時こそ、事実を確認し、自分自身で考えることが重要であり、その土台となるのが全体知であることを再度考えさせられた。

### 第3節 ペストが人々の心性に与えた変化

#### 第1項 ペスト以前～ペスト時代の欧州の気候・経済

11 世紀から 13 世紀のヨーロッパは温暖な気候に恵まれ、中世盛期とも呼ばれる豊かな時代であった。温暖な気候や生産用具の開発などを背景に、農地が拡大し余剰生産が生まれたことにより経済、都市間の交易が活発となる。経済的な活力が人々の生活を豊かにし、中央ヨーロッパを中心に圧倒的な人口増加がみられた。例えばイタリアでは 11 世紀 500 万人だった人口が、14 世紀初頭で 1,000 万人、フランスでは 11 世紀 600 万人が 1,900 万人、ドイツやスカンジナビアもおおよそ 3 倍となっている。(石坂 2012、P.38)

都市化が進んだことはやがて都市間の争いや、豪族と市民などの対立・互いの暴力行為などが生まれることとなった。当時の小都市は、せいぜい東京の皇居からその倍くらいの大きさの土地が城壁に囲まれ、その中で 1 万～数万人が身を寄せ合うように暮らしていた。現在の東京の人口密度は 1 km<sup>2</sup>あたり 6,378 人であるが、当時はそこに 1 万～数万人が暮らしていた計算となり、2 倍を優に超える人々が高層マンションもない中で窮屈に暮らしていた。

こういった生活は、共同体意識と共に、悪い意味での自尊心や身分への誇りなどが醸成され、自分の誇りを傷つけられたことによる復讐などが頻発していた。さらには教皇派と皇帝派にわかれて都市同士、もしくは都市の中を二分した覇権争いも行われていた。これらはキリスト教の「平和」の教えを無視したものであったといえる。有名なシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」も 14 世紀のイタリアが舞台となっているが、この物語の背景は当時の「家」同士の争いであった。

そんな中、14 世紀になって気候条件が一変し、飢饉の頻発、大地震などの天変地異など人心を荒廃させるに足る条件がいくつもあった。そこへ、いよいよペストが到来することとなった。

## 第2項 黒死病という名前について

ペストが「黒死病(英:Black Death、伊:Peste Nera(黒の疫病)、ラテン語:Nigrum Mortem(黒の死))」と呼ばれたのは後世 17 世紀に入ってからといわれているが、ペストが欧州で猛威を振るった 14 世紀には「ペスト」という固有名詞もなかった。1347 年欧州にペストが広がり始めた当時は「横根の疫病(Bubonic Plague)」と呼ばれており単なる疫病ではない特殊なものとして扱われていたが、段々とペストが欧州市内で常在し、不定期に繰り返し蔓延するようになった 15 世紀ころには単に「疫病」と呼ぶだけでペストを指すようになり、ある種ペストが日常的に存在するもの、疫病中の疫病と捉えられていた。

石坂はこれを現代日本に通じるいい方で少しユーモアをもって「日本語で「ご飯」(ライス)が、食事の親分格であり、そのまま一般的に「食事」を意味するのと少し似ているかもしれない」(石坂 2012、P.221)と表した。それだけペストが疫病の親分格、疫病といえばペストだったということがよくわかる例示である。知人の英国人もペストのことは「Plague(疫病)」もしくは「The Black Death」と呼ぶ。現代の欧州人も、中学生時代の歴史の授業は覚えていなくても、ペストがどういうものかは体験として知っている。ロンドン出身の彼は子供時代の夏休みにスコットランドを訪れ、ペスト患者を閉じ込めた地下室で幽霊を見たと言者に話していた。そこは今でも子供たちの夏休みの冒険地となり、生きた歴史を伝えている。そこには患者から感染を防ぐためのとがった鼻を持つマスクをかぶった案内人までいて、あたかも遊園地のお化け屋敷といった趣である。また欧州の街ではあちらこちらにペストを撲滅した記念碑が建立されたり、ペストの撲滅を祝う祭りが開催されたりする。医療の発達した現代、ペストは現代欧州人にとってすでに過去のものであるにもかかわらず、精神的には近い存在といえるのであろう。



図 7 ペスト医師

出典:パウル・フルスト 1656 年

### 第3項 ペストの入欧と人々の心性

13 世紀、托鉢修道士が欧州の広い範囲に教皇を中心とする教会制度と、キリスト教的な秘跡等の救済システムを伝播させたことで、人々のキリスト教的心性が隅々まで浸透した。当時の人々は教皇を絶対的な権威者として崇め、教皇に忠誠をつくした。(石坂 2018、P.210)

前項でも述べたように、14 世紀のヨーロッパではペストが日常化されたといえるが、当然ながらその猛威は当時の人々を震撼させた。発熱の後現れる腫物、異臭を持った膿疱、血痰、意識混濁、これらは必ず死をもたらした。徐々に周囲に広がりそのうち患者の部屋に入っただけでも感染し、高い致死率により次々と死んでいく。

やがて死者が多くなると、人間として弔われるということ自体が希少になる。死んだ人間はそのまま打ち捨てられ、またはまとめて運ばれて広場に掘られた穴に放り込まれ積み重ねられて最後に薄く土をかけられただけで終わりとなる。当時の人々は死に際し、丁重に扱われるべき人間としての尊厳が失われることを日常的に目の当たりにしていた。

人々にとって神は慈愛と平和の象徴であったはずのものが、1347 年のペスト入欧以降、神は許

しを乞うても与えない存在となり、人々にとって神は徐々に畏れの対象となっていった。

#### 第4項 欧州人はなぜキリスト教を棄てなかったのか

ペストの時期を経て、15 世紀から「往生術(伊語: Ars moriendi(死の絵))」が印刷・出版され、人々に流布されるようになってきた。これは文字の読めない民衆が、絵を見てどのように臨終に臨むかの方法を描いた死への手引書である。往生術図には臨終に際し横たわる病人の周囲にキリスト・神・聖母・天使・悪魔が配されている。これは数枚の連作として描かれ、死に臨むキリスト教徒が、信仰の力によりいかにして悪魔の誘惑を退けて神々の国に赴くかの技法が記されている。



図 8 Ars moriendi(往生術の一部)

出典: Meister E. S. 画、15 世紀

こうした往生術図に見られるように、人々にとって死が「聖職者に与えられるもの」ではなくなりつつある傾向がみられる。これは今までは聖職者に与えられてきた死を、自分自身で主体的に得ようとする傾向といえる。さらに、一部の富裕な人々は庭に教会をたて、神を直接的に自分のものとするようにさえなってきた。(蔵持 1995)

しかし人々がいかに聖職者から受ける死を自分で得ようと直接的なものにしようとしたとはいえ、

死は神に与えられるものであるという根本的な信仰、「神への信仰」から心が離れることはなかった。

教会と人々の生活の関わりには現代日本に生きる私たちとは全く違ったものがある。当時の欧州の人々は神なしでは生きられなかった。現代日本に生きる私たちが、宗教に対して真剣に向きあう機会がどれほどあるだろうか。もちろん特定の宗教に深く帰依する人々も多い。しかし、多くの日本人は自分が特定の宗教に帰依していると考えていないのではないだろうか。正月には有名無名様々な寺社に初詣に行き、クリスマスは教会に行く人は多いだろう。お盆は実家に帰省はすれども、先祖の墓参りまでする人はどれほどいるのだろうか。神棚や仏壇が自分の家にある一人暮らしの若者がいるだろうか。

筆者の祖父は大変熱心な神道の信仰者で、太平洋戦争中は食べるものもない中で、虚弱な自分を救ってくれた(と、彼が信じていた)教会のために多くの寄進をしていた。そのため、当時家族は大変困窮したそうだと。祖父はその後もずっと信心を続け、筆者が子供のころ、我が家には中ぶりの筆筒くらいの大きさの神棚が置いてあった。正月をはじめ年に何度も神棚に神様へのお供えが贅沢に置かれ、皆で祖父の後ろに座らされて、一緒にお祈りをしたものだ。祖父が亡くなった時、両親はこの神棚の扱いに困り教会に相談をした。教会は「神棚はモノなので、不要であれば処分してかまわない。信仰は心でするもの」という回答をくれた。両親は大変安心して神棚を処分し、その後筆者の家には信仰にまつわるものは何も残っていない。きっと父は、戦中戦後食べるものもない時代に、かき集めた全てのものを教会に寄進する祖父を苦々しく思っていただろう。筆者自身も子供のころあれだけ何度も教会にも連れていかれ、祖父が熱心に拝む姿を見ていたにもかかわらず、覚えているのは教会の老先生の顔くらいである。我が家にはあれだけ大きな神棚があったにもかかわらず、信仰心というものは全く根付かなかった。

もちろん我が家も少し特殊なケースかもしれない。皆が全てこうした過程を経ているのではないにしても、宗教を持たない世代は着実に広がりを見せている。どちらかというと一神教というよりは、万物に命が宿る、八百万の神を常にぼんやりと感じているというのが日本人の心性に近いのではないだろうか。

しかし、他の一神教の神に対する信仰を持つ民族にとっての宗教は全く違う。もちろん中世の欧州人にとっても、ゆりかごから墓場まで、人々の生活は教会とともにあり、死の秘術など聖職者が当時の人々の生活に与えた影響は大きい。むしろ人々の心が離れたのは、教会ではなく聖職者なのではないかと思われる。

ペストが蔓延した街から富裕層が逃げ出したケースは多くの文献にも記載があり、彼らがよその土地にペストを持ち込んだともいわれているが、その中に多くの聖職者が混ざっていた。死に際し



秘術を与えるべき彼らが自己保身のために我先に街から逃げ出していたことも多くの記録がある。

また、ペスト全盛期から少し後のこととはなるが、教皇が同時に二人存在する「大シスマ」(1378年～1417年)と呼ばれた時期も当時のキリスト教の混乱を表現している。日本の南北朝時代にも同時期に二人の天皇が存在し、それぞれに政治を行うという混乱の時代があった。これと同様に並びないものが二人同時に並び立つという混乱の時代があり、民衆も混乱したであろうが、まともな精神を持った聖職者であれば、聖職者の正義とは、教会の正しい在り方とは何かということに想いが至るであろう。

それ以外にも聖職者の妻帯や同性愛、贅沢な生活など、当時腐敗が進んでいた教会の例は多い。これらに対する反発は教会を批判する聖職者を誕生させることとなった。しかし、彼らは次々に異端審査にかけられては焚刑に処されることとなった。

これらの教会に対する一部の聖職者の批判が少しずつ大きくなり、のちにルターの宗教革命を生み出したともいえる。

キリスト教の信者であった人々の多くは、ペスト期を通じて信仰＝神を捨てることはなかった。しかし彼らの心性には、慈悲深い神が突如として怒れる畏れの対象となったことに深い恐怖の念を与えたことと推察される。そしてそれが一部の人々に教会＝聖職者の在り方に対する疑問を持たせ、正しい信仰は何かということを深く考えさせるにいたったことと推察される。

#### 第4節 ペスト時のユダヤ人迫害と迫害が後世に与えた影響

##### 第1項 ユダヤ人迫害とは

そもそもユダヤ人の迫害は、紀元前から潜在的に、時には顕在的に社会に存在していた。キリスト教の信者にとってユダヤ人は、キリストを十字架に送った罪深い人々であると常に考えられていた。またユダヤ人は土地の所有を禁じられていたため農業に従事することができなかった。さらに教会から就業に制約を受けていたことにも由来し、カトリック教徒に禁じられている金融業などに携わっていた。このため一般にユダヤ人は裕福なものが多かった。このようにユダヤ人が裕福で罪深い人々であることが迫害の一因となったといわれる。

さらにユダヤ人は時の政治に利用され、時には迫害が民族意識を高揚させ民族を団結させた。また、時には人々のユダヤ人への憎悪を高揚させることにより権力掌握が図られた。現状への不満

からユダヤ人を迫害し、彼らのスケープゴートに仕立てられるような社会的な要因もあった。

ユダヤ人の迫害は長い間ずっと続いており、その理由も上記のような要因が年代によって複雑に絡み合いながら形を変えてきたものと考えられる。

## 第2項 ユダヤ人とは

ユダヤ人とは、その起源をメソポタミア地方から放浪してカナンと呼ばれる地域に移住してきたセム系所属の支流であるヘブライ人にもつ。彼らの放浪・移住は、ヘブライ人の神ヤハウェが彼らのための用意された約束の地を手に入れるために要請されたもの、とされる。

前 1700 年ごろに飢饉となったカナンを離れエジプトに入り、イスラエル人と呼ばれたヘブライ人は、エジプトにおいて奴隷として働かされていた。指導者モーセの指揮のもとにエジプトを離れ、シナイ半島の北部を横断しカナンの地に戻ろうとした。しかし彼らがエジプトに入っていた間に住み着いていた民族をもう一度苦勞して追い出し、カナンを征服しなければならなかった。(ギ・リシャール 1996、P.28・黒川 1997、P.2)

その後のユダ王国・イスラエル王国というユダヤ人による王国の滅亡と、ユダヤ人のバビロン幽閉、ローマ帝国による支配・エルサレムの破壊を経て、ユダヤ人は戻るべき場所を失い、紀元 70 年ごろからディアスポラが始まった。ディアスポラとはもともと民族離散を指すが、特にパレスチナ以外の地に離散したユダヤ人を指す場合が多い。ユダヤ人はその後、地中海周辺のいたるところから欧州全域、メソポタミア、ヴォルガ川下流域、エチオピアなどに分散した。(ギ・リシャール 1996、P.61)

「ユダヤ人」として誰もが説明しうる、はっきりとした定義は存在しないといえる。ユダヤ教の信者、母がユダヤ教の信者であるもの、ユダヤ教の血統を持ったもの、イスラエル人など、様々な捉え方があり、明確に定義するのは難しい。

## 第3項 ペスト前の迫害の歴史

ユダヤ人への偏見は紀元前パレスチナがローマ帝国支配下となった地域において限定的に発生していた。パレスチナには紀元前 11 世紀ごろから非ユダヤ人が暮らしていたが、平時においてはユダヤ人・非ユダヤ人が争うことはなかった。しかしユダヤ人はパレスチナを神から与えられた土

地とみなし、「異邦人」との結婚を禁止し、交際も拒否していたため、非ユダヤ人は彼らを孤立した存在と考えていた。

シナゴークとはユダヤ教の会堂を意味し、礼拝の場であり、ユダヤ人の宗教生活、社会生活の中心の場となっていた。離散したユダヤ人が各地に増えるにつれ、シナゴークも各地に建設された。ユダヤ人は主にシナゴーク近くに集住することが多く、独自のコミュニティを形成していたことからその後も閉鎖的な孤立した存在とみられていたものと考ええる。

アウグスティヌスは著書「神の国」で、ユダヤ人が迫害されるに足る理由の多くを列挙しているが、必ずその後に「しかし」と文章を続けている。アウグスティヌスによれば、「しかしユダヤ人はキリスト教徒の勝利を見届ける役割を持っている。」、つまりユダヤ人はキリスト教会がその存続を望んだものとされる。(ケリー 2008、P.315)この「しかし」は 4 世紀ごろから数百年にわたり効果を発揮し、大規模なユダヤ人の迫害は起きていなかったといわれている。

その後、11 世紀に入り各地で少しずつ迫害により虐殺が起こるようになり、第一次十字軍における 1096 年 5 月ドイツのライン地方において、大規模な虐殺が起きた。これを契機に各地でユダヤ人の大規模な迫害が続き、14 世紀のペストの時代へと入っていく。

#### 第4項 ペストとユダヤ人迫害

14 世紀におけるユダヤ人の迫害はペストの流行の前から何度も発生し、多くはユダヤ人がキリスト教徒に毒を盛ろうとした、というものであった。社会的な不安や根も葉もないうさをきっかけにユダヤ人の虐殺が始まり、一度始まるとあちこちの都市に発展していった。この最たるものがペストの時期に重なっている。

当時、ユダヤ人が拷問にかけられ、キリスト教徒の使用する井戸に毒を入れるように指示を受け、その毒を持っていた。他のものにもその毒を投下するよう広めるように指示されていた、という自白が得られたという話が多くの都市で語られた。これをきっかけに迫害がさらに広がりを見せ、さらにはペストそのものがこの毒によってユダヤ人が広めたものだといううさも広がっていった。このことについては、17 世紀の編年家ヨハネス・ミュルナー(1565－1634)の『帝国都市ニュルンベルクの編年誌、1623 年』に以下の記載がある。(佐々木 2012、P.18)

既述のペストのために、ユダヤ人は毒物の入った小袋を泉に投下し、それによって全キリスト教徒を根絶するのが彼らの計画であったという疑いをかけられた。しかも数名の捕らえられた

ユダヤ人が、そのことを自供したといううさも広まった。それゆえペストはユダヤ人のせいにされた。普通に考えれば、盛られた毒がもたらすのはペストという病気ではなく、突然死であることは誰の目にも明らかなのだが。それにもかかわらずユダヤ人はドイツやロマンス語の各地で斬殺され、溺死させられ、火刑に処され、その他の方法で処刑され、その屍が山のように積まれた。アヴィニョンの教皇だけがただひとりユダヤ人を保護し、ドイツでも諸侯のなかにはユダヤ人を守ろうと奔走したものもあったが、彼らの身の安全すら暴徒によって脅かされ、結局彼らもなす術なくユダヤ人を引き渡さざるを得なかった。

異常時の人々の判断力の不確かさをはっきりと見るようである。実際ニュルンベルクはペストの被害にはあっていないが、ここにはペストを起こしたユダヤ人が虐殺されたことに対する懐疑的な意見が記載されている。このミュルナーの著述のように、後年の歴史家の中にはペストはユダヤ人が起こしたものだ、という噂があったからユダヤ人の虐殺に繋がっていったと時代の流れを書いている。これはこのように書くことでユダヤ人の虐殺の罪から逃れ、虐殺を無害化しようという意図が感じられる。

ユダヤ人を迫害することは神の怒りを鎮めるものと考えられた。異教徒を殺害することで神への贖罪とし、ペストから逃れられると考えた人々がいた。そのため実際にペストが入ってくる前にスケープゴートとしてユダヤ人を殺害し神に赦しを得ようとした。そもそも教会がペストを神の怒りとし、ユダヤ人を異端であると断裁したことにより、人々の迫害に加虐的な要素を加えたといえる。(蔵持1995、P.99)

また、アヴィニョンの教皇がユダヤ人を保護したという記述があるが、こうした形でユダヤ人を保護しようとする聖職者も多かった。しかし、当時の教会の説法はすべてラテン語で行われていた。告解に際して、聖職者は現地の言葉で話していたが、当時の人々には当然ラテン語は理解できるものではなかった。このためユダヤ人が「罪深い人々」であるといううわさ話のほうが民衆にとっては真実であった。当時、閉鎖され人口が密な都市の中で聖職者の説教ではなくうわさ話が広まっていき、こうしたユダヤ人が毒によりペストを蔓延させているという陰謀説が広まることとなった一因とも考えられる。

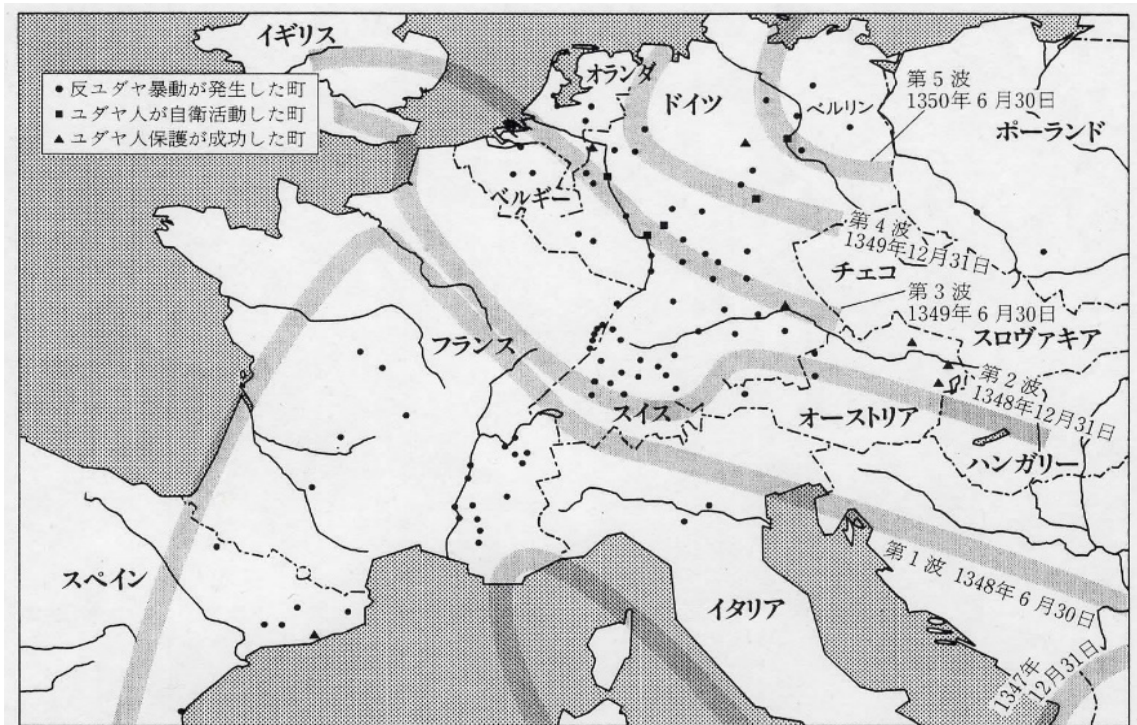


図 9 ペストの流行とユダヤ人迫害

出典：黒川 2019

少し余談となるが、当時は聖書もラテン語のものしかなく、各地の言葉で書かれたものの出版はまだ数十年を待たなくてはならなかった。聖書を読めば、ユダヤ人が「罪深い人々」であることは間違った解釈であることが正しく理解できるのであるが、当時の民衆は聖書を知るのは通説やうわさ話が情報源だった。このため聖書による正しい教えが広まらなかったものと考えられる。

#### 第5項 ペスト後のユダヤ人

この後、一度は棄教し虐殺から逃れたユダヤ人も厳しく制約された生活を余儀なくされ、それでもなお元の地を離れずに暮らした者もいた。ペスト期にドイツなどで迫害を受けたユダヤ人はポーランドやさらにその東のウクライナに移住した。(カンター 2001、P.182) ポーランドは国王自らがユダヤ人の保護を宣言していた。このため、ポーランドは第二のバビロニアと呼ばれた時代もあった。

彼らは、東ヨーロッパを中心にユダヤ人社会を構築したが、彼らの子孫こそが 20 世紀にナチス・ドイツのホロコーストの対象となった。(宮崎 2015、P.78)

## 第6項 ユダヤ人迫害を扱ったドイツの教科書

先に述べたユダヤ人迫害・虐殺の無害化はさらに後年 1910 年代のドイツの教科書において顕著に行われる。このころ初版されたドイツの教科書の半数近くは、これらのユダヤ人虐待が、「ペストによりユダヤ人が虐殺され、『高利貸し』から借金をしていた多くの債権者は借金を棒引きされた」、として記載されている。(佐々木 2012、P.55)教育に使われる図書において侮蔑の意味を含んだ「高利貸し」という言葉を使っていることは意味深く、いってしまえば、「殺されても仕方ない」という意図まで感じられるとはいえないだろうか。

## 第5節 フィールドワーク(ヒアリング): 中世民衆の宗教とユダヤ人迫害

インターゼミ・アジアダイナミズム班では、フィールドワークとして、2020 年 8 月 15 日に中央学院大学 黒川知文教授をお招きし、オンラインにより講演をいただいた。

黒川教授の専門が宗教学、欧州史であり、かつご本人が牧師であるということもあり、大変専門的で深く有意義な講義を受講させていただいた。講義は欧州班の問題意識に沿って、「ペストと宗教意識の変化」という副題に基づき 14 世紀の欧州史、ユダヤ人迫害について幅広いお話を伺うことができた。

当時のキリスト教徒であった民衆は教会ではほとんど説教を理解することができなかった。14 世紀ごろはまだ聖書はラテン語で書かれたものがほとんどだった。各地の言葉への翻訳はほとんどの場所で行われておらず、民衆が自分自身で聖書を読むことはなかった。また、教会での礼拝や聖職者の説教もラテン語で行われていたため、民衆は聖職者が話している内容を理解するということがなかった。このため、人々は教会で教わるキリスト教の教えよりも、うわさ話を信じた。ユダヤ教徒がキリスト殺しの罪びとであるという考えも、聖職者は間違いであることははっきりとわかっていたし、そのように民衆にも伝えていた。しかし当時の民衆はこれには耳を貸さなかった。

中世後期から民衆の識字率も少しずつ高くなり、このころから聖書を個人が翻訳することが始まり、民衆がわかるその土地の言葉で礼拝や説教などが始まったといわれている。

このため当時は絵画でキリスト教を教えることが普通で、教会にはイエスの生涯を示したレリーフなどが掲げられ、人々はイメージで宗教をとらえていたともいえる。

ユダヤ人は、早くにはディアスポラの前から地中海沿岸に移住しているものもいた。ライン川沿い

にフランスからドイツ、ポーランドへと移住するルート、もう一つはスペインへ入るルートが取られた。こののちドイツのユダヤ人は十字軍とペストの時代に東へと移住し、ポーランド・ウクライナに入る人々が多かった。ポーランドは一時、第二のバビロニアと呼ばれた時代もある。

ユダヤ人迫害は欧州全域で行われており、ペスト期のフランスやドイツの虐殺に比べて取り上げられることは少ないが、14世紀にはスペインでも虐殺が起きていた。ロシアでも1818年～1900年にかけて「ポグロム」と呼ばれる大量虐殺があった。しかしユダヤ人迫害はキリスト教徒の圏内に限られている。キリスト教徒はユダヤ人を迫害することによって自分たちの信仰心を強め、キリスト教徒としての団結力を強めていたともいえる。

ユダヤ人の中には改宗するものもいたが、ユダヤ教徒は自分が受けている苦難は、神が自分の罪により与えている罰、という意識が強く殉教思想も強い。殺されるのなら改宗するといった傾向が少なかったことから、歴史的な大量虐殺が何度も起こっていることにも繋がっている。

苦難に出会った時、人は他を責めることで心の平穏を得ようとする。ユダヤ人迫害にも同じことがいえる。

はっきりいえることは、歴史は繰り返すということである。時の経過によって物事の本質を見極めることができる。反対のことをいえば、時間がたたないと物事の本質はわからない。普遍的な要素を歴史から学び、それを生かしていくことこそが歴史を学ぶ意義である。

黒川先生のお話では、中世欧州史、ユダヤ史が詳細に生きた出来事として語られ、本を読むだけではわからない、先生が実際に欧州で感じてこられた歴史の重みを感じられた。また、我々がインターゼミ・アジアダイナミズム班でモンゴル史を学ぶこと、歴史を通して現代を見つめることの重要性を改めて実感させられた。

## 第6節 パンデミックに見る人々の分断に対する考察

ペスト期におけるユダヤ人の迫害のように、こうした恐慌時における他者迫害は、歴史の中で何度も繰り返されてきた。1910年、関東大震災が起きた時にも、関東各地で「朝鮮人が井戸に毒を投げ入れた」などのデマが流され、多くの朝鮮人が殺害された。また現在でも、コロナ対策の緊急事態宣言下における閉塞的な自粛生活は、ネット上に自粛ポリスなるシステムを生み出し、自粛ポリスたちはオンライン上に匿名で他人を糾弾している。

関東大震災時の朝鮮人虐殺は実際に起きた事件であり、政府もこの経緯を認めている。両国の

横網町公園には第 2 次世界大戦時の東京大空襲による犠牲者の慰霊碑がある。この横にこの時の朝鮮人虐殺に関する慰霊碑が建立され、毎年慰霊祭が行われてきた。それが近年、この迫害はなかったとする人々がこの慰霊祭に合わせてごく近所で同日に集会を催すようになった。彼らは「虐殺は嘘」「根拠がない」「実際に起きた暴動をとめようとした時に自警行為があっただけ」などと語り、政府も認める、記録ある虐殺の歴史をなかったものとしようとしている。

彼らの主張は 2020 年 9 月 4 日の毎日新聞記事によると、「(朝鮮人慰霊碑に記載されている) 6,000 人虐殺はウソ」「朝鮮人の殺害は事実だが、朝鮮人が犯罪や暴動を起こしたので自警団が自衛した」といったものだ。しかし、この虐殺の人数については、当時の記録にもはっきりしたものはなく、2008 年内閣府の中央防災会議がまとめた数字で、「震災による死者数の 1～数パーセント」、1923 年朝鮮独立派の独立新聞がまとめた 6,661 人などがある。当時、政府はこの虐殺の事実を隠蔽しようとし、虐殺された人の遺骨と震災被災者の遺骨を調査できないように処置せよ、という指示を朝鮮総督府警務局が出している。このことから、明らかに虐殺が事実で、隠蔽されたためにその本当の数がわからない、ということが読み取れる。

記事の締めくくりとして、毎日新聞記者は、「人数ではない。虐殺のあったという事実そのものが動くことはない。被害者が一人であっても二人であっても虐殺は虐殺だ」という。これらの虐殺はウソといっている人々は盛んに過去をなかったことにしようとしている。そしてこれらの活動は政治をも動かし、毎年この慰霊祭に追悼文を寄せていた都知事が昨年続き今年もこの寄稿を見送った。このことは、この活動者たちにとっては自分たちがあげた成果のように捉えられ、事実が捻じ曲げようとされているといえる。

過去、実際にこれらの事件の当事者たちが生きていたころにはこういった主張はされなかったにもかかわらず、彼らがいなくなった今、実際に歴史が書き換えられようとしている。こういう事実があった、にもかかわらず、こういう「不都合な」事実はなかった、としてこの場合には民族の分断が起きているのだ。

筆者は親戚の高校生から、彼らが関東大震災時における朝鮮人殺害についてどの程度のことを学校で教えられるのか確認をした。彼らの教科書にはほんの 4 行ほどの記載があり、「流言によるものでその背景として植民地政策に対する抵抗運動への恐怖心と、日本人のもつ差別意識が引き起こしたものである」という記述があった。(笹山 2017、P.331) たったこれだけの数行で、当時の虐殺の何が伝わるのだろうか。ドイツの教科書の歴史のように、捻じ曲げた歴史が書かれているわけではない。しかし現代に生きる私たちが歴史を知ることが、いかに大切なのか、実際に今回自分自身が詳しく知らなかったこの事実を知り、さらにそれをなかったことにする人々がいることを



知って、なおのこと我々が歴史を学ぶ意義を実感させられた。



写真 3 東京都墨田区 横網町公園内、関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊碑  
(2020 年 10 月筆者撮影)

こうした分断はなぜおきるのだろうか。

日本は単一民族で、こうした民族や宗教による迫害については理解が及びづらいとも考えがち

だ。しかし、実際に日本は単一民族ではないし、数十年前には長い間よその国を植民地化し他の民族を支配下に置いて彼らの尊厳を奪ってきた。そして今でも少しでも自分と違うもの、社会からはみ出したものに対して容赦ない罵声を浴びせている。

人の心の中には、他者を赦さない冷たいものや、自分の中に自然と生まれているバイアスが他者への評価に大きく作用している。自分に自然と生まれるバイアスは、自分が受け取る多くの情報の中からはぐくまれる。場合によっては政府による情報により洗脳されることもある。だからこそ、他者のデマに惑わされない知の力の重要性が必要となるのである。よいも悪いも多くの情報が入ってきて、その中から何が本物なのか、何が大切なことなのか自身が正しく判断できる知の力が重要だ。

寺島学長のコロナについて正しく知る、正しく向き合う姿勢には感銘を受けた。いわゆる専門家を名乗る人々の考察を聞き従うだけではなく、自分でこのコロナというものが何かを知ること、これはそのほかの情報に対しても同じことがいえる。歴史を知ることはその後の時の経過によって物事の本質がわかること、ということも同じことである。今回ペスト時における宗教に対する考え方、ユダヤ人迫害に対する研究を通じて、正しいことは何かを自分で判断できること、そのために知の力が重要であることを改めて気づかされることとなった。

### 第3章 パンデミックの日本への影響

#### 第1節 日本の神仏信仰と疫病の関連性

##### 第1項 はじめに

問題提起：日本の神仏信仰発展の裏には古代から受け継がれている国民性と疫病の影響があったのではないかな。

##### 第2項 日本における疫病の概要と背景

神道と仏教が共存する国、日本。もともと神の国日本で、仏教がこれほどまでに信仰される様になった裏には、古代から受け継がれている国民性と疫病の影響があったのではないかな。

かつて古代では病気を神仏の祟りとしてとらえてきた。特に天下に大流行する疫病は天皇の失政により天地に異変が起こり発生するとも考えられていた。

『日本書紀』によれば最初の疫病の記録は崇神天皇 5 年のことである。当時の疫病に対して天皇は齋戒沐浴し宮殿を忌み清めたり、祈祷を行うなどし、各地に天神地神を祀った。人々は疫病を天の神々や地の神々の支配で生ずるものと信じており、後の世まで疫病が流行るたびに大々的に祈祷が行われた。

次に『日本書紀』に疫病が登場するのが欽明天皇 7 年(546)である。『日本書紀』には欽明天皇 13 年に仏教が伝来したと記されており、欽明天皇が仏教の説を聞き歓喜したとされている。これに対し蘇我稲目が仏を祀ることに賛成するも物部尾輿が反対。天皇は蘇我稲目に個人的に礼拝することを許したが、国内に疫病が発生した。

物部尾輿らは、疫病は蘇我稲目が仏を礼拝したことで神がお怒りになられたせいとし、仏像を破棄するよう天皇に奉上した。

その後、敏達天皇 13 年(584)稲目の子、馬子が百済からもたらされた二つの弥勒菩薩を供養していたが病になり、占ったところ父の時代に破棄した仏像に祟られているという。そこでその仏像を供養するとまたしても疫病が発生したのである。それにより、物部守屋は、馬子が仏像を拝んだせいだとし天皇に訴え、天皇もそれを聞き入れ仏像を焼き払ったのである。すると今度は天皇と物部守屋が痘瘡(天然痘)にかかる。各地では大勢の人が痘瘡で亡くなり、これは仏を焼いたせいだ、といわれるようになった。

敏達天皇 14 年、3 月に始まった疫病は 6 月になってもまだ続いていたため、馬子が「仏を祀らないと疫病は治らない」と天皇に進言する。天皇は馬子個人で仏法を行うことを許したものの 8 月に崩御。「日本書紀」にはその頃から蘇我氏と物部氏の対立があからさまになったと記されている。それから 2 年後の用明天皇 2 年(587)4 月、天皇は病み、自ら仏教に帰依することを望んだ。物部守屋は天皇に、なぜ国神に背いて他の神を拝むのかと反対。この後蘇我氏と物部氏の戦いが始まり、同時に天皇の痘瘡も癒えず崩御される。

その後斉明天皇 3 年(657)、内大臣中臣鎌足が重病の際、天皇が百済の禅尼法明に維摩句をとねえさせると読経が終わる前に病が治ったという。これに感激した鎌足は山科に精舎を建て、齋会を始めたのだがこれが維摩会の始まりである。さらに持統天皇の御代に仁王会が始まり、聖武天皇の御代に大般若会が始まり、淳和天皇の御代から最勝会が設けられた。そののち、朝廷では疫病、飢餓、災害に直面するとこれらの経をとねえたという。

さて、ここまでの歴史からみても、仏教は定着するまで数奇な運命をたどってきたといっても過言ではないが、疫病無くしてはここまで定着しなかったともいえる。

日本書記では天照大神と倭大国魂という二柱の神を天皇のいるところに同時に祀っていたため、疫病が発生したとされた。

また、「古事記」のイザナギとイザナミの神話では、死の国である黄泉の国から帰ったイザナギは「穢れの国に行ったため自身が穢れた」とし、禊を行う。そしてその禊の際に次々と神々が生まれ、天照大神もこの時に生まれている。

一方神道が穢れを遠ざける宗教に対して、仏教は穢れを救済する宗教であった。光明皇后には「身体中が膿だらけの病人が膿を吸ってくださいと懇願したので、仏教に深く帰依し慈悲深い光明皇后は膿を吸い出してあげた。するとその病人は光り輝く阿閼仏に変わった」という有名な伝説がある。神道ではそうした病人は穢れとして遠ざけ救済はしなかったが、その代わりに救済を担ったのが仏教といえるのではないか。

### 第3項 疫病によってもたらされたもの

天平7年(735)には災害が多発し、疱瘡などの疫病が流行した。その際藤原不比等の子4人が相次いで死亡。天平9年、聖武天皇は国ごとに国分寺創建の詔をだし、国家鎮護を祈念。天平15年には盧舎那仏造像の詔を發布し、天平19年9月から工事開始、天平勝宝元年に完成した。歴史的建造物である東大寺の大仏は、まさに疫病によって造られたといっても過言ではないだろう。

また、京都の祇園祭であるが、古くは祇園御霊会と呼ばれ、貞観11年(869)に京の都をはじめ日本各地に疫病が流行した際、祇園の神を祀り神輿を送って災厄の除去を祈念したことに始まる。さらに、『備後国風土記』には、由来不明の武塔神(牛頭天王、スサノヲと習合する)が南海に旅をした際、蘇民将来が粟で作った食事で厚くもてなしたことに喜び、疫病流行の際「蘇民将来子孫也」と記した護符を持つ者は疫病より免れると約束した。その故事に因んで、祇園祭では「蘇民将来子孫也」の護符を身につけて祭に奉納する。

これらのことからわかるように、日本の歴史的建造物やユネスコ無形文化遺産の祭礼などが疫病によって始まったのである。

#### 第4項 まとめ

日本に古くから伝わる行事は、神社や寺院を身近なものとさせ、無意識のうちに日本人の「穢れ」を「禊ぐ」DNA に刻み込んでいった。例えばお宮参りや七五三、年越しの大祓や初詣など、日本人は多くの行事の中で神社仏閣を訪れる。その際、お参りの前にはまず身を清める、すなわち手水を行うという習慣が小さい頃から身についていくのだ。こういった中で、誰に教わるでもなく、「汚れは水で洗って清める」という観念が日本人に根付いていったと考えられる。

また、古来からの「穢れ」を「禊ぐ」神道の観念、またそれだけでは不十分な点を補ったのが仏教だった。仏教は穢れたものを見捨てず、救済する。疫病によって、様々な困難にみまわれた人々が、仏教を心の拠り所とし救いを求めたといっても過言ではない。また仏教伝来の際の疫病の流行など数奇な運命を辿りつつも、疫病なしでは神の国日本での仏教定着は難しかったのではないかと思われる。

### 第2節 13 世紀から 15 世紀の日本と感染症

#### 第1項 モンゴル帝国の雲南侵攻から元のペスト拡大まで

ペストは 1253 年モンゴル帝国が雲南省・ビルマに侵攻したことに端を発し、1331 年には中国全土に拡がり、1347 年からヨーロッパへと拡大していったといわれる。そこで疑問となるのが 1253 年から 1331 年の中国でのペスト発生までの約 80 年間という期間の長さである。モンゴル帝国の人々が 1253 年の侵攻によりペスト菌を持ち帰ったものなのか、或いは 1331 年に近い年代にすでに領土となっていた雲南省・ビルマの地域から中国全土に拡がっていったのか、いずれの解釈が事実であるのかという疑問である。

そのことについては、ウィリアム・H・マクニールが著書にて次のように述べている。(ウィリアム・H・マクニール 2007、P.26)。

一番の難点は、中国の記録には華北に疫病が発生し人口の 10 分の 9 が死んだとされる 1331 年まで、そうした異常な事態が全く記されていないことである。それ以上の広い範囲に広がった災厄の記録となると、1353-54 年まで、現在生活様式は大きく変わっていくことになった。たとえば参照し得る資料には出てこない。中略。そうした研究が実現するまでは、われわれは

1347 年にヨーロッパにあれば高い致死率を伴って突発したペストが中国に現れたのは、1331 年より以前ではなかったと考えざるを得ない。そしてそういうことになると、パストゥーレラ・ペスティスが草原の穴に新しいすみかを見出したのは 1250 年代という早い時期だったとは、容易に信じるわけにいかなくなる。もしそうだったなら、中国がペストと遭遇したのは 1331 年よりずっと前でなければならないことになり、マルコ・ポーロが伝えるフビライ汗(1260-94 年在位)の宮廷の豪華絢爛たる輝きはあり得なかっただろうからである。中略。結局のところ、最も可能性が高そうな解釈はこうなる。パストゥーレラ・ペスティスは 1331 年中国に侵入した。それは雲南省ービルマに古くから自然に存在する中心地から直接広がったか、あるいは、満州ーモンゴリアの草原の穴居性げっ歯類に最近確立したばかりの感染源から流れ出たかのいずれかである。その後 16 年間、この感染症はアジアの隊商路を旅し、1347 年クリミアに到達する。

つまり、80 年間近い空白期間があるとは考えられないことから、モンゴル帝国が雲南省・ビルマに侵攻し領土とした 1253 年以降の、限りなく 1331 年に近い時代にペストが中国全土へ広がったという解釈であると理解するのである。

1253 年の雲南省・ビルマへの侵攻以降 1331 年の中国でのペスト発生までの間のできごとについて考察してみる。1259 年第 4 代モンゴル帝国皇帝であるモンケ・カーンが釣魚山を包囲中に伝染病で死去したとされる事実がある。この事実に対して杉山正明は述べている。(杉山 1996、P.140)

その時、なんらかの疫病が四川のモンケ軍を襲った。『集史』はそれを、「ヴァバー」という。ペルシア語・アラビア語で、「伝染病・赤痢・コレラ」などを意味する。厳密に何であったかはわからない。いわゆる、「ペスト」ではないかと憶測した人がいる。もしそうであれば、14 世紀にモンゴルを中心としたユーラシアの巨大な繁栄をつぶすことになる黒死病は、13 世紀の半ばすぎに東方から発したことになる。しかし、「ペスト」だと決めることのできる証拠はない。ともあれ、1259 年 8 月、モンケは「ヴァバー」に倒れた。

モンケ・カーンは確かに疫病で死去したのだが、それがペストであったか否かは不明である。しかし、前述のウィリアム・H・マクニールの見解と照らし合わせると、モンケ・カーンが死去した 1259 年は、ペストが中国にはまだ広がっていない時期といえる。したがってモンケ・カーンを死に至らしめた疫病はペスト以外のものであったと想像することができるのである。

いずれにしても、モンケ・カーンの死が、その実弟であるクビライをその後の第 5 代モンゴル帝国カーンに導き、そのクビライ・カーンが東西交流を発展させ、経済によるモンゴル帝国のユーラシア興隆を実現させたことに繋がっていることも、まぎれもない事実である。

さらに、1274 年と 1281 年に 2 度に渡るモンゴル帝国の日本への攻撃、いわゆる元寇が起きた。



日本は中国と海を隔てていたため、ペストは発生しなかったという説もある。しかし元寇の時代は、前述のウィリアム・H・マクニールの見解によると、1331 年よりも 50～60 年以前であり、中国にもまだペストは発生していなかったためという解釈が正しいと考えるのである。

元寇の時代の日本の感染症及び、1331 年の中国でのペストの発生から 1347 年以降のヨーロッパでのペストの拡大期になぜ、日本にペストは流入しなかったのかという、問題意識について次項以降で考察してゆく。

## 第2項 13 世紀元寇と日本における感染症

本項では、1281 年の元寇・弘安の役におけるモンゴル帝国・東路軍に発生した感染症と、元寇の時代である 13 世紀後半に日本国内で発生した感染症について考察する。

弘安の役のモンゴル帝国の作戦は、モンゴル人・高麗人・漢人による東路軍が朝鮮半島より日本に侵入、旧南宋人から成る江南軍が現在の寧波から合流し日本に攻め入るものであった。

1281 年 5 月 3 日に合浦、現在の韓国・馬山市を出発した東路軍 4 万人・900 隻の軍は、6 月中旬に壱岐にて江南軍と合流する予定で、壱岐周辺の海上で停泊していたのである。

「合浦出発以来 1 か月以上も船上で過ごしていて、疲労も重なり病人なども出て戦意も劣っていたことも考えられる。」(黒田俊夫 1974、P.128)とあるように、東路軍の船上は、梅雨の時期であったことや衛生面の問題、食糧不足から感染症により、戦わずして約 3,000 人が死亡したともいわれる。その感染症は当時朝鮮半島で流行していた天然痘であるという説もある。

次に 13 世紀後半に日本で発生していた感染症であるが、マラリアが広がっていた。飯島は『感染症と私たちの歴史・これから』に次のように述べている。(飯島渉 2018、P.37)

日本列島ではどんな感染症が流行していたのでしょうか。この時代には温暖化の中で土地の開墾が進み、水田耕作が広がりました。この結果、さまざまな感染症を媒介する蚊などの生活範囲も広がりました。そのため、日本列島では三日熱マラリアなどが本格的な広がりを見せたと考えられます。マラリアは、「瘧(おこり、わらわやみ)」と呼ばれていました。

日本でマラリアはいつ発生したのかを見てゆくと、「瘧の文字は大宝律令の医療令の中に現れる」(酒井シヅ 2002、P.73)にあるように、8 世紀には日本に発生していたことが分かる。「マラリアは突然、激しい震えに襲われ、40 度前後の高熱が 4、5 時間続いたあと、唐突に平熱に戻り、二日後あるいは三日後に再び熱発作をおこす病である。」(酒井シヅ 2002、P.73)

発熱後、次の発熱迄の間隔が三日間の病が三日熱マラリアである。三日というキーワードを拾うと、「鎌倉室町時代を中心として三日病(やみ)という流行病が種々の記録類に現れている。」(中村昭 1987、P.308)とある三日病については、風疹であるという説と流行性感冒すなわちインフルエンザであるという説が存在する。

さらに、元寇時代前後である 13 世紀鎌倉時代に流行した疫病として、酒井シヅは著書『日本の疫病』において、「鎌倉時代も疫病の大流行がたびたび全国を襲った。」(酒井シヅ 1987、P.142)、「鎌倉時代に流行した疫病の中で、圧倒的に多いのが疱瘡であった。次が赤班瘡であった。」(酒井シヅ 1987、P.144)、「赤班瘡の次に多い疫病は咳病である。」(酒井シヅ 1987、P.144)と述べている。

1278・79 年の 2 年間は全国的に疫病が流行し、疫病と飢饉とが重なり日本人の人口が半減したといわれている。

このように、当時はマラリアに限らず、多くの感染症が日本列島には存在していたことがわかるのである。

### 第3項 14 世紀ペストが流入しなかった日本と日元貿易

1331 年以降中国本土に拡大し、1347 年には欧州へと広がったペストであるが、当時の日本にはなぜペストは流入しなかったのか、という疑問が浮かび上がる。

「襲来以前も、襲来のあいだも、日本の貿易船はしきりに中国大陆との間を往来した。さらに、襲来後は、大変な経済・文化交流の波が起こった。明治期に至るまで、実はこれほどの日中交流は見られない。」(杉山正明 1996、P.137)とあるように、元寇以降の時代 13 世紀後半から 14 世紀前半はモンゴル帝国が日本の征服、或いは朝貢に成功はしなかった一方で、元側の管理貿易としての公式な日元貿易と、いわゆる密貿易であった民間貿易は非常に活発に行われていたのである。

貿易が活発であったことは、インターゼミ・アジアダイナミズム班の 2017 年「モンゴル帝国のユーラシア興隆史」におけるフィールドワーク時の、国際日本文化研究センター・榎本准教授の講義により史実として理解できる。榎本は、「1976 年、韓国新安沖で発見された元代の沈没船が、1323 年に元の慶元を出発した中国式のジャンク船であり、800 万枚に及ぶ大量の銅銭はじめ陶磁器、銅器、錫インゴット、香薬、書画、典籍等もあったであろう」「1342 年秋に天龍寺創建費用の不足を補うための、貿易船の派遣を決定した」「当時の元においては全て管理貿易であり、それ以外の私貿



易は密貿易である。こっそりと怪しい港に寄って密貿易を行い、最終は寧波によって管理貿易を行う」と語り、当時の活発な貿易の様子を知ることができたのである。

中国からヨーロッパへ拡大した 14 世紀のペストが日本に流入しなかったという事実はいくつか文献から確認ができる。文献の一例として、脇村は以下の様に述べている。(脇村孝平 2006、P.39)

ちなみに、日本史に関連して付け加えておこう。13 世紀の後半に起こったいわゆる元寇は、日本史の帰趨をも左右しかねない大事件となった。これは、モンゴル帝国の世界的な展開が、ユーラシア大陸の東端に波及した末のことであった。しかし、その 2 回に渡る試みは海という障壁もあって失敗に終わった。これには、疫病史上の補足的エピソードが加わる。すなわち、14 世紀以降ペストも海という障壁によって日本への伝播が阻止された。この疫病史上に特記される事実については、後に改めて触れることになるだろう。

東西の交易がモンゴル帝国によって活発になったことによって、14 世紀のペストが拡大したことと、日元貿易にて貿易路が活発でありながら、日本にペストが流入しなかった理由を考察する。

欧州へのペスト流入は貿易品の絹織物、毛皮製品にクマネズミ経由のペスト菌を保有したノミが寄生し運ばれて行ったことも一因である。貿易の品目という点に注目してみると、日元貿易における品目は、日本からの輸出は主に金・銀・硫黄・刀剣・蒔絵などであり、元からの輸入は銅銭・陶磁器・茶・書籍・書画・香料などであった。流入という観点から輸入品に着目すると、元から欧州へと渡っていた絹織物や毛皮製品とは異なることが分かるのである。つまり、日本がペストの流入を免れた理由のひとつとしてペスト菌を保有するノミが寄生した貿易品目が無かったとも考えられないだろうか。

欧州へ陸路、そして海路を辿ってペストが拡大したルートを考える時、日本に流入しなかった理由が海を隔てていたから免れたという一言では片づけられないと考えるのである。

しかしながら、日本に流入しなかった明確な理由を文献から立証するには至らないことから、ここでは貿易品に着目をするという視点に留めておきたい。

|        | 元と日本間                                | 元と欧州間    |
|--------|--------------------------------------|----------|
| 主な貿易品目 | 金・銀・硫黄・刀剣・蒔絵<br>銅銭・陶磁器・茶・書籍<br>書画・香料 | 絹織物・毛皮製品 |

表 1 元との貿易品目 (筆者作成)

#### 第4項 14 世紀ペストが流入しなかった理由の考察

前項において筆者は、14 世紀のペストが日本に流入しなかった理由として、元と欧州間の貿易品と元と日本間の貿易品との違いに着目した。パンデミックとなった 14 世紀のペストはなぜ日本に流入しなかったのかという疑問について、濱田は以下の様に述べている。

まず一つは、九州限定流行説。倭寇がペストを中国から運んだとしても、持ち込まれた地域が倭寇の根拠地である九州に限られており、それが日本全国に拡大しなかったという説である。

二つ目は日本人の清潔志向説。古来、日本では入浴が体内の気の循環を改善し、体内の毒物を排除すると考えられていた。このためヨーロッパで見られたように、多くの人びとにシラミがたかるようなことは少なかったと考えられる。もう一つ、筆者が考える理由は日本人免疫説である。ペスト菌と近縁の細菌が日本で既に流行していた可能性である。この細菌として考えられるのが、ペスト菌と同じエルシニア属の仮性結核菌だ。(中略)このように、筆者は日本にペストが波及しなかった理由として、14 世紀の日本人の多くが仮性結核菌の感染で、ペスト菌にもある程度の免疫を持っていたとする説があるのではないかと考える。(濱田篤郎 2020、P.170)

濱田が述べている 3 つの理由のうち、九州限定説は濱田自身が可能を否定していることから、清潔志向説と日本人免疫説の 2 つについては、その可能性について言及している。14 世紀のペストが日本に流入しなかった理由については、それを論じる文献は少ない中で、貴重な見解であると考えるのである。

また、筆者が述べた貿易品目の違いにより、日本にペストが流入しなかったのではないだろうかという問題意識について、インターゼミ・アジアダイナミズム班が 2020 年 8 月 1 日に実施した、大阪経済法科大学教授・脇村へのヒアリングにおいて以下の内容の見解を示していた。

中国と欧州・日本との貿易品目の差異は、日本にペストが流入しなかった理由として十分に考えられるものである。事実、ヨーロッパは黒海から海を渡ってペストが来ていることから、日本にも海を渡って流入する可能性はあったともいえる。貿易の頻度や品目、密度の違いはあるかもしれない。貿易品の差異が理由のひとつであったという仮説を立てて誰かが実証したならば、それが新たな説になることもあり得る、という内容である。

濱田の文献、脇村の見解からも、いくつかの複合的な理由が重なり合って、14 世紀の日本にはペストが伝播しなかったという事実が存在するのである。14 世紀の事実は、2020 年の新型コロナウイルスのパンデミックにおいて、日本の感染者数と死者数が少ないことに繋がっているのかも知れない。

## 第5項 15 世紀梅毒が流入した日本と倭寇

「梅毒は 15 世紀末にコロンブスが新大陸を発見したときに、梅毒も持ち帰ったという。これに対して、早くから疑問を投げかけている者もいるが、大航海時代のはじまりとともに梅毒が世界的に蔓延したことは事実である。」(酒井シヅ 1982、P.188)と述べられている通り、1493 年にスペイン・バルセロナに梅毒が広がり、1495 年にはイタリア・ナポリで爆発したといわれている。

また「そのときナポリ人は進入してきたフランス兵が梅毒を広げたといって「フランス病」とよんだ。一方、フランスではナポリ帰りの兵隊が梅毒にかかって、帰還したことから「ナポリ病」とよんだのである。」(酒井シヅ 2002、P.167)と述べられている。このことは、1918 年から流行したスペイン風邪において、第一次世界大戦中の各国は自国が発生源であるといわれないう、感染者数を正しく公表せずに、中立国であったスペインの名称となった事実を彷彿させ、15 世紀も 20 世紀もパンデミックに対する捉え方が変わらないことを示唆するものである。

その後、梅毒がアジアに広がったルートは、1498 年頃にヴァスコ・ダ・ガマの一行がインドのカリカットに寄港した際にインドへと運ばれ、インドネシアを経て 1505 年頃中国・広東に侵入し、さらに琉球を経て日本に上陸したのである。「日本で、この新しい疫病が痘瘡・琉球瘡と呼ばれたことは、梅毒が中国(広東)と琉球から輸入されたこと示唆する。」(立川昭二 1977、P.147)の記述からも梅毒のルートが分かるのである。

15 世紀末から 16 世紀大航海時代のパンデミックは梅毒であったのである。梅毒が中国・琉球から日本に流入した経緯を田中は以下の様に述べている。

それでは、この梅毒スピロヘータを海上はるか運んだのは誰か——。じつはこれは、ポルトガル人でも朝鮮人でもない。倭寇と呼ばれる日本人を主体とする海賊集団であった。とくに三浦の乱(1510 年)以後、中国人や朝鮮人をふくんだ一大海上活動者として華南から南海にわたって明の沿海を荒らしまわり、とくに中国南部をはげしく侵したいいわゆる後期倭寇——、彼らがじつは梅毒運搬の張本人であった。(田中昭二 1977、P.147)

ここで疑問となるのが、前項で述べた 14 世紀ペストは日元貿易という交易が活発であったものの日本には流入しなかったのだが、16 世紀の梅毒は倭寇を通じて海を越えて流入してきたという点である。

ペストはネズミを宿主としたノミを媒介としてヒトを蝕んだのに対して、梅毒はヒトとヒトの接触によ

る感染であることの違いというものがでてくる。14 世紀日本に日元貿易を通じて、ペスト菌をもつノミが貿易品などを通じて流入してこなかった反面、16 世紀には梅毒がヒトを介して上陸し、日本国内へ拡大していったのである。

先に述べた梅毒の日本への流入ルートは、当時の明と琉球からである。明からのルートは後期倭寇の往来が盛んであったことに加えて、その構成員は日本人よりもむしろ、殆どが中国人で構成され、なかにはポルトガル人も交じっていたことから、日本への流入以前の感染拡大国の構成員が多かったことも一因だったのかもしれない。

また、もうひとつの流入ルートである琉球は、明が琉球に対しては他国よりも圧倒的に多い貿易を認めていた時代であることから、明から琉球への流入は比較的容易な環境であったのではないだろうか。

梅毒の感染特性と倭寇による活発な往来が、明と琉球からのルートで日本への梅毒流入につながったということが分かるのである。

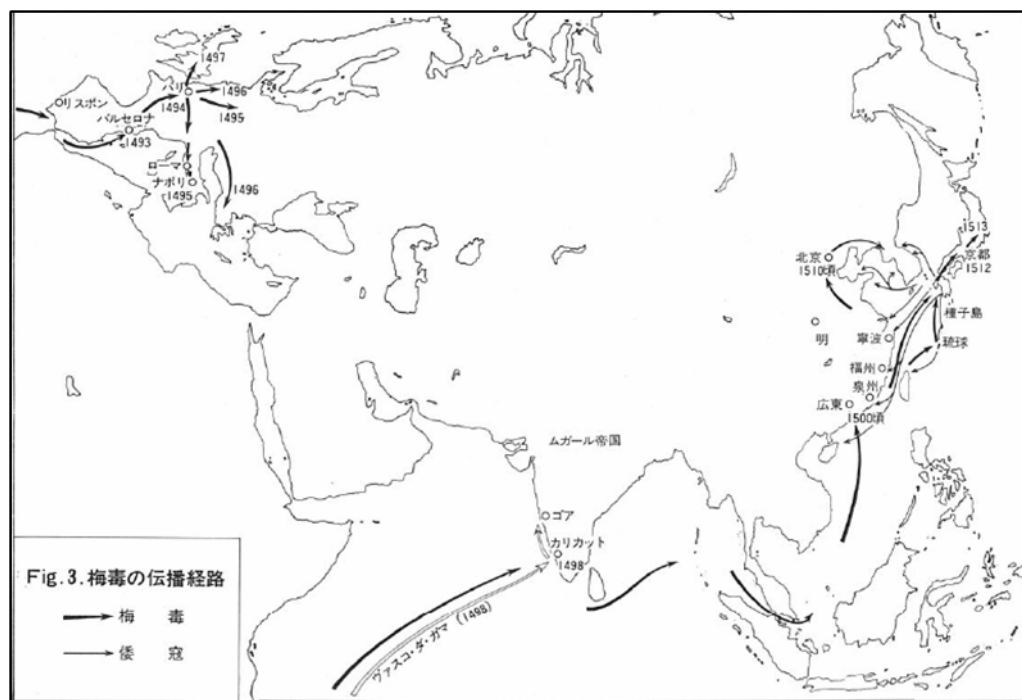


図 10 梅毒の伝播経路

出典:交通と疫病 P.143 立川昭二

### 第3節 江戸時代日本がコレラから受けた影響

#### 第1項 コレラの日本までの感染経路

江戸時代、日本では2度流行した。

1度目は1822年で鎖国していた時期であったが長門に上陸した。インド→東南アジア→ジャワ→ボルネオ→広東→北京→朝鮮半島→対馬→長門→江戸

病が語る日本史 p179 010～012 参考

2度目は1858年で上海から長崎港に入港したアメリカ船ミシシッピー号のコレラに感染していた船員が出島に上陸し、長崎から本土へと感染していった。

#### 第2項 どのような様子だったか。

1度目：多くの死者がどこの流行地でも出たが、中でも長門と大阪は最も被害が大きかった。大阪は水路が多く、水から感染するコレラの猛威を振るう条件が整っていたので。1日に200～300人の埋葬があった。大阪の流行は10月に入ってから終りの兆しが見えてきた。

東海から東への被害はほとんどなかった。

出島のオランダ商館長ブロムホフは1度目の流行が起こる年のはじめ、幕府に挨拶しに行った時、ジャワでコレラが流行している情報、コレラについての説明と治療法を蘭学者の桂川甫賢、宇田川玄真に与えた。

江戸の医師達は今回流行している病はコレラであると認識したがコレラを軽視し、世界流行する伝染病であるとブロムホフが与えた情報をこの流行では役に立てなかった。

2度目：日米修好通商条約が交わされ鎖国が終わる1か月前、長崎から感染が広がっていき、江戸で大流行した。未曾有の数の死者数の死者に棺桶の数が間に合わず、酒樽を棺桶にしたが追い付かず、火葬場は棺桶で溢れるほど悲惨で、当時の様子は安政箇旁痢流行記概略として残っている。

#### 第3項 攘夷運動

開国した時期もしくは開国を迫られた時期とコレラの流行が重なり、外国への敵意が強まり攘夷

運動を刺激した。

経済への影響として、「馬喰町周辺の旅館は滞在中の人がたくさん死んで泊り客も長期滞在者もほとんどなくなり江戸の町は不景気になり商人は困っている。街道は上り下りも人通りが途絶えている。(病が語る日本史 p18505～p18601 参考)」と当時の様子が残っていた。

#### 第4項 考察

ブロムホフの情報を役に立てなかった理由として、意図的なものがあることは捨てきれない。異国に借りを作ること、下に見られ日本の立ち位置が不利になることを危惧してあえて役に立てなかった可能性もある。

2 度目の米艦経由の感染はもしかしたら、故意的なものでカッファに対するモンゴル軍、イエズス会アフリカ植民地化のように策略だったのではないか。

※大西洋のマラリアに着目すると、15 世紀以後、ヨーロッパ人によりアフリカ、アメリカの間でさかんに奴隷貿易が行われた結果、ヨーロッパで流行していた三日熱マラリア、アフリカからは致死率の高い熱帯熱マラリアや蚊を媒体とする黄熱病やデング熱がアメリカに持ち込まれることになった。

また、南アメリカのアンデス地方の植物のキナを原料とするマラリアの特効薬、キニーネ(現在でも治療に用いられる。)がある。イエズス会の宣教師らがキナの樹皮を「イエズス会の樹皮」としヨーロッパに持ち帰り、マラリアの治療を進め、それを利用し、アフリカの植民地化に成功したという歴史的背景がある。

「感染症と私たちの歴史・これから」参考



写真 4 「安政簡勞痢流行記概略」より「茶毘室混雑の図」

#### 第4節 科学の進歩と日本における感染症

##### 第1項 病原体である細菌とウイルスの発見

「伝染病の原因となるものは微生物として細菌、真菌、原虫、ウイルスがあり、また多細胞生物として寄生虫がある。」(大谷明 2003、P.657)とあるように、感染症の原因は病原体にあり、病原体が細菌性のものかウイルス性のものかを特定することによって、予防としてのワクチンの開発、治療としての抗生物質をはじめとした治療薬の開発に至るのである。

このことは現代の私たちにとっては周知の事実であるかも知れないが、紀元前から人類を悩ませ、多くの死者を出してきた感染症の原因というものは、17 世紀後半までは明確に証明されてはいなかったのである。さらに感染症毎の原因の特定やワクチン・治療薬の開発に至っては 19 世紀後半からの科学の進歩によるものであり、紀元前からの感染症の時間軸で見ると、ごく最近のことといえるのである。

1674年にオランダのアントニー・ファン・レーウェンフックが湖から採取した水の中に、200倍の顕微鏡によって微小動物を発見したこと人類が微生物を見ることができた始まりであるといわれる。以降、細菌を観察できるようになったのだが、病原体を特定できるようになったのは19世紀後半である。

1861年、細菌学の権威であるフランスのルイ・パスツールが著書において、生命の自然発生説を否定したことによって、微生物が病原体であることを示したのである。パスツールはワクチンの弱毒化に成功し、1885年には狂犬病ワクチンを開発している。

1875年ドイツの細菌学者であり微生物学の権威であるロベルト・コッホが、病原体としての細菌である炭疽菌の純粋培養に成功し、炭疽の病原体であることをはじめて発見した。

コッホは感染症の原因となる細菌の特定の方法として、コッホの4条件を提唱した。4条件とは、  
1. その病気の症例に、ある特定の細菌が見られる 2. その細菌を純粋に培養して増やすことができる 3. 増やした細菌を他の健康な動物に接種した時、同じ病気を起こす 4. その動物から同じ細菌を取り出して再び増やすことができる、であった。

1882年には結核菌が肺結核を引き起こすことを立証し、1883年にインドで発生したコレラの原因となるコレラ菌を発見した。19世紀後半にコッホによって、特定の病原体である細菌が感染症を引き起こすことが明らかとなったのである。

また、細菌同様に感染症を引き起こす原因となるウイルスの発見は、細菌よりも遅れての発見となった。1892年にロシアのドミトリー・イワノフスキーがタバコモザイクウイルスの発見に成功したが、病原体としてのウイルスの特定を大きく前進させたのが、アメリカの生化学者、ウェンデル・メレディス・スタンリーである。1935年にはタバコモザイクウイルスが殆どタンパク質で出来ていることを発見し、1939年にはタンパク質と核酸に分離し、その核酸がRNA(リボ核酸)であることを示した。スタンリーがはじめてウイルスの分離・結晶化に成功したことで、ウイルスはタンパク質と核酸のみからできているという構造を明らかにしたのである。

それまでもウイルスというものの存在は語られ、ウイルスは細菌よりも小さい細菌とされていたが、細菌とは明らかに異なるものであることが分かったのである。ウイルスが明らかになったことで、感染症の解明と対策は大きく前進することとなった。

ウイルスが解明出来た背景には、それまでの光学顕微鏡では技術的な限界があり発見できなかったが、1931年の電子顕微鏡の発明による科学技術の進歩があることを見過ごす訳にはいかない。



## 第2項 病原体特定に寄与した顕微鏡の進歩

病原体である細菌並びにウイルスを発見するに至ったことは、顕微鏡の進歩に大いに関連づけられる。顕微鏡の原型は 1550 年にオランダの眼鏡職人・ヤンセン親子が発明したのがはじまりといわれる。さらに 1665 年にはロバート・フックが顕微鏡で植物のコルクを観察し、小さな部屋を見つけてセルと名付けたことが、細胞の cell に繋がっている。そして 1674 年に、オランダのアントニー・ファン・レーウェンフックが 200 倍の顕微鏡によって微小動物を発見したこと人類が微生物を見ることができた始まりであることは先に述べた通りである。

この微生物の発見は、オランダのデルフト生まれのアントニー・ファン・レーウェンフック (Antoni van Leeuwenhoek, 1632～1723 年)によるとされる。彼は、1665 年に一枚のレンズで顕微鏡を作製し、雨水、下水、尿などのあらゆるものを観察し、その中に小さな生物、すなわち微生物が存在することを発見し、その観察結果をイギリスの王立協会誌に投稿している。これが微生物の発見とされているが、この微生物の発見は食品発酵学、病原微生物学の発展には結びつかず、単なる微生物の発見に止まった。(2001 角野、P.371)

またアマチュア研究者であったアントニー・ファン・レーウェンフックは、独自に開発したレンズ 1 枚の単式顕微鏡で、人間の精子や赤血球を観察。1683 年には人類史上初めて微生物(細菌)を観察したことを王立協会に報告しています。(2014 小島、P.6)

以上の記述のからも事実が分かると共に、レーウェンフックによる微生物の発見と王立協会への報告に関する年代は文献により若干の相違があることも事実である。

レーウェンフックの単式顕微鏡(写真 5)により微生物を見ることができるようになり、その後も顕微鏡が進歩を遂げたことが、様々な病原体である細菌の発見・特定につながったことが以下の通り分かるのである。



写真 5 アントニー・ファン・レーウエンフックの単式顕微鏡

出典:<http://www.microscope.jp/history/03.html>

その後、顕微鏡の進化は、医学の発展を力強く後押しします。19 世紀後半ドイツのカルツァイス社は、物理学者のエルンスト・アッペやガラス職人のオットー・ショットと協力し、600～700 倍の倍率をもつ顕微鏡を開発します。19 世紀末までには 1000 倍の像が得られる顕微鏡が誕生し、光学レンズを使った装置としてはほぼ限界まで性能を向上させました。ロベルト・コッホら医学者たちは、そうした高性能な顕微鏡を使うことで、病気の原因究明や治療法を確立していきました。コッホは結核菌(1882 年)・コレラ菌(1883 年)を発見し、細胞学の基礎を築きました。また北里柴三郎によるペスト菌発見(1897 年)など、日本の研究者も顕微鏡を用いることで世界的な業績を成し遂げています。(2014 小島、P.7)

光学顕微鏡の進歩により細菌を直接観察出来るようになったことが、医学を進歩させたことは明らかであった。しかしながら、後に発見されるウイルスについては、19 世紀後半の時点では、光学顕微鏡では限界があり観察することが叶わず、ウイルスを病原体とする感染症の原因は未だ不明のままであったのである。

細菌よりも小さなウイルスの発見に貢献したのが、電子顕微鏡の発明である。1932 年ドイツのエルンスト・ルスカとマックス・クノールによって電子顕微鏡が発明され試作機が完成した。その後、ドイツのシーメンス社によって電子顕微鏡が製造されてウイルスの発見される時代に入っていったのである。

1910 年代に世界で猛威を奮ったスペイン風邪も当時は特定できなかったが、後にインフルエンザウイルスが病原体と特定されたのも、電子顕微鏡への進歩の結果であったといえる。電子顕微鏡そのものも進化し続け、特に 1980 年代から現在に至るまで感染症の病原体・ウイルスの特定が進んでいるのである。

## 第5節 感染症への日本人の貢献

### 第1項 天然痘と緒方洪庵

日本における天然痘の感染拡大の始まりは、737 年といわれる。

このたびの天然痘の流行について、最初の報告があったのは 735 年 8 月こと。大宰府管内で始まったそれが山陰道・山陽道を東上する気配を見せたところで、朝廷が関門海峡を封鎖。これにより流行は一応沈静化した。ところが封鎖の解除とともに解き放たれ、737 年の春頃から都でも猛威を振るう事態と化したのだった。全国的な被害については、総人口の 25～35%を死に至らしめたとの推計がある。(2020 島崎、P.149)

この 737 年の大流行では、平城京では多くの死者が出たが、その中には当時の政権を担っていた藤原家の 4 兄弟、武智麻呂(むちまろ)、房前(ふささき)、宇合(うまかい)、麻呂も含まれており、政権にとっても大きな打撃であった。

その後、鎌倉時代の 1302 年及び鎌倉幕府滅亡の 2 年前、1331 年に天然痘の大流行が起きている。さらに 17 世紀の 100 年間には 4 回の大流行があり、明治時代に於いても致死率は 25%であったともいわれる。

天然痘は、死に至るか、失明もしくは「あばた」が残り死に至らずとも苦しみは大きいものといわれている。『16 世紀に日本にきたイエズス会のルイス・フロイスは、日本にはヨーロッパに比べて全盲者が多いことに注目している。後天的な失明者の大部分が天然痘によるものである。』(2009 加藤、P.287)と記述されている様に 16 世紀の日本においては天然痘になす術は無かったことが分かる。

第 2 次大戦後の外地からの引き揚げにより、1946 年には 3,000 人の天然痘による死者が出たが、1955 年に日本において天然痘は根絶したのである。また、WHO は 1980 年に地球上からの天然痘根絶宣言を実施し、長く人類を苦しめてきた天然痘は葬り去られたのである。

長く人類を苦しめた天然痘が撲滅するに至るターニングポイントとして、1796 年にエドワード・ジェンナーが 8 歳の男児に牛痘(牛のウイルス性伝染病)を摂取することで、天然痘を発症しないことを発見したことが挙げられる。ジェンナーが牛痘接種法を確立し、その確実な効果が認められ天然痘の画期的な予防法として世界に広まっていったのである。現在のワクチンの名称は、ラテン語の Vacca(雌牛)に由来することからもジェンナーのワクチン開発の貢献は歴史を変えたともいえるのではないだろうか。

しかしながら、日本において牛痘法が広まっていったのは、ジェンナーの発見から遅れること約 50 年、半世紀が経過してからであったことが、以下の記述からも分かる。

しかし、バタビヤ(今のインドネシアのジャカルタ)から来た船によって、ついに何とかまだ生きている痘苗が手に入った。これがモーニケ (Otto Mohnicke) によって公式にもたらされたわが国最初の痘苗である(1849 年)。種痘の知識・情報の最初の伝来から実際の痘苗の公式入手まで、46 年もかかっている。この 46 年という年月の長さには、幕府、藩役員、医者内部の争い(漢方医と西洋医)などの官僚制の阻害要因などの封建社会における問題や痘苗輸送の困難さという技術的問題があったとはいえ残念なことである。(2009 加藤、P.290)

この牛痘接種を普及し、日本における天然痘対策の中心人物として貢献したのが緒方洪庵である。緒方洪庵は 1838 年、大阪に適塾を開き福沢諭吉ら約 3,000 名の弟子を蘭学者として育てると共に西洋医学を日本に普及させるべく多くの蘭書の翻訳に努めたのである。

1849 年に長崎・出島にて前述の牛痘接種が成功すると、痘苗を分けて貰った緒方洪庵は同年 11 月には大阪に除痘館を設立、翌 1850 年には郷里である岡山県、足守藩に足守除痘館を設立した。緒方洪庵は、関東以西に牛痘接種による天然痘予防を広めたのである。

一方当時の江戸においては状況が関東以西とは違っていた。幕府は蘭学が普及することによる幕藩体制への影響を懸念していた。また、当時の医療界は漢方医が牛耳っていたことから蘭方医の台頭を嫌い、1849 年には幕府から蘭方医学禁止令が発令されたのである。しかしその後、蘭方医学の優秀性が認知され、1858 年には蘭方医学は解禁された。同年には、緒方洪庵の牛痘接種を幕府が公認し、免許制となったのである。

こうした動きの中で、江戸では 1858 年「お玉が池種痘所」が 80 名以上の蘭方医によって設立されたことによって、関東以西で 1849 年から広まっていた牛痘接種がやっと関東においても始まったのである。その後幕府は緒方洪庵を江戸に迎え、お玉が池種痘所の延長となる幕府直轄の「西洋医学所」頭取として任命した。西洋医学所は後に、大学東校、東京医学校と改称しながら種痘に留まることなく、西洋医学研究の場として発展し、1877 年東京大学創設時の医学部となり現在に至るのである。

しかしながら 1866 年には、孝明天皇が天然痘により死亡した。この事実においては以下の様な記述も見られる。

幕末の天然痘流行も日本の歴史に大きな影響を与えた。1866 年 12 月、孝明天皇が天然痘で亡くなった。当時、開国か攘夷か、勤皇か佐幕かで国をあげての騒乱の時であった。孝明天皇は妹の和宮(かずのみや)親子(ちかこ)内親王を、14 代将軍徳川家茂に嫁がせたりし

て公武合体の推進者であった。ところがその家茂が、長州征伐と攘夷の実行のための上洛中に死亡するということが起きた。その年の 7 月のことであった。15 代将軍には徳川慶喜が就く。天皇は、一貫して公武合体政策で勤皇派をおさえていたが、天皇の急死により政局は大転換して、一挙に討幕派が力を得るにいたった。その後の歴史は、一気に翌 1867 年の大政奉還、王政復古に到る。もし、孝明天皇の急死が無かったら、公武合体派はしばらく余命を保ったであろうし、新政府での徳川慶喜の立場も違っていたであろう。つまり、明治維新の姿も違ったものになっていたと思われる。(2009 加藤、P.288)

感染症が歴史に与えた影響の大きさを物語ると共に、歴史の分岐点に感染症が横たわっていることも見えてくるのである。私たちの文献研究とフィールドワークにおいても、歴史を紐解く時には「もしも」「この事件がなかったら」「偶然の接点なのか」といった疑問に突き当たるといえる。

いずれにしても、緒方洪庵をはじめとした当時の蘭方医達の努力が、日本における感染症の予防接種やワクチン開発、そして天然痘の撲滅への大きな貢献となったのである。

## 第2項 ペスト菌と北里柴三郎

歴史上、日本にはじめてペストが流入したのは 1896 年の中国人感染者からである。

「ペストがはじめて日本に上陸したのは明治 29 年(1896)であった。患者は香港から横浜港に入港した米船の中国人船客であった。苦しみのあまり在日中国人宅に転げ込み、横浜の中国人病院で亡くなった。……その後も香港から横浜に入港した船でペスト患者が見つかったが、いずれも水際作戦が功を奏して、国内に広がることはなかった。」(酒井シヅ 2002、P.222)

そして、日本人のはじめてのペスト感染者が 1899 年にあらわれる。

「しかし、明治 32 年(1899)11 月、台湾から帰国して門司に上陸した横浜の会社員が、陸路横浜に向かう途中、広島で発病して、亡くなった。」(酒井シヅ 2002、P.222)

このように、19 世紀末、香港で発生したペストが中国、インドへと広がっていったのである。14 世紀のペストの伝播とならなかった日本においても、1896 年～1926 年の間に感染者数 2,905 人、死者数 2,420 人と報告されている。

1894 年に香港在住の中川一等書記官から外務省宛にペストに関する電報が入り、日本政府は直ちに各港で検疫を開始すると同時に、伝染研究所長の北里柴三郎と東京大学内科学教授の青山胤通を伝染病調査のために同年 6 月 6 日に香港へと派遣したのである。

そして、6 月 24 日には北里柴三郎から、香港から発生した感染症はペストであり、ペスト菌を発見したことの報告が入ったのである。調査団として同行した、東京大学教授の青山胤通は香港にてペストに罹患したのだが、そのお蔭で原因菌の発見が早まったともいわれている。1894 年 7 月には日清戦争が開戦したことから、その 1 か月前という時期において、イギリス統治下の香港とはいえ、中国人住民が大多数を占める地域において、一触即発の状況下でのペスト菌の発見は、歴史における絶妙なタイミングであったと思えるのである。

帰国後、北里の指導のもと、日本国内ではペストの予防・治療が進み、さらには保菌ネズミの撲滅を図るといった防疫対策によって、被害を最小限に抑え 1926 年を最後に撲滅することができたのである。保菌ネズミの撲滅に関して、「東京市は明治 32 年(1899)12 月、20 万匹ネズミ捕獲作戦を立てて、145 銭で買い上げることにした。1 年後の捕獲数はなんと 300 万匹をこえたのである。」(酒井シヅ 2002、P.22)

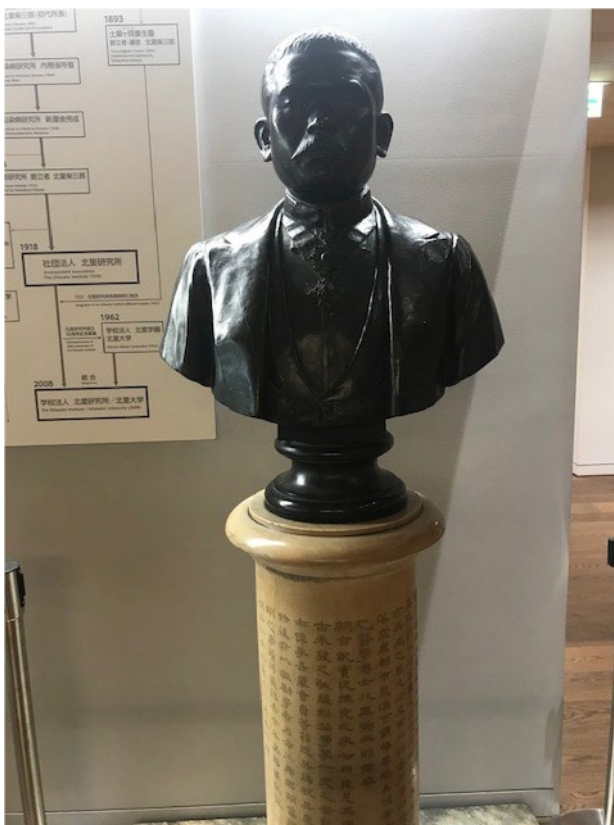


写真 6 1894 年 11 月 ペスト菌発見を記念した歓迎会にて寄贈された銅像  
出典:北里大学(東京都港区白金)にて筆者撮影

また、北里は 1894 年のペスト菌発見から、1896 年のペスト菌日本上陸までの間に先んじて政府や省庁に予防対策の重要性を説いて回り、1897 年に伝染病予防法を成立させたのである。予防法には北里の主張通り、上下水道の整備、地域や家屋の消毒、感染者の隔離、船や列車の検疫といった項目が網羅されており、その防御策は現代の新型コロナウイルス対策でも講じられていることへと繋がっているのである。

北里柴三郎は 1853 年熊本県に生まれ、熊本医学校を卒業後に上京し東京医学校(現東京大学医学部)を卒業し、1883 年に内務省衛生局に入省した。1886 年にはドイツ留学の辞令を受け、6 年間病原微生物研究の第一人者ロベルト・コッホのもとで細菌学者として基礎を学んだことで、その後コレラ菌の分離と予防対策、破傷風菌の純粋培養、血清療法の高率、ペスト菌の発見、日本初の私立伝染病研究所創立、日本初の結核専門病院の開設など、感染症予防・治療をはじめ日本の医療に大きな貢献を果たした。

北里のドイツ留学時代からの恩師である、ロベルト・コッホは第 3 節にて述べた通り、1877 年世界ではじめて最近の顕微鏡撮影に成功し、病原菌の特定を科学的に証明した人物であると共に、炭疽菌、コレラ菌、結核菌の発見者でもあり、感染症予防・治療において世界に貢献したのである。恩師であるロベルト・コッホ、その弟子である北里柴三郎の貢献が、現代医療の進歩につながっているのである。コッホと北里の師弟関係は、コッホの没後に彼を祀る神社を北里が建立し、北里没後にはコッホ・北里神社として、今なお北里大学の敷地内に存在することからもわかるものである。





写真 7 コッホ・北里神社

出典:北里大学(東京都港区白金)にて筆者撮影

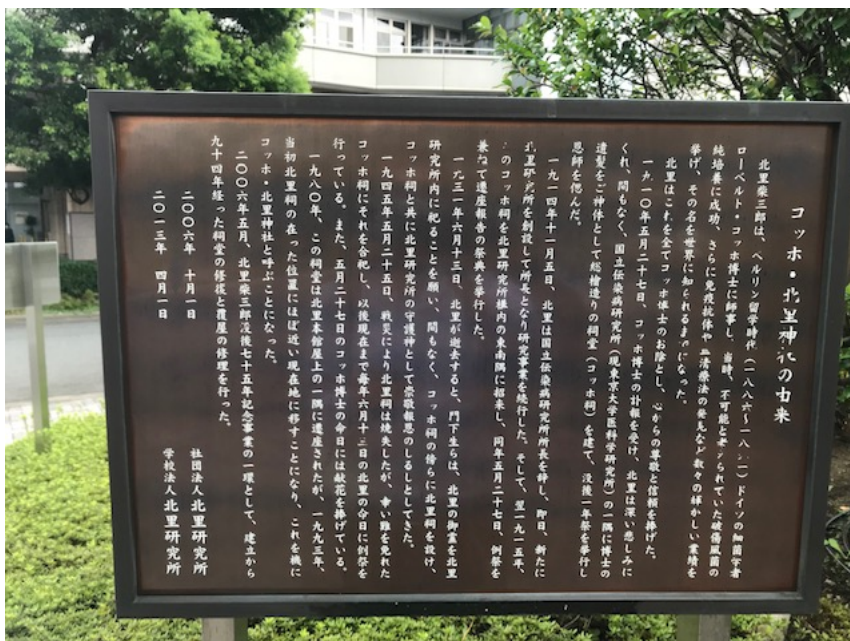


写真 8 コッホ・北里神社の由来

出典:北里大学(東京都港区白金)にて筆者撮影



### 第3項 日本衛生行政と長与専斎

長与専斎は1838年長崎・大村藩に生まれ、1854年に第1項で述べた緒方洪庵の適塾にて学び、後に福沢諭吉の後任として適塾の塾頭を務めた。また、第2項で述べた北里柴三郎が東京医学校入学時の校長が長与であり、北里が設立した伝染病研究所の運営を担った大日本私立衛生会の副会頭でもあったことなど長与は北里を支えた恩人の一人であった。1861年からは長崎にてオランダ人医師のポンペの下で西洋医学を学んだ。そして、1871年文部省の設置より長与は東京勤務となり、同年に当時の諸外国との不平等条約改正のために派遣された岩倉具視使節団の一員として欧米諸国に渡った。その際に訪れたドイツの衛生行政を目の当たりにしたことが、長与とその後の日本の衛生行政の確立に進ませることとなったのである。

帰国後長与は、文部省医務局長として医療制度及び衛生行政に関する法令をまとめた医制の制定を1874年に実施し、医制によって明治期の医療・保健・福祉は急速に進歩したのである。医制の序文では「流行病・伝染病の予防」「貧民の救済」「土地の清潔」「上下水の引用排除」「市街家屋の建築方式」「薬品・染料・飲食物の用捨取締」を説いており、以後の国民への啓蒙と行政の実行へと繋がっているのである。1875年に衛生事務は文部省から内務省へと移管され、健康保護を進める部局として衛生局が立ち上げられ、初代局長に長与が就任したのである。衛生という言葉は、長与がつくった言葉であった。衛生局設立にあたり、ドイツ語の衛生制度・公衆衛生法の言葉を直訳すると、健康や保健となり面白みがなかったことから、荘子の言葉にあった「衛生の経」即ち生命を守る根本の道の意味から「衛生」を提案したところ決定したという経緯である。

その後、1877年・79年の日本におけるコレラの感染拡大により、長与はコレラ対策に奔走し、コレラ収束後には伝染病対策としての「心得書」を出したことを、小島は以下のように述べている。(2018、P.44、小島)

特に明治12年のコレラの流行が収束してのちに出された「心得書」では「清潔法」、「摂生法」、「隔離法」、「消毒法」の4項が予定された。伝染病の発生や流行を食い止めるため、住民に対して直接、伝染病予防のための心得が説かれたのである。しかし長与はこの措置に決して満足していたわけではなかった。なぜならば、長与がコレラ対策に奔走していた当時、コレラの被害が広がる原因にコレラ菌に汚染された井戸や厠の水をめぐる問題があったからである。住民は汚染された井戸水等を介してコレラに感染していったのである。そこで当該問題への対応という観点から見て無視できなかったのが「土地の清潔」や「上下水の引用排除」を実現するということであった。コレラ菌に汚染された水から土地を守り、清潔な飲み水を確保し、下

水を排除することが求められたのである。そしてこの水の管理の問題は「衛生工事」の課題として取り上げられていくこととなった。長与は、日本人の手による最初の暗渠として知られる神田下水敷設への取り組みに見られるように、この「衛生工事」の推進に積極的に関与するのであった。

また、長与は神奈川県鎌倉の由比が浜が海浜保養地として最適であるとの見解を披露し、1887年に日本初の結核病のサナトリウム施設すなわち療養所である「海浜保養院」を鎌倉・由比が浜に設立した。当時の皇室や政治家達に海水浴を取り入れた保養・療養の思想を浸透させるという目的も存在していたのである。海浜保養院は大正期に入ると宿泊施設・鎌倉海浜ホテルとして変化を遂げるが、当時の日本の近代化のシンボルとなっていた施設でもある。

鎌倉の発展及び日本の衛生行政の基礎をつくった功績を長く伝える目的で、鎌倉大仏の高德院に長与専斎碑が1919年に建立されている。

このように、長与は日本の衛生行政を確立すると共に、上下水道の整備の重要性を説き、衛生工事の実現に努め、今日の世界においてトップレベルの日本の公衆衛生の基礎を築き、衛生の父といわれているのである。長与の功績無くして、現代日本の衛生行政、インフラ整備、国民の衛生観念、感染症対策は無かったといっても過言ではないだろう。



写真 9 長与専斎碑

出典: 高德院(神奈川県鎌倉市)にて筆者撮影

## 第6節 地政学的視野から見た日本における感染症

インターゼミ・アジアダイナミズム班は、2020 年 8 月 1 日に実施したフィールドワークにおいて、大阪経済法科大学教授・脇村孝平より「疫病のグローバルヒストリー試論・地政学的視野に立つて」と題して講義を受けた。講義は、モンゴル帝国とペスト、黒死病・ヨーロッパの経験、疫病史における日本の立ち位置の 3 部構成となっており、本節では地政学的視野から見た日本における感染症を脇村の講義を土台として考察するものである。

疫病の世界史とグローバルヒストリーにおける日本の立ち位置とはどのようなものかを考えると、海の存在を無視することはできないのである。14 世紀のペストや発疹チフスは日本に入らなかった点から、媒介生物が介在するウイルスは日本に流入しなかったといえる。

一方、人から人へと伝播するウイルスは、8世紀の天然痘によって日本の人口の3分の1が亡くなった様に、早い時期から流入していたのである。

第2節・第3項にて述べた、14世紀ペストが日本に伝播しなかった原因として、当時の貿易品目が欧州とは違っていたのではないかという見解について、脇村は「貿易品目の欧州との違いや、往来の頻度等の影響があったことは、可能性は高いといえる。」と述べた。

日本は19世紀の開港によって、コレラをはじめとした感染症の大規模な流入につながったのである。一方で日本は、明治期以降はヨーロッパ由来の近代的な医療と公衆衛生の手段を武器として、ユーラシア大陸からの感染症の影響をコントロールできたのである。

また、19世紀の大規模な感染症流入までは、ユーラシア大陸の「疫病の貯水池」から古代以来影響を受けつつも、一定の距離を保っていたことが日本にとっては大規模な感染症の流入を防ぐ効果が大きかったといえるのである。

脇村の結論として、遊牧民の影響を受けない第一地域に分類される日本と西ヨーロッパはペストをはじめとする感染症の影響は小さく、それに対して、遊牧民の影響を受ける第二地域であるユーラシア大陸は、感染症の影響は甚大であったと述べた。

以上の様な脇村の見解を踏まえて、日本は古来より地政学的優位性により感染症の流入は、感染症の種類によっては相当制限することが出来たこと、さらに19世紀以降は医療技術・科学技術の発展と、日本の公衆衛生の環境整備と国民の意識の高さとが相まって、感染症の影響は世界のそれと比較して小さなものとなっていると考えるのである。

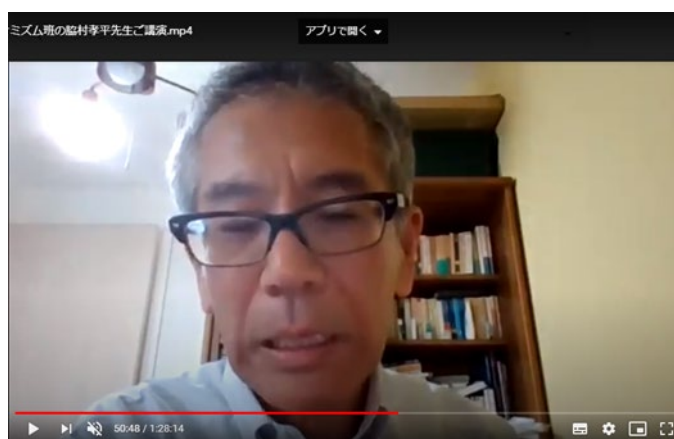


写真 10 大阪経済法科大学教授 脇村孝平

出典：インターゼミ・アジアダイナミズム班フィールドワーク(ヒアリング)画像

## 第7節 現代に生きる日本人特有の衛生観念と気質・文化

第3章パンデミックの日本への影響として、ここまで 1. 神仏信仰が日本人に与えた影響、2. 科学の発展による細菌・ウイルスの発見とワクチン・治療薬の開発、3. 明治期以降の衛生行政の発展、4. 日本の地政学的特性による感染症流入の制限の4つの切口で論じてきた。

4つの切口のうち、神仏信仰は5世紀頃から現代に至る迄その影響は続いており、地政学的特性は特に19世紀の開港以前までに影響を与えたといえる。そして、科学の発展と衛生行政の発展は、19世紀以降の日本の感染症対策を急速に前進させたものといえる。4つの切口が時代によって重なり合いながら、長い歴史の中で日本人は様々な感染症と対峙或いは共生してきたと考えるのである。

その上で本章の最後に、過去から現代に至る迄、日本人特有の衛生観念と気質・文化というのが礎となっているであろうことを述べてゆきたい。

日本人には古来より、穢れ(けがれ)と浄化、祓い(はらい)清める、という思想が流れているものと考えられる。神社に於いては手水により穢れを浄化する、様々な場所で塩によって祓い清めるといった風習が自然と身に着いているのではないだろうか。このような思想・風習は日本人の衛生観念というものに通じていると考えるのである。また、現代日本人にも通じている衛生観念を醸成する行いとして、学校における清掃、幼少期からのうがい・手洗いの励行があげられる。これらはすでに教育の中に組み込まれているといえる。また、日本ではハグや握手ではなくお辞儀というコミュニケーション手段、毎日風呂に入って清潔を保つ習慣、現代では風邪をひいたら他人にうつさないためにもマスクを着用するという礼儀作法も、衛生観念からなるものであると考える。

そして、「お天道さまは見ています」という言葉に代表されるような自制心、克己心という心も日本人の根底に根付いているのではないだろうか。さらに、聖徳太子の17条の憲法第1条にある「和を以て貴しと為す」という考え方は、集団としてまとまり調和してゆくことの浸透にも繋がってきた歴史があるのではないだろうか。それを負の側面から見ると村八分に現れている集団心理・同調圧力といった面も生んできたといえる。

こうした日本人の衛生観念と気質は、この度のコロナ禍においても感染拡大防止への衛生管理への積極的な取り組み、緊急事態宣言下での営業や行動の自粛要請への対応などに明らかに表れていたと考えるのである。

東京医科大学教授の濱田篤郎は、日本で新型コロナウイルスの感染者・死亡者が少ない理由を著書にて「これだけ感染者数が少なかった理由は他にもある。一つの理由としては、日本人の清

潔志向やマスクをする文化が関係していたのかもしれない。また、行政から出される外出自粛や休業要請などの指示に一律に従うという国民性ももう一つの理由になるだろう。」と述べている。(濱田篤郎 2020、P.176)

お茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦は、寄稿の中で日本が抑えた2度のパンデミックとして「清潔を重んずる土壌もあり、今回のコロナ禍で、日本は被害を最小限に抑え込みそうです。(中略)実は2009年にパンデミック化した新型インフルエンザでも日本は死亡率を0.16と最も低く抑えていたのです。今回も含め、医療従事者の献身はもちろんですが、国民の高い公衆衛生意識、規律や秩序などの高い公の精神、すなわち民度の高さの勝利なのです。」と述べている。(藤原正彦 2020、P.104)

コロナ禍における日本人の意識・行動は、第4節にて述べた明治期に日本の衛生行政を切り拓いた長与専斎が理想としていた、国民一人一人が自衛の意識で衛生に努めることができる意識の浸透と体制づくりが帰結した形ではないだろうか。

また、京都大学・IPS細胞研究所教授の山中伸弥は自身のホームページにて新型コロナウイルスにおいてアジア・オセアニア地域の死亡者数が欧米と比較して明らかに少ないことに対して、何かしらの理由となるファクターXが存在するのではないかと述べている。山中のホームページによるとファクターXとは以下のように述べられている。

新型コロナウイルスへの対策としては、徹底的な検査に基づく感染者の同定と隔離、そして社会全体の活動縮小の2つがあります。日本は両方の対策とも、他の国と比べると緩やかでした。PCR検査数は少なく、中国や韓国のようにスマートフォンのGPS機能を用いた感染者の監視を行うこともなく、さらには社会全体の活動自粛も、ロックダウンを行った欧米諸国より緩やかでした。しかし、感染者や死亡者の数は、欧米より少なくて済んでいます。何故でしょうか？私は、何か理由があるはずと考えており、それをファクターXと呼んでいます。ファクターXを明らかにできれば、今後の対策戦略に活かすことが出来るはずです。

ファクターXの候補

- ・クラスター対策班や保健所職員等による献身的なクラスター対策
- ・マラソンなど大規模イベント休止、休校要請により国民が早期(2月後半)から危機感を共有
- ・マスク着用や毎日の入浴などの高い衛生意識
- ・ハグや握手、大声での会話などが少ない生活文化
- ・日本人の遺伝的要因
- ・BCG接種など、何らかの公衆衛生政策の影響

・2020 年 1 月までの、何らかのウイルス感染の影響

・ウイルスの遺伝子変異の影響

などが考えられます。遺伝的要因については、私たちも iPS 細胞を使った研究を開始しています。しかしファクター X の実態が明らかになるまでには時間がかかります。今後、社会活動の制限を最小限に抑えるためには、実態不明のファクター X に頼ることなく、医療体制の整備と共に、検査体制、感染者の同定と隔離体制をしっかりと整えることが重要です。(山中伸弥 2020、ホームページ)

山中の述べるファクター X の候補において、マスク着用や毎日の入浴などの高い衛生意識、ハグや握手大声での会話などが少ない生活文化の 2 点は、日本人の衛生観念と文化からなるものであるといえる。そして、クラスター対策班や保健所職員等による献身的なクラスター対策、マラソンなど大規模イベント休止、休校要請により国民が早期(2 月後半)から危機感を共有の 2 点においては、クラスター対策班や保健所職員のみならず国民や企業・団体もクラスターとならない意識が高まり、イベント休止や休校により国民が危機感を共有したことは、いずれも日本人特有の気質が行動として発揮されたといえるのではないだろうか。

山中の言葉の通り、決してファクター X に頼るものではないものの、今後も起こりうる新たなパンデミックへの対応や私たちがウイルスとの共生を当たり前のこととして生きてゆく局面において、感染症の予防・治療・対策・生活や行動様式の変容を進めることに加えて、日本人特有の衛生観念と気質・文化というものを失うことなく大切な礎としてゆくことが様々な対応・対策の効果をより高めることにつながるということを本章のまとめとして述べておきたい。

## 第4章 現代的意義とポストコロナ

### 第1節 パンデミック、再び

#### 第1項 新型コロナウイルスの大流行

2020 年、世界は新型コロナウイルス(COVID-19)のパンデミックに見舞われ、我々の社会・経済・文化活動は、それまでと大幅な変更を余儀なくされた。

学校は休校が続き、再開後もデジタルを駆使した授業の在り方を模索している。また「新しい生活様式」なるものにより、社会的距離(ソーシャルディスタンス)を確保することが求められるようになった。経済活動においても、リモートワークが推奨されるようになり、不慣れな環境に苦慮している事業者・就業者も少なくない。とりわけ観光・飲食産業への影響はすさまじく、また観光立国を標榜していた矢先の入国制限もあり、非常に困難な状況が続いている。映画館、スポーツ観戦やコンサート鑑賞は、会場の座席の半分しか埋めないよう入場者数を制限したり、大きな声を出さない等の要請を行っている。

今年初めの感染拡大当初は、どこか他人事のように感じていたくらいもあったかもしれないが、ここ日本でも多くの著名人が感染し、またイギリスのボリス・ジョンソン首相、そしてアメリカのドナルド・トランプ大統領も感染するなど、ウイルスは文字通り人を選ばず、誰にでも感染の可能性があることが改めて実感されたのではなかろうか。

日本国内においては9月頃には一旦減少の傾向が見られたものの、第2項で示す通り11月末時点でいわゆる第三波に見舞われており、感染者数は日に日に増加している。それに伴って、政府主導の観光需要喚起策である「GoTo トラベル」において、大阪市および札幌市を目的地とする旅行がキャンペーン対象から除外されたり、また東京都内では飲食店に対して営業時間の短縮を要請するなど、感染拡大防止に向けた策が講じられている。

経済か、命かといったトレードオフのような議論が各所で散見されるが、どちらも見捨てられるべきではないのはいうまでもないことである。このトレードオフを起こさせないためにワクチン開発などの科学技術が、最先端のテクノロジーを駆使した働き方や教育が、そして本論文のメインテーマであるペストを経て蓄積された知見が、その才幹を発揮すべきではなかろうか。

## 第2項 新型コロナウイルスの定量的事実

2020年11月30日現在、日本および世界の感染者は、以下の通りである。



|          | 感染確認                   | 重症   | 死亡                | 退院       |
|----------|------------------------|------|-------------------|----------|
| 日本国内 ※   | 14万9002人<br>前日比 +1439人 | 472人 | 2152人<br>前日比 +26人 | 12万3445人 |
| うちチャーター機 | 14人                    |      |                   |          |
| クルーズ船    | 712人                   | 0人   | 13人               | 659人     |
| 合計       | 14万9714人<br>前日比 +1439人 | 472人 | 2165人<br>前日比 +26人 | 12万4104人 |

図 11 日本国内における感染者数(2020 年 11 月 30 日現在)

出典:NHK ウェブサイト <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/>

傾向としては、7 月中旬からのいわゆる第二波から 9 月頃にかけて一旦減少傾向にあったものの、10 月下旬からまた増加の一途をたどっており、第三波とよばれて一日あたりの新規感染者数が最高を更新する日々が続いている。

| 国・地域  | 感染状況 | 感染者        | 死者        | 回復者<br>(報告ありの場合のみ) |
|-------|------|------------|-----------|--------------------|
| 合計    |      | 63,064,754 | 1,466,811 | 40,627,494         |
| 欧州    |      | 17,248,413 | 393,748   | 6,651,274          |
| 北米    |      | 13,913,319 | 280,185   | 5,932,529          |
| 中南米   |      | 13,040,658 | 447,964   | 11,369,009         |
| アジア   |      | 12,401,229 | 194,895   | 11,432,700         |
| 中東    |      | 4,229,795  | 96,949    | 3,474,147          |
| アフリカ  |      | 2,186,554  | 52,055    | 1,735,029          |
| オセアニア |      | 44,786     | 1,015     | 32,806             |

図 12 世界の感染者数(2020 年 11 月 30 日現在)

出典 Johns Hopkins 大学等のデータに基づく Reuters グラフィックスによる

<https://graphics.reuters.com/CHINA-HEALTH-MAP-LJA/0100B5FZ3S1/index.html>

全世界では感染者数が 6,300 万人、死者数が 140 万人を超えており、こちらも減少の兆しが見えていない状況である。

## 第2節 ペストとの共通点および相違点

新型コロナウイルスのパンデミックについての考察において、よく引き合いに出されるのが、本論文のメインテーマでもあるペストである。新型コロナウイルスとペストの間には、時代背景が異なるため相違点が多いが、時代背景が異なるにも関わらず、かえって多くの共通点が見られることも今年度の研究を通じて分かったことである。本節では、その共通点と相違点について触れておきたい。

### 第1項 共通点

共通点においてとりわけ注目すべきは、差別や分断でないだろうか。第2章にもある通り、ペスト流行以前からユダヤ人の迫害は存在したが、ペストも迫害のための呼び水となり、なお一層の迫害・虐殺が行われている。新型コロナウイルスに関しても、当初中国の武漢に端を発したことから、欧米でもともと存在していたアジア人差別に拍車がかかることとなった。また、時を同じくして北米での黒人差別とそれに抗議する運動が世界規模で展開された。北米における感染者が、黒人が多いのも北米という社会を如実に表現しているのではないだろうか。また、アメリカ大統領選挙においても、新型コロナウイルスへの対応が政争の具になるなど、本来力を合わせて撲滅、収束に向かうべきところで、ウイルスでさえ自己主張のツールとなってしまったのである。

### 第2項 相違点

相違点に関していえば、人口から医療を含めた科学技術、経済構造などそのほとんど全てがペスト期とは異なっているが、ここではあえて、情報伝達的手段および速度について言及したい。

ペスト期における情報伝達といえば、口伝が主な手段だったのではなかろうか。ヨハネス・グーテンベルクが活版印刷を発明したのが1445年であることを考慮すると、それ以前は口伝が、それ以降は印刷物による情報伝達が行われたのだらうと思われる。中国では1445年以前から印刷技術は存在したようだが、漢字文化圏では、アルファベット26文字と比較して活字の数が膨大であるため、そこまで定着、普及することはなかった。

対して現代は、インターネットで世界中の情報に多くの人がいつでもアクセスできるようになった。それ自体は素晴らしいことであるが、問題点も多くある。中でも特筆すべきは、発信者の信頼性ではないだろうか。

人は自分にとって都合の良い情報や意見を好み、信じやすい。そして、誰でも情報を発信できる現代においては、そういった人の特性を利用して、誤った情報や、発信者にのみ利益が生ずる情報の発信も可能になってしまうのである。

情報にいつでも、即時アクセスできることそれ自体は今後もそのようになるだろうが、受け手側にも情報の信憑性を、その正確性を推し量るリテラシーが必要なのではなかろうか。

### 第3節 現代的意義と、歴史から学べること

ペストの流行から、新型コロナウイルスへの対応に関して現代の我々は何を学ぶことができるのか。本節では、その現代的意義について考察してみたい。

#### 第1項 イデオロギーとウイルスの親和性

新型コロナウイルスへの対応の方法論として、大きな括りで語られる文脈としては、次のようなことが挙げられるのではなかろうか。いわゆる欧米的な、個人主義的・人権主義的なものと、中国のような情報統制的なものとの対比である。言い換えれば、自由主義的・資本主義的なものと、共産主義的なものと表現しても良いかもしれない。

そして、実際に公になっている情報の確度の問題はあるにせよ、ウイルスの蔓延という事象に対しては、後者の中国的なものの方が、親和性が高いのではないだろうか。これは称賛する意味合いではなく、ウイルスとの付き合い方を考える上でのひとつの判断である。そして、その両極のどちらかに属していると明確にはいえないであろう日本の対策が、今のところ最も奏功しているのではなかろうか。これは日本の対策そのものというよりも、日本人の性格や気質に起因しているように見受けられる。例えば日本ではマスクの着用は罰則を伴う形での義務化はされていないが、今は多くの人が日本ではマスクを着用して外出している。一部マスクの着用を巡ったトラブルのようなものも散見されるが、言い換えればそれは、マスクを多くの人がしているからこそであろう。

かえって欧州や北米などでは、やはりまだマスクをしていない人が多いような印象を受ける。特に 2020 年 10 月頃は、アメリカ大統領選の真っ只中であり、大規模な集会在各地で開催されている。ニュース等で見るその光景は、やはりマスクをしていない参加者が多く見受けられて、北米での感染拡大の根本原因が垣間見える。

## 第2項 イデオロギー対立の終焉としてのウイルス

中国に端を発した(であろう)新型コロナウイルスへの対応を巡っては、とりわけアメリカが中国に対して、そして WHO に対しても、責任の所在を求めている。見方を変えれば、イデオロギー対立のツールとしてウイルスを利用していると見受けられるような節もある。一方、かつての米ソ冷戦に見られたようなイデオロギー対立などといったものではなく、単に自国の利益のみを求めているだけのようにも見える。いずれにしても、ウイルスにとっては国家も国境も、当然イデオロギーも関係のないことである。であれば本来人間も、ウイルスの前では国家やイデオロギーを超えて協力し合うべきではないだろうか。しかしながら、現在の情勢を見ている限り、ウイルスによってイデオロギーの対立が終焉を迎えることはなさそうである。

## 第4節 ポストコロナに向けて

アフターコロナ、ウィズコロナ等、新型コロナウイルス後の世界(ポストコロナ)として様々な表現があるが、私たちはそのような世界でどのようにふるまうべきなのか。

本論文の第3章 第7節にある通り、私たち日本人特有の衛生観念や気質・文化はポストコロナの世界において、その存在感を増すのではないだろうか。特に、日本人の規律と柔軟性は、とりわけ欧州諸国や北米ではなかなか見られないと思慮される。

前節の第1項でも触れた通り、マスクの着用を求められれば素直に応じて、また品不足になった場合でも暴動を起こすようなこともめったに起こらない。そして、国民皆保険制度に基づいた医療体制もあるだろう。

柔軟性はあるいは自己の欠如のように捉えられるかもしれないが、ことウイルス対策といった意味では、有用ではなかろうか。

また、働き方や、教育、とりわけ大学の在り方については、まだ正解は見つかっていないだろう。ひとついえることは、最新のテクノロジーを駆使したデジタルの活用と、今まで疑問に思うことなく行ってきたリアルの再定義ということではないだろうか。

そして、とりわけ教育の現場では、デジタルの活用において学生同士に差が出るようなことはあ

ってはない。また、デジタルの活用が普及することによって、相対的にリアル的重要性が再認識されるであろう。これは教育の現場に限らず、ビジネスにおいても同様である。そうなった時にどう振る舞うかが、そして過去から、歴史から学ぶことこそが、ポストコロナの社会を生き抜くヒントを示唆しているのではないだろうか。

## 第5節 ポストコロナの方向性

### 第1項 3つの潮流

現在のコロナ禍での経験は、これまでの世界の大きな潮流を変化させている。その変化には、①既に表れていた潮流の加速、②新たな潮流の出現、③価値の再認識、の3通りがある。これらの視点から、ポストコロナの社会を方向づける3つの潮流があげられる。

第一に、持続可能性の優先順位の上昇である。近年のSDGs(持続可能な開発目標)への関心の高まりに象徴されるように、既に表れていた潮流の加速である。第二に、集中から分散・多極に向かう潮流である。パンデミックを契機としたビジネスモデルや暮らし方の変革は、これまでの効率性を重視した集中から分散へと、新たな潮流を出現させたといえる。第三は、デジタルの加速とリアルとの融合である。人々の価値観の変化と技術の受容性の向上により、全世界でデジタル化が今後加速するだろう。同時にリアルの価値が再評価されたこともある。デジタルとリアルとの使い分けや、リアルの魅力をより引き出すデジタルの活用といった両者の融合が進んでいくことが予想される。

### 第2項 レジリエントで持続可能な社会の実現

三菱総合研究所の報告によると、ポストコロナで目指すべきは「レジリエントで持続可能な社会」の実現であるとしている。このレジリエントで持続可能な社会とは、感染症等のショックに対しても柔軟に耐える社会であるとともに、地球環境を維持しつつ、経済の豊かさ、そして個人のウェルビーイング(身体的・精神的・社会的に良好な状態)を持続的に両立できる社会であるとする。

この社会を実現するための方向性として、(1)レジリエンスを高めるために「自律分散」的なシス

テム構築を目指すこと、(2) 政府、企業、市民が持続可能性を重視し「協調」的な動きを行うこと、の 2 つの軸を据えている。

## 第6節 日本社会が直面する課題

### 第1項 コロナ感染拡大による変容と問題点

令和という時代を迎えたにもかかわらず、日本はいまだに昭和時代のシステム・体制を引きずっている。戦後の人口ボーナス期に適正化された社会の仕組みを、高度経済成長やその後のバブル経済という成功、挫折体験によって変更出来ずに今日まで至っている。その代償として、現在、様々な問題に直面している。

(1) 東京一極集中および地方の弱体化。首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)が国全体の GDP および人口に占める割合はニューヨークの 3 倍超であり、パリ、ロンドンと比較しても高い。

(2) IT 投資の低さや業務効率化の立ち遅れなどに起因する労働生産性の低さがあげられる。労働生産性は OECD 平均の 8 割強、米国のわずか 6 割程度にとどまり、週 49 時間以上就労している長時間労働者の割合は 2 割を超える(米国 16.4%、イギリス 12.2%、フランス 10.5%、ドイツ 9.3%)。

(3) 先行き不透明な超高齢化社会への対応がある。介護分野の 2019 年の有効求人倍率は 4.32(求職者 1 人に対して、4 人以上の求人。全産業では 1.53)と高い水準である。介護人材は増えてはいるものの要介護高齢者の増加スピードには追い付いておらず、この状況で推移すると 2025 年度には全国で 40 万人近くの介護人材が不足すると危惧されている。

上記は一例だが今回のコロナ禍の問題で、こうした従来から抱える日本社会の問題点をあぶり出す結果となった。ビフォーコロナで我々が追い求めていたものは、端的に言えば、経済合理性・効率化の追求である。夜 11 時までの営業だったコンビニエンスストアは 24 時間営業が普通となり、交通網の発達で都心への人口集中を生んだ。消費者は価格の合理性、コストパフォーマンスを求め、結果、経営者もそれに合わせ、狭い店舗スペースに人を集め薄利多売で収益を上げるという効率化重視のビジネススタイルが主流となっていく。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、従来軽視してきた持続性の確保(安心とレジリエンス)の重要性を改めて顕在化させた。これまで削減されてきた行政や医療の人財、施設といった資源は、コロナ禍によってさらに逼迫し、医療機関や介護施設の現場では担い手不足に加え、文字

通り「人手」が頼りの「密」な環境のため、エッセンシャルワーカーと呼ばれるその担い手の人々は、常に感染の危機にさらされ疲弊し切っている。他産業分野でも目先の経済合理性を追求した従来のビジネスモデルが継続困難となったことで、収入的に困難を伴う人々も現れはじめている。

そこで「安全安心への希求」「様々な業務システムや働き方の効率化・変革」を求める新しい潮流が我が国の社会でも生まれつつある。コロナ禍は国難ともいえるが、今後のこの潮流を読み解き、活かしていくことで、従来積み残してきた問題の改善の契機にすべきだろう。

我が国の歴史を振り返る際、社会の大変革としては明治維新と敗戦がある。変化よりも安定を好むこの国と国民性において社会の体制そのものが決定的に破壊された時でしか、時計の針は進まないことを裏付けているようなものである。

しかし今後「世代交代の可能性」も一つのチャンスであろう。デジタルネイティブ世代と重なる「ミレニウム世代」（今年成人を迎えた前後の年齢層）とそれ以降の世代を合わせた人数が、労働力人口の半数を超え始める 2030 年以降では、「オンラインとオフライン」、「リアルとバーチャル」のハイブリッドが当り前の社会をごく自然に受け入れる層が多数派を占めていくことが予想される。

## 第2項 ポストコロナ後の具体的変革

東京、大阪などへの都市一極集中は、コロナ感染拡大によりヒト・モノ・カネが集中する大都市の脆弱性を露呈することとなった。明治期以降、戦後に至るまでの中央集権型社会システムは、地域の均衡ある発展と地域独自の文化醸成を阻害する結果となった。

コロナについては近い将来ワクチンや予防薬が開発され、弱毒化が進んでいき毎年恒例のインフルエンザ予防接種のように、感染予防が段階的に可能となっていくだろう。だが、近い将来でまた別の新たな病原体によるパンデミックは高い確率で起こり得るだろう。

その未来に起こり得る危機に備えるために、国土の地域間の均衡と医療・社会システムを始めとする地域の成熟化に対し、国は舵を切り替えていく必要に迫られている。

例えば、オフィスワーク企業については、テレワーク技術を活用した在宅勤務を導入することで、感染拡大の抑制と経済活動の維持を両立させる取り組みが進行中である。自宅で扱う情報のセキュリティなどについては課題もあるが、技術面、制度面での対策が進めばデジタル化、リモート化は今後加速していくだろう。

その一方、飲食、製造、観光などの非オフィスワークの事業においては、「人との接触」を前提としたビジネスモデルであるため、現状のまま利益水準を維持することは難しい。

特に、地域経済を支える観光業の打撃は深刻である。観光白書によると、コロナ禍のあおりで訪日外国人の数は2020年4月で前年比マイナス99%。観光庁によると、2020年4～6月期の国内旅行消費額は、前年同期比83.3%減の1兆40億円(速報値)となっている。さらに世界の観光産業全体では、2020年1～5月の損失だけでも、リーマンショック後の3倍以上の3,200億ドル(日本円で約34兆円)となっている(国連世界観光機関による推計)。

流通に関してはECが普及しているが、供給の要となる製造、在庫管理、輸送においてもさらなる自動化が望まれている。フィジカルディスタンスが近くなりがちな業種(飲食、観光など)を含むあらゆる業種・業界の就業者がネット上でアバター(分身)を使って活動できるようにする動きも見られる。ゲーム上のキャラクターを動かすように自律型ソフトウェアロボットに業務指示を行うといったことが可能になれば、AIをエージェントとしながら効率的に業務を遂行することも今後可能となるだろう。

オフィスワーク分野についても、テレワークの推進のみならず定型的な事務作業などの分野でRPA(ロボティックプロセスオートメーション)の導入や、「アバター労働(オンライン上の仮想空間での労働)」が一般的になるかも知れない。

飲食業については、会計・調理の自動化、小売業の店舗無人化は実現の可能性が高いとみる向きもある。無人店舗での調理可能な法律整備が今後求められてくるだろう。

観光業は、今回、従来の観光の在り方がパンデミックや災害に対して非常に脆弱であることを思い知らされただろう。一過性の観光での「交流人口」だけではなく、普段からリアルな交流やリモート交流を通じて、地域と様々な形で関わりを持つ「関係人口」を増やすことで持続可能な需要を作っていく必要がある。また、例えばARやVRを活用したバーチャル旅行など、新たな観光の形についても模索が始まっている。

オンラインを始めとした仮想空間での活動により、社会全体では自宅から職場に出勤するという日常生活が変わり、自宅に居ながらにして経済活動に参加することが主流となる。それに伴って人生における仕事の意味も変わっていくことが予想される。また、アバター出勤・労働が一般化すれば、障がい者など従来社会が取り込みにくかった多様な人材の活躍の場が期待される。そして、職業の変更や副業が行いやすくなることで、従来と比べると、一生同じ会社に勤める人は少数になっていく傾向が進むだろう。



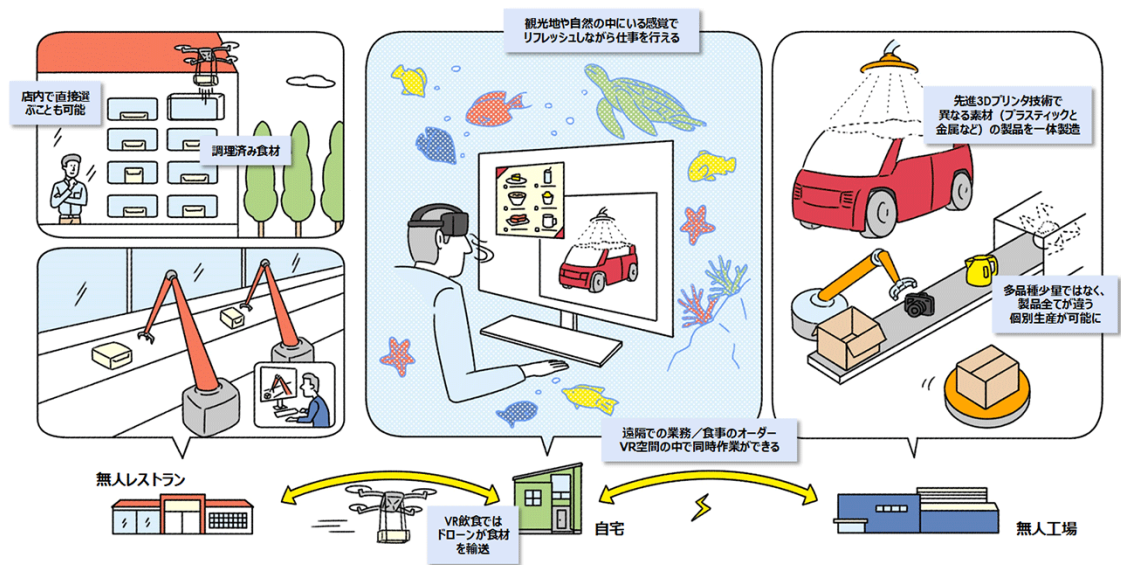


図 13 あらゆる業種において自宅で仕事を行うことが可能に

出典：三菱総合研究所

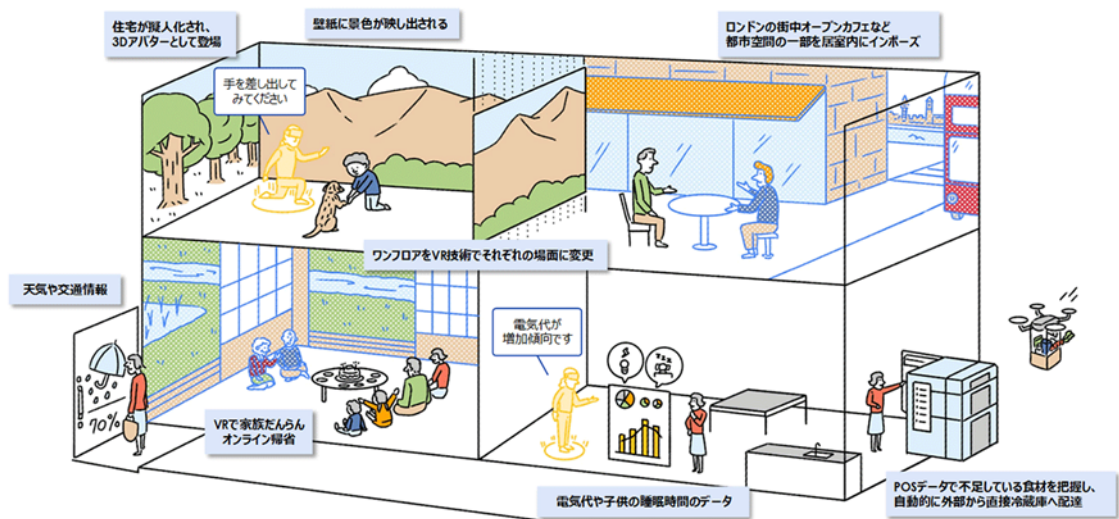


図 14 自宅に居ながら都市的サービスを楽しむ(スマートホームの整備)

出典：三菱総合研究所

## 第7節 ポストコロナの世界と民主主義の行方

ポストコロナでは世界各国の「協調」が求められるが、現実には米中対立に代表されるように不安定化要素が現在も多く存在する。各国政府が取った移動規制とロックダウンは、運輸・観光はもとよりサービス業や小売業に壊滅的な打撃を与え、リーマン・ブラザーズ破綻後の世界金融危機と異なり、株式市場の暴落は現在のところ起こっていないが、失業者は各国で急増しているのが現状である。

製造業のグローバルなサプライチェーンも寸断され、ロックダウンのもとで貿易よりも国内市場が重視されたこともグローバル経済の連携を著しく弱める結果となった。既に反グローバリズムの運動は世界に広がっていたが、コロナウイルスはそのような運動を凌駕するほどの打撃をグローバル経済に与えている。

コロナ後の世界では、代表的な大国間の政治的緊張はやはり米中関係である。ウイルス感染のはじまりとなった中国は感染の収束も比較的早くポストコロナの世界でこれまで以上の影響力を拡大しようとしている。全国人民代表大会(全人代)に合わせて開かれた記者会見において中国の王毅(ワン・イー)外相は、コロナウイルス感染の責任追及に反発し、アメリカでは中国への誹謗(ひぼう)中傷という政治ウイルスが拡散していると述べた。その全人代において中国政府は国防費6.6%増を決める一方、国家安全法案を提出して香港への締め付けを強め、各国から非難を受ける結果となった。

こうした情勢の中、国際政治学者の藤原帰一教授は、ポストコロナの世界の民主主義について以下の様に言及している。

「コロナ危機への各国政府の対応は人権への制約を伴った。国外からの入国の拒否、国内における人の移動への制限、家から出ることを阻むロックダウンから商店の営業規制に至るまで、コロナ対策として採用された数々の政策が個人の自由を奪うものであったことは否定できない。スマートフォンの個人情報を掌握することなどによって人の移動を追いかけ、規制する動きも広がっている。中国によるウイルス感染拡大の防止は AI を駆使した新しいサーベイランス、監視技術を活用することによって実現したのである。

ウイルス感染を阻止する緊急手段としては短期的な人権剥奪もやむを得ないかも知れない。だが、危機が収束しても統制がなくなるとは限らない。そもそも中国政府による国民監視は短期的手段というより国家制度と呼ぶべきだろう。新技術によるサーベイランスは中国に限ったことではない。民主主義国においても、これまでなら全体主義の特徴と見られたような国家による個人情報の収

集と監視が行われているからだ。『ホモ・デウス』などの著作で知られるユヴァル・ノア・ハラリは、英紙フィナンシャル・タイムズ(2020年3月20日付)への寄稿において、コロナ危機への対応では新しい監視技術による情報集積が用いられていることを指摘し、短期的な緊急措置が日常となってしまう危険に警鐘を鳴らした。危機管理を達成するために、自由と民主的な統治が犠牲にされてしまう危険がある。政策選択に関する自由な言論なしには私権の制限を認めることはできないと私は考える。

この前提を取り払ってしまえば、緊急事態に取られた非常手段が長期的な権力集中をもたらし、市民社会の自律性は失われる。コロナ後の世界を自由の終わりにしてはならない。」

(2020年5月27日付朝日新聞夕刊『時事小言』)と藤原教授は述べている。中国政府が香港におけるデモ封じ込めの大義名分としてコロナ感染拡大防止を利用したことは記憶に新しい。ポストコロナ社会でパンデミックや災害危機管理の名のもと、個人のプライバシー、移動の自由といった私権の制限や民主的プロセスの停止といった行為が、政府、権力者により過度に助長されないよう、我々市民一人一人がその線引きをしっかりと判断し意識を高めていくことがコロナ後も求められるだろう。

## 関連年表

| 世紀    | モンゴル                                                 | ヨーロッパ                                                         | 日本                                                                                                             |
|-------|------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ～6 世紀 |                                                      | 70 年 エルサレム破壊<br>ユダヤ人のディアスポラが<br>始まる<br>541 年 ユスティニアヌス<br>のペスト | 日本書紀による最初の疫<br>病の記録<br>552 年 仏教伝来                                                                              |
| 11 世紀 |                                                      | 1096 年 第一次十字軍                                                 |                                                                                                                |
| 13 世紀 | 1252 年 ビルマよりペスト<br>流入<br>1271 年 元 成立                 |                                                               | 1274・1281 年 元寇                                                                                                 |
| 14 世紀 | 1331 年 ペスト全土に拡<br>大<br>1347 年 カップファ攻防<br>1368 年 明 成立 | 1347 年 カップファ攻防を経<br>てペスト(黒死病)入欧                               | 日本にペスト流入せず                                                                                                     |
| 16 世紀 |                                                      |                                                               | 1510 年頃 梅毒流入                                                                                                   |
| 19 世紀 |                                                      |                                                               | 1822・58・77・79 年<br>コレラ流行<br>1849 年 緒方洪庵による<br>牛痘の接種開始<br>1874 年～ 長与専斎によ<br>る衛生行政<br>1897 年 北里柴三郎によ<br>るペスト菌の発見 |

## 参考文献一覧

1. 寺島実郎『日本再生の基軸——平成の晩鐘と令和の本質的課題』(岩波書店,2020)
2. 飯島渉『ペストと近代中国』(研文出版,2000)
3. 飯島渉『感染症の中国史——公衆衛生と東アジア』(中公新書、中央公論新社,2009)
4. 飯島渉『感染症と私たちの歴史・これから』(歴史総合パートナーズ第4巻、清水書院,2018)
5. 石坂尚武『どうしてルターの宗教改革は起こったか——ペストと社会史から見る』(ナカニシヤ出版,2017)
6. 石坂尚武『イタリアの黒死病関係史料集』(刀水書房,2017)
7. 石坂尚武『苦難と心性——イタリア・ルネサンス期の黒死病』(刀水書房,2018)
8. 氏家幹人『江戸の病』(講談社選書メチエ 437、講談社,2009)
9. 荻上チキ『検証 東日本大震災の流言・デマ』(光文社新書 518、光文社,2011)
10. 梶田昭『医学の歴史』(講談社学術文庫,2003)
11. 川島高峰『銃後——流言・投書の太平洋戦争』(読売新聞社,1997)
12. 海音寺潮五郎『蒙古の襲来』(河出書房新社,2008)
13. 蔵持不三也『ペストの文化誌——ヨーロッパの民衆文化と疫病』(朝日新聞社,1995)
14. 黒田俊雄『蒙古襲来』(『日本の歴史』第8巻、中央公論,1965)
15. 黒川知文『ユダヤ人迫害史——繁栄と迫害とメシア運動』(教文館,1997)
16. 黒川知文『ユダヤ人の歴史と思想』(ヨベル,2018)
17. 小松左京『復活の日』(早川書房,1964)
18. 酒井シヅ『日本の医療史』(東京書籍,1982)
19. 酒井シヅ『病が語る日本史』(講談社,2002)
20. 笹山晴生・佐藤信・五味文彦・高埜利彦『詳説日本史』(改訂版 B309、山川出版社,2017)
21. 佐藤健二『流言蜚語——うわさ話を読みとく作法』(有信堂高文社,1995)
22. 島崎晋『人類は「パンデミック」をどう生き延びたか』(青春出版社,2020)
23. 清水克行『大飢饉、室町社会を襲う!』(吉川弘文館,2008)
24. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(上)』(講談社現代新書,1996)
25. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(下)』(講談社現代新書,1996)
26. 立川昭二『病気の社会史——文明に探る病因』(日本放送出版協会,1971。岩波現代文庫、岩波書店,2007)

27. 田村実造編『大モンゴル帝国』(『東洋の歴史』第7巻,人物往来社。『中国文明の歴史』第7巻,中央公論新社,2000)
28. 東北学院大学 震災の記録プロジェクト・金菱清(ゼミナール)編『呼び覚まされる霊性の震災学——3・11 生と死のはざままで』(新曜社,2016)
29. 新村拓『日本医療社会史の研究——古代中世の民衆生活と医療』(法政大学出版局,1985)
30. 新村拓『死と病と看護の社会史』(法政大学出版局,1989)
31. 新村拓編『日本医療史』(吉川弘文館,2006)
32. 新村拓『日本仏教の医療史』(法政大学出版局,2013)
33. 濱田篤郎『パンデミックを生き抜く——中世ペストに学ぶ新型コロナ対策』(朝日新聞出版,2020)
34. 富士川游『日本疾病史』(吐鳳堂,1912)
35. 見市雅俊『コレラの世界史』(晶文社,1994)
36. 宮崎揚弘『ペストの歴史』(山川出版社,2015)
37. 村上陽一郎『ペスト大流行——ヨーロッパ中世の崩壊』(岩波新書黄版 225、岩波書店,1983)
38. 百島祐貴『医学生のための医学史』(ボイジャー・プレス/医学教育出版社,2017)
39. Albert CAMUS(アルベール・カミュ)『La peste(ペスト)』(創元社,1950)
40. Connie WILLIS(コニー・ウィリス)『Doomsday book(ドゥームズデイ・ブック)』(早川書房,1995)
41. Daniel DEFOR(ダニエル・デフォー)『A journal of the plague year(ペストの記憶)』(研究社,2017)
42. Gabriel GARCÍA MÁRQUEZ(ガブリエル・ガルシア=マルケス)『El amor en los tiempos del cólera(コレラの時代の愛)』(新潮社,2006)
43. Guy Richard(ギ・リシャール)『Ailleurs, L'herbe est plus verte(移民の一万年史——人口移動・遙かなる民族の旅)』(新評論,1996)
44. Jared DIAMOND(ジャレド・ダイヤモンド)『Guns, germs, and steel: the fates of human societies(銃・病原菌・鉄——一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎)』(草思社,2000)
45. Jack WEATHERFORD(ジャック・ウェザーフォード)『Genghis Khan and the making of the modern world(チンギス・ハンとモンゴル帝国の歩み——ユーラシア大陸の革新)』(パンローリング,2019)

46. Janet L.Abu-Lughod (ジャネット・L・アブー＝ルゴド)『Before European hegemony: the world system A.D. 1250-1350. (ヨーロッパ覇権以前) (上)』(岩波書店,2001)
47. Janet L.Abu-Lughod (ジャネット・L・アブー＝ルゴド)『Before European hegemony: the world system A.D. 1250-1350. (ヨーロッパ覇権以前) (下)』(岩波書店,2001)
48. Jean-Marie Gustave LE CLÉZIO (ル・クレジオ)『La quarantaine (隔離の島)』(筑摩書房,2013)
49. John KELLY (ジョン・ケリー)『The great mortality : an intimate history of the Black Death, the most devastating plague of all time (黒死病——ペストの中世史)』(中央公論新社,2008)
50. José SARAMAGO (ジョゼ・サラマーゴ)『Ensaio sobre a cegueira (白の闇)』(日本放送出版協会,2001)
51. Norman F. CANTOR (ノーマン・カンター)『In the wake of the plague: the Black Death and the world it made (黒死病——疫病の社会史)』(青土社,2002)
52. Sandra HEMPEL (サンドラ・ヘンペル)『ビジュアル パンデミック・マップ——伝染病の起源・拡大・根絶の歴史』(日経ナショナル ジオグラフィック社,2020)
53. Walter SCHEIDEL (ウォルター・シャイデル)『The great leveler: violence and the history of inequality from the stone age to the twenty-first century (暴力と不平等の人類史——戦争・革命・崩壊・疫病)』(東洋経済新報社,2019)
54. William H. McNeil (ウィリアム・H・マクニール)『Plagues and Peoples (疫病と世界史)』(新潮社,1985)
55. William J. Bernstein (ウィリアム・バーンスタイン)『A Splendid Exchange (交易の世界史) (上)』(ちくま学芸文庫,2007)
56. Willy Hansen・Jean Freney (ウイリー・ハンセン、ジャン・フレネ)『Des bacteries et des hommes (細菌と人類)』(中央公論新社,2004。中公文庫,2008)
57. Yuval Noah HARARI (ユヴァル・ノア・ハラリ)『Sapiens: a brief history of humankind (サピエンス全史——文明の構造と人類の幸福)』(河出書房新社,2016)
58. 寺島実郎「宗教改革が突き動かしたもの」(『世界』第 833 号(2012 年 8 月号)、岩波書店,2012)
59. 寺島実郎「プロイセン主導の統合ドイツに幻惑された明治日本——モンゴルという衝撃——十字軍と蒙古襲来」(『世界』第 903 号(2018 年 1 月号)、岩波書,2017)
60. 寺島実郎「中国の強大化・強権化を正視する日本の覚悟」(『世界』第 906 号(2018 年 4 月

- 号)、岩波書店,2018)
61. 寺島実郎「大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト」(『世界』第 907 号(2018 年 5 月号)、岩波書店,2018)
  62. 寺島実郎「ビッグ・ヒストリーにおける人類史」(『世界』第 909 号(2018 年 7 月号)、岩波書店,2018)
  63. 寺島実郎「一九六八年再考——トランプも「一九六八野郎」だった」(『世界』第 910 号(2018 年 8 月号)、岩波書店,2018)
  64. 寺島実郎「グローバル・ヒストリーへの入口を探って」(『世界』第 911 号(2018 年 9 月号)、岩波書店,2018)
  65. 寺島実郎「人類史における宗教の淵源」(『世界』第 914 号(2018 年 12 月号)、岩波書店,2018)
  66. 寺島実郎「世界宗教の誕生とその同時性」(『世界』第 915 号(2019 年 1 月号)、岩波書店,2018)
  67. 寺島実郎「現代日本人の心の所在地——希薄な宗教性がもたらすもの」(『世界』第 918 号(2020 年 4 月号)、岩波書店,2020)
  68. 寺島実郎「新型コロナウイルス危機の本質——理性ある対応とは何か」(『世界』第 919 号(2020 年 5 月号)、岩波書店,2020)
  69. 池田圭佑・榊剛史・鳥海不二夫・栗原聡「ロコミに着目した情報拡散モデルの提案およびデマ情報拡散抑制手法の検証」(『情報処理学会論文誌数理モデル化と応用』第 11 号,2018)
  70. 池田圭佑・榊剛史・鳥海不二夫・栗原聡「災害時におけるデマ拡散のモデル化から得られた知見の報告」(「2017 年度人工知能学会全国大会」第 31 回大会,2017)
  71. 諫早庸一「十三—十四世紀アフロ・ユーラシアにおけるペストの道」(『現代思想』第 48 巻第 7 号,青土社,2020)
  72. 石坂尚武「《峻厳な神》とペスト的心性の支配——一五世紀フィレンツェの立法・政策・判決に心性を読む」(同志社大学人文学会『人文学』第 191 号,2013)
  73. 石坂尚武「一四世紀イタリアの時代状況とペスト」(同志社大学人文学会『人文学』第 190 号,2012)
  74. 石坂尚武「黒死病でどれだけの人が死んだか——現代の歴史人口学の研究から」(同志社大学人文学会『人文学』第 189 号,2012)



75. 大谷明「文明と伝染病——その関連の歴史」(『日本細菌学雑誌』第 58 巻第 4 号,2003)
76. 佐々木博光「ペストの創作——ニュルンベルクのユダヤ人迫害、一三四九年一二月五日」(大阪府立大学人文学会『人文学論集』第 28 号,2010)
77. 佐々木博光「近代ドイツの歴史教科書にみる中世のユダヤ人迫害」(大阪府立大学人文学会『人文学論集』第 30 号,2012)
78. 佐々木博光「黒死病とユダヤ人迫害——事件の前後関係をめぐって」(『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』第 52 号,2004)
79. 立川昭二「交通と疫病」(ATSS - International Association of Traffic and Safety Sciences REVIEW 第 3 巻第 3 号,1977)
80. 中村昭「中世の流行病「三日病」についての検討」(『日本医史学雑誌』第 33 巻第 3 号,1987)
81. 加藤茂孝「人類と感染症との闘い——「得体の知れないものへの怯え」から「知れて安心」へ——第 9 回「インフルエンザ」——人類に最後まで残る厄介な感染症」(『モダンメディア』第 55 巻第 11 号,2009)
82. 小島和貴「大日本私立衛生会における長与専斎の活動とその評価」(『桃山学院大学総合研究所紀要』第 45 巻第 3 号,2019)
83. 小島和貴「「衛生工事」の進展にみる長与専斎の衛生行政構想」(『桃山法学』第 28 号,2018)
84. 藤原正彦「「日本人の品格」だけが日本を守る」(『文芸春秋』第 98 巻第 7 号,2020)
85. 脇村孝平「疫病のグローバルヒストリー——疫病史と交易史の接点」(『地域研究』第 7 巻第 2 号,2006)
86. 脇村孝平「コロナ危機と「スペイン風邪」——歴史から何が分かるのか」(『人間会議』第 42 号,2020)
87. 山中伸弥「山中伸弥による新型コロナウイルス情報発信」<https://www.covid19-yamanaka.com/cont11/main.html>
88. 厚生労働省 検疫所「ペストの発生報告——マダガスカル(更新 9)」(厚生労働省検疫所公式サイト,2017 年 11 月 30 日更新)<https://www.forth.go.jp/topics/2017/11301132.html>
89. 三菱総合研究所「特集 レジリエントで持続可能に向けて——ポストコロナの世界と日本」(『三菱総合研究所 マンスリーレビュー』2020 年 9 月号)  
<https://www.mri.co.jp/knowledge/mreview/202009.html>

90. 奥村隆一「ポストコロナを俯瞰する——その 3:コロナ危機を契機とした地方創生推進のポイントは？」(三菱総合研究所 コラム「新型コロナウイルス(COVID-19)危機対策:分析と提言」2020 年 11 月 30 日)[https://www.mri.co.jp/knowledge/column/20201130\\_3.html](https://www.mri.co.jp/knowledge/column/20201130_3.html)

## 2020 年アジアダイナミズム班年間スケジュール

| 回                        | 月  | 日     | 議 題                           | 文献調査                                       | フィールドワーク | 備 考                                             | 議事録 |
|--------------------------|----|-------|-------------------------------|--------------------------------------------|----------|-------------------------------------------------|-----|
| 1                        | 5  | 16    | 初回学長講話<br>自己紹介<br>今年度テーマ方向性   |                                            |          |                                                 | 北山  |
| 2                        |    | 23    | 分担発表                          | 次回ベース文献疑問など報告                              |          | 年間スケジュール確定<br>Google driveシェア<br>Facebookグループ作成 | 光永  |
| 3                        |    | 30    | 分担発表                          | 次回ベース文献疑問など報告                              |          | アジア班メンバー確定                                      | 半田  |
| 4                        | 6  | 6     | 分担発表                          | 次回ベース文献疑問など報告                              |          |                                                 | 和泉  |
| 5                        |    | 13    | 分担発表<br>研究計画発表PPT確認           | 文献集計・目次                                    |          |                                                 | 塚原  |
| 6                        |    | 20    | 分担発表<br>研究計画発表PPT確認           | 文献集計・目次                                    |          |                                                 | 柳沢  |
| 7                        |    | 27    | 分担発表<br>研究計画発表PPT確認           | 文献集計・目次                                    | FW検討(仮)  |                                                 | 古川  |
| 8                        | 7  | 4     | ◆研究計画中間発表                     | 研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク               |          |                                                 | -   |
| 9                        |    | 11    | ◆研究計画中間発表                     | 研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク               |          |                                                 | -   |
| 10                       |    | 18    | 研究計画発表反省<br>中間発表に向けた計画        |                                            |          |                                                 | 生田  |
| 11                       |    | 25    | 分担発表                          | 中間発表に向けた討議                                 |          |                                                 | 桑原  |
| 12                       | 8  | 1     | フィールドワーク                      | 大阪経済大学 脇村先生                                |          |                                                 | 光永  |
|                          |    | 8     | 休講                            |                                            |          |                                                 |     |
|                          |    | 15    | フィールドワーク                      | 中央学院大学 黒川先生                                |          |                                                 | 三田  |
|                          |    | 27/28 | ◆夏季合宿(予定)<br>箱根水明荘            | 発表者(役割分担): 1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・FW |          |                                                 | -   |
|                          | 9  | 5     | 休講                            |                                            |          |                                                 | -   |
|                          |    | 12    | 休講                            |                                            |          |                                                 | -   |
|                          |    | 19    | 休講                            |                                            |          |                                                 | -   |
| 13                       |    | 26    | 下期進行確認<br>分担発表                | 各執筆原稿の発表(状況報告)                             |          | 下期加入メンバー確定                                      | 半田  |
| 14                       | 10 | 3     | 分担発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)                             |          |                                                 | 北山  |
| 15                       |    | 10    | 分担発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)                             |          | 年間スケジュール再確認                                     | 池田  |
| 16                       |    | 17    | 分担発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)                             |          |                                                 | 小出  |
| 17                       |    | 24    | 分担発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)                             |          |                                                 | 柳沢  |
| 18                       | 11 | 31    | PPT目次レビュー<br>分担確認<br>論文推敲全体確認 | 各自完成版を持ち寄る                                 |          |                                                 | 山内  |
| 19                       |    | 7     | PPT目次レビュー<br>分担確認<br>論文推敲全体確認 | 全体を印刷して確認                                  |          |                                                 | 三田  |
|                          |    | 14    | 休講                            |                                            |          | 多摩大学学祭                                          |     |
| 20                       |    | 21    | PPT目次レビュー<br>分担確認<br>論文推敲全体確認 | 全体を印刷して確認                                  |          |                                                 | 光永  |
| 21                       | 12 | 28    | PPTレビュー<br>AL祭・最終発表に向けて       |                                            |          |                                                 | 塚原  |
| 22                       |    | 5     | PPTレビュー<br>AL祭・最終発表に向けて       |                                            |          |                                                 | 和泉  |
| 23                       |    | 12    | ◆アクティブラーニング祭                  | アクティブラーニング(AL)祭 (多摩キャンパス)                  |          |                                                 | -   |
| 24                       |    | 19    | ◆論文最終発表                       |                                            |          | 論文提出22日(火)                                      | -   |
|                          | 1  | 26    | 休講                            |                                            |          |                                                 |     |
|                          |    | 2     | 休講                            |                                            |          |                                                 | -   |
| 25                       |    | 9     | 最終稿確認                         |                                            |          |                                                 |     |
|                          |    | 16    | 休講                            |                                            |          | センター試験                                          | -   |
| 26                       |    | 23    | ◆最終論文提出                       | 最終論文(完成版)提出日                               |          |                                                 | -   |
|                          |    | 30    | 懇親会                           |                                            |          |                                                 |     |
| 授業回数 計27回(前期:12回 後期:15回) |    |       |                               |                                            |          |                                                 |     |

## 最終発表スライド



インターゼミ・アジアダイナミズム班



# 「パンデミックの ユーラシア史と ポストコロナ」

～モンゴル帝国史を起点としたペスト(黒死病)の欧州と日本の中近世史～

学 部 生 : 小出 幹、柳沢 悠介、池田 賢吾

大学院生 : 半田 敏章、三田 大祐、山内 美恵子、北山 智子

修 了 生 : 光永 和弘、塚原 啓弘、和泉 昌宏

指導教員 : 金 美徳 水盛 涼一



|    |   |                             |
|----|---|-----------------------------|
| 目次 | 1 | <b>論文の構成</b><br>問題意識、論文の章立て |
|    | 2 | <b>研究内容</b><br>各パート研究報告     |
|    | 3 | <b>フィールドワーク</b><br>報告、実施予定  |
|    | 4 | <b>参考文献</b><br>書籍、論文        |

2

## 問題意識

### 1. モンゴル帝国とパンデミック

①ウイルスや細菌との共生と国家維持の間に相関はあるか(半田)

### 2. 欧州のパンデミック

①ペストの感染拡大の原因と対策(池田)

②ペスト後の人口減少の影響と、社会構造の変化について(三田)

③宗教・芸術・ユダヤ人迫害に見るペスト前後の欧州人の心性の変容(小出・北山)

### 3. パンデミックの日本への影響

①日本の神仏信仰と疫病の関連性(山内)

②13世紀から15世紀の日本と感染症(光永)

③江戸時代日本がコレラから受けた影響(柳沢)

④科学の進歩と日本における感染症(光永)

⑤感染症への日本人の貢献(光永)

⑥地政学的視野から見た日本における感染症(光永)

⑦現代に生きる日本人特有の衛生観念と気質・文化(光永)

3

## テーマ構成

### 1章

モンゴル帝国とパンデミック  
(半田)

### 2章

欧州のパンデミック  
(北山・三田・小出・池田)

### 3章

パンデミックの日本への影響  
(光永・山内・柳沢)

### 4章

現代的意義とポストコロナ  
(塚原・和泉)

4

## 関連年表

| 世紀           | モンゴル<br>(13～14世紀 200年間)                           | ヨーロッパ(1～14世紀 1300年間)                                                | 日本(4～19世紀 1500年間)                                                                                                |
|--------------|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ～6世紀         |                                                   | 70年 エルサレム破壊<br>ユダヤ人のディアスポラが始まる<br>541年 ユスティニアヌスのペスト<br>1096年 第一次十字軍 | 日本書紀による最初の疫病の記録<br>552年 仏教伝来                                                                                     |
| 11世紀<br>13世紀 | 1206年 チンギスカーン即位<br>1252年 ビルマよりペスト流入<br>1271年 元 成立 |                                                                     | 1274・1281年 元寇                                                                                                    |
| 14世紀         | 1331年 ペスト全土に拡大<br>1347年 カッファ攻防<br>1368年 明 成立      | 1347年 カッファ攻防を経てペスト<br>(黒死病)入欧                                       | 日本にペスト流入せず                                                                                                       |
| 16世紀<br>19世紀 |                                                   |                                                                     | 1510年頃 梅毒流入<br>1822・58・77・79年 コレラ流行<br>1849年 緒方洪庵による牛痘の<br>接種開始<br>1874年～ 長与専斎の衛生行政<br>1897年 北里柴三郎によるペス<br>ト菌の発見 |




## 研究報告

### 1.モンゴル帝国とパンデミック




## ペストとは

### 〈語源〉

ラテン語: **ペスティス (Pestis)**

古来サンスクリット語: ピー (Pvi)

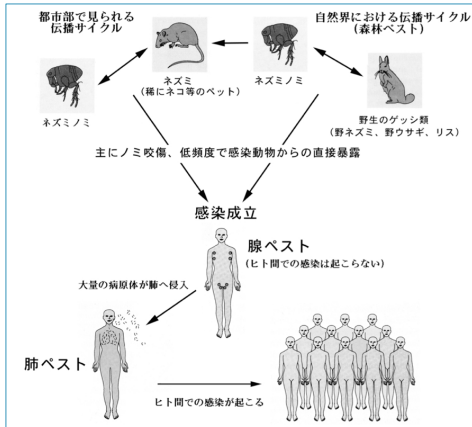
意味は「**流行**」「**破滅**」

全世界で2億人が死亡と考えられている

1 エルシニア属細菌の一種, ペスト菌  
感染に起因する全身性の侵襲性感染症

2 げっ歯類を保菌宿主  
主に節足動物(ノミ等)によって伝播

3 腺ペスト(ノミ媒介)、敗血症ペスト、  
腺ペスト(空気感染)が感染経路



7

## “ペスト菌の発見”

1894年(明治27年)6月14日  
流行下の香港で北里柴三郎が発見

直後、同じく香港で  
アレクサンドル・エルサン(A. Yersin)も発見

栄誉は雑菌を分離して発表した  
アレクサンドル・エルサンのものに

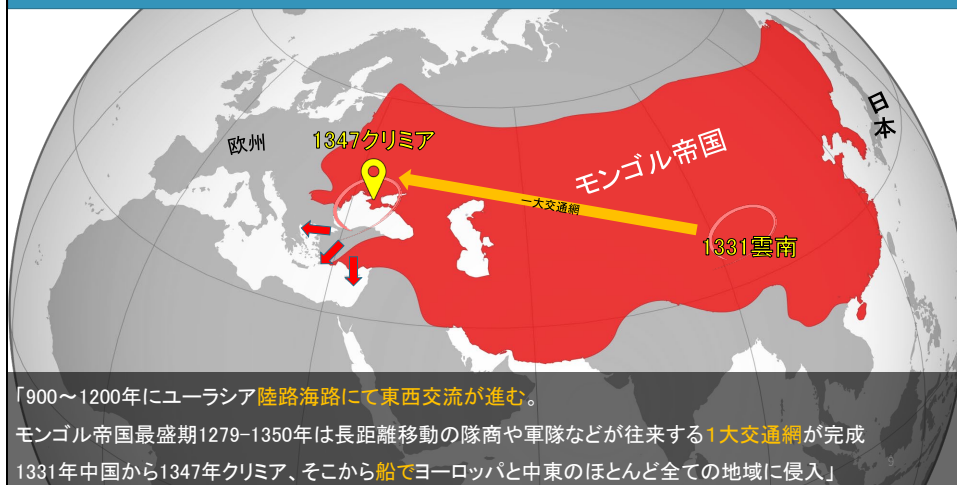


北里柴三郎(1853-1931)  
資料/学校法人北里研究所



アレクサンドル・エルサン  
(Alexandre Yersin, 1863-1945)

## アジア・ユーラシアを横断したペスト



## 世界に拡散したペスト



ドイツのMichael Wolgemut (1434-1519)、1493年作  
 「Tanz der Grippe」(死の舞踏)

13～14世紀…疫病の時代(モンゴルとその後)

15世紀 ……祈っても神は助けず

- 科学による神学の乗り越え(ルネサンス)
- 人口減を補う技術開発(産業革命の萌芽)





### 「欧州のパンデミック」問題意識

- ①ペストの感染拡大の原因と対策(池田)
- ②ペスト後の人口減少の影響と、社会構造の変化について(三田)
- ③宗教・芸術・ユダヤ人迫害に見るペスト前後の欧州人の心性の変容(小出・北山)

## 第2期パンデミックの感染経緯

1300年頃

- ・中国が発端とされているペスト菌が発生した後中国全土へ蔓延
- ・その後交易ルートを通してヨーロッパへと侵攻

1346年

- ・この時カフファを攻めていたモンゴル軍内でペストが蔓延
- ・撤退する直前にペストに感染したモンゴル軍兵士をカタパルトを使いカフファ城内へ投擲
- ・カフファ城内でペストが蔓延

モンゴル帝国の利用した投石機カタパルト

フランス・ペリゴール地方カステルノー城  
(Castelnau)に復元された平衡投石機



出所:エディンバラ大学所蔵『東史』の一場面



カタパルトを使い  
カフファへ投擲

## 第2期パンデミックの感染経緯



出所: Google earthより

出所: Michel Serre (1658-1733) Scène de la peste de 1720 à la Tourette (Marseille)



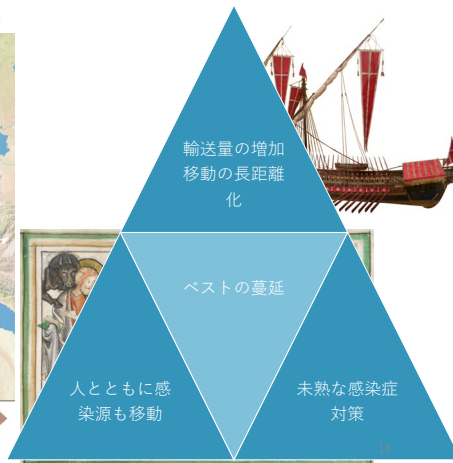
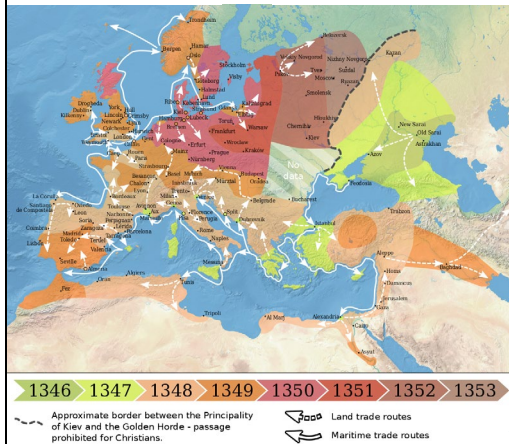
ペストが蔓延した後の14世紀のヨーロッパ

カフファの住民はペスト菌を媒介させたまま船を渡りコンスタンティノープルに上陸したことでヨーロッパ全域にペストが蔓延することとなった

# ペストの感染経路

## 黒死病の感染経路

出典：The National Interest (2018)



- ・14世紀の欧州は封建社会であった
- ・この封建社会を支えていたのが、「封建制度」と「荘園制度」であり、力関係は領主＞農奴であった



出所：クリエイティブ・コモンズ「表示-継承」(CC BY-SA)

|          | 総人口      | 死亡者数     | 死亡率    |
|----------|----------|----------|--------|
| ゴットフリード  | —        | —        | 25～45% |
| ベネディクトゥ  | 約8,000万人 | 約5,000万人 | 62.50% |
| J・C・ラッセル | 約7,350万人 | 約2350万人  | 32%    |

出所：ペストの歴史 宮崎 操弘 (P.96より作成)

封建制度・荘園制度の崩壊

## ペストによる人口減少と社会への影響

- ✓ 14世紀の欧州で発生したペストの死亡率は、各種文献から30%~40%と推測される
- ✓ 人口減少を一因として農奴の地位が向上
- ✓ 封建制度・荘園制度の崩壊

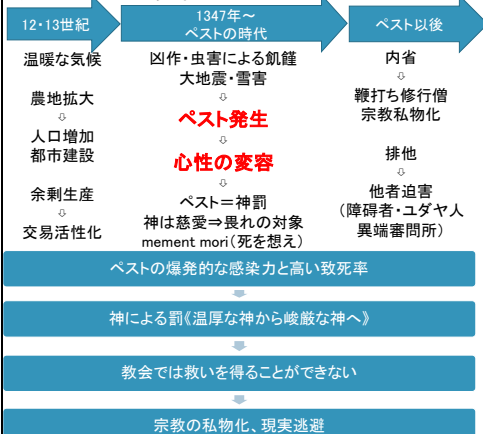
- ✓ 新型コロナウイルスの感染者数は第2波、第3波により大幅に増加しているが、死亡率は低水準
- ✓ 情報社会において、リアルタイムで世界中の情報が手に入ることで、迅速な感染対策が可能となる一方で、正しい情報を取捨選択する力が必要

パンデミックで人々が考える力を失っている時こそ、自分自身で考えることが重要であり、その土台となるのが全体知

17

## ペスト後の欧州人の心性変容とユダヤ人虐待

### 欧州人の心性変容

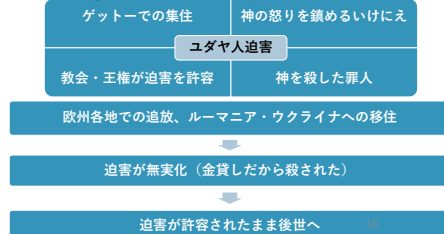


### 14世紀のユダヤ文化圏



出典：黒川知文  
『ユダヤ人迫害史』

### ペスト期のユダヤ人迫害



## 宗教・民族のもたらす分断

ユダヤ人の経済力への嫉妬

ユダヤ教への違和感と  
キリスト殺しへの敵意

民族意識の高揚に伴う  
異人種攻撃

権力掌握・他者への敵意高揚の  
ための政治的利用

民衆の現状への不満に対する  
身代わりの羊

関東大震災にお  
ける朝鮮人虐殺

第二次大戦中のアジ  
アでの日本語教育、  
天皇拝礼の強制

アイヌ文化、琉  
球文化の損壊

人は有事にあたり他責により自己安定を図る⇒常に歴史は繰り返されている

有事の時こそ、学んだ歴史から今の自分が置かれた状況を認容し、他者を受容することの大切さ、  
相手も人であるという当たり前のことに想いを馳せることが重要となるであろう

19

## ペストの芸術への影響



出典：Hans Holbein (1497-1543)、1538年  
製作の木版画シリーズ「danza de la muerte」

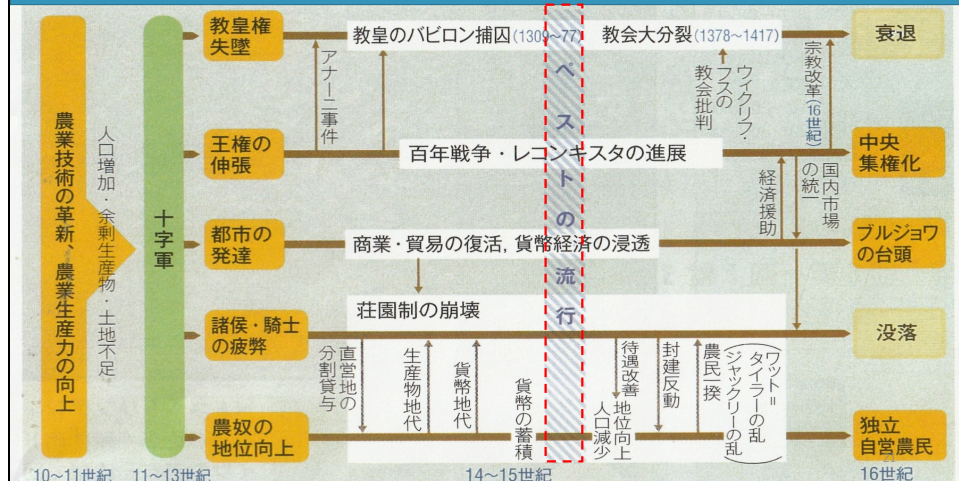


出典：Berner Münster（スイス、ベルン大聖堂。  
ステンドグラスは1441年ごろから製作開始）

ペストがその後の芸術（絵画・音楽）に  
影響を与えた  
メメントモリ（死を想え）という思想の広まり



中央学院大学 黒川知文教授（欧州史・宗教史）ヒアリング



中央学院大学 黒川知文教授（欧州史・宗教史）ヒアリング

ペストによる社会構造上の変化：ヨーロッパの「疫病統一」から「革命統一」へ

農民人口の減少→地位向上・待遇改善→**独立自営農民**→農民一揆  
資産移転 都市集中 1357年ジャックリーの乱  
1381年ワットタイラーの乱

農民人口の減少→労働力不足→農作業の機械化(水車等)・活版印刷術

↓  
貴族の疲弊→封建反動・騎士の略奪→農民一揆で損害→諸侯・騎士の没落  
聖職者の半減→若年聖職者の弊害・ロラード派(ウィクリフ)の浸透

陸路による商取引の衰退→海路による商取引の発展

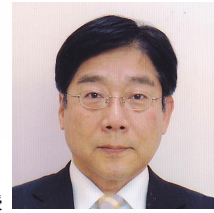
1374-1435年ハンザ同盟の進展

各都市に公衆衛生局設置 検疫(イタリア40日間) 死亡告知表発行

## 中央学院大学 黒川知文教授（欧州史・宗教史）ヒアリング

### ペストによる欧州人の心性の変容

- 反ユダヤ主義の先鋭化→ユダヤ人迫害・追放→ユダヤ人の東欧移住
- キリスト教の死生観・終末観の定着—絵画「死の舞踏」「メント・モリ」
- 信仰の昂揚 ・ 聖年1350年 ローマに巡礼すれば天国 100-120万人
  - ・ マリア崇拜(1348年8月16日涙するマリア像)
  - ・ 聖人崇拜(聖セバスティアヌス等53人の守護聖人)
  - ・ 教会への寄進増加(70慈善施設建設・都市に大聖堂建設)
  - ・ 個人宅の礼拝堂・供養堂(貴族や裕福な市民)
- 教皇権の衰退→信徒による宗教運動の進展……………宗教改革
  - ウイクリフ(1324-1384年)・ロラード派・フス
- 神信仰への疑惑→人間への注目……………×……………ルネサンス
  - 裕福な貴族文化・古典に戻る運動



中央学院大学・黒川知文教授



### 研究報告

### 3. パンデミックの日本への影響



## 「パンデミックの日本への影響」研究分担

4世紀～19世紀

■日本の神仏信仰 ■日本の地政学的特性  
■科学の進歩 ■衛生行政の発展

1. 日本の神仏信仰と疫病の関連性(山内)
2. 13世紀から15世紀の日本と感染症(光永)
3. 江戸時代日本がコレラから受けた影響(柳沢)
4. 科学の進歩と日本における感染症(光永)
5. 感染症への日本人の貢献(光永)
6. 地政学的視野から見た日本における感染症(光永)
7. 現代に生きる日本人特有の衛生観念と気質・文化(光永)

25



## 日本の神仏信仰と感染症 ～疫病の蔓延とともに高まる神仏信仰～

◆日本の神仏信仰発展の裏には疫病の影響があったのではない

**日本人のDNAに備わる「穢れ」と「禊」の文化**

- ・日本の神々は和魂(にぎたま)と荒魂(あらたま)とを併せ持ち、怒らせると荒魂神となり、祟りとなる。
- ・疫病は天の神々や地の神々の支配で生ずるもの。
- ・日本では古より病気を神仏の祟りとして、とりわけ天下に大流行する疫病は、天皇の失策によって天地に異変が起こり、発生すると信じていた。
- ・神々を怒らせないように祈禱が行われる
- ・疫病により、数奇な運命をたどる仏教

◆546年 仏教伝来と疫病の流行(日本書紀)

- ・朝廷では、疫病・災害・飢饉に際して、維摩会、仁王会、大般若会、最勝会などを設けて読経を行った。
  - ・737年の痘瘡大流行の際、聖武天皇は、諸国に釈迦仏像と挟持菩薩の造立を命じ、大般若経を写経させた。
- 平安時代まで：痘瘡の際は大般若経の読経など、幕府が大規模な祈禱を行う  
江戸時代から：庶民、各人が神仏に祈る

◆痘瘡神として疫病神をまつる

- 痘瘡は新羅からくる病のため、三韓降伏の守り神『住吉大明神』をまつれば病魔に勝つと信じていた。
- 江戸では出雲大社の末社鷲明神を痘瘡神としてまつった。

◆現代にも続く神仏信仰

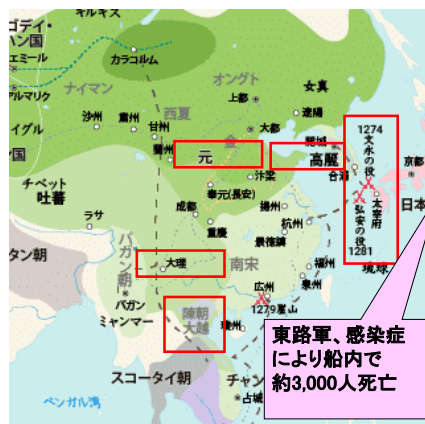
- 困った時の神頼み。疫病を予言し疫病退散する妖怪『アマビエ』が流行、グッズ化。

※新羅、高麗、百済の三韓

26



## モンゴル帝国の雲南侵攻～ペスト拡大期の東アジア(13・14世紀)



出所: 世界の歴史まっぷ

1253年: 雲南・ビルマ侵攻

1259年: 第4代皇帝モンケ・カーン感染症により死去

1274年: 文永の役(元寇)  
1281年: 弘安の役(元寇)

1258年  
1285年: ベトナム侵攻  
1288年

1331年: ペスト中国で流行

1347年: ペスト欧州で流行

ペスト  
きっかけ

日本

日本

マラリア  
疱瘡  
赤斑  
咳病

ペスト  
発生  
せず

ペスト  
発生

ペスト  
拡大

## 14世紀の貿易とペストの伝播(日本と欧州の違い)

日本にペストが伝播しなかった理由:

- ①貿易品目: 日本「銅銭・陶磁器・茶・書画」欧州「絹織物・毛皮」
- ②貿易量: 日欧貿易は、管理貿易の中の民間貿易活況



中国と黒海を結ぶ  
交易ルートによる  
ペストの伝播

日欧貿易活況  
ペスト伝播せず

出所: 世界の歴史まっぷ

大阪経済法科大学・脇村孝平教授へのヒアリング

『貿易品目・頻度の影響: 実証はされていないが、可能性は高い』

## 16世紀の貿易と「梅毒」の伝播(14世紀ペストと違い日本に流入)



出所: 小学館 日本大百科全書(ニッポニカ)

### 梅毒の感染ルート

1493年～ スペイン・イタリアから  
ヨーロッパに拡大  
1498年～ インド⇒インドネシア  
1505年～ 広東から中国(明)に拡大

後期倭寇が運んだ梅毒  
漢人・ポルトガル人・日本人(3割)

「中国ルート」と「琉球ルート」から  
1512年～ 日本に拡大: 貿易ルート

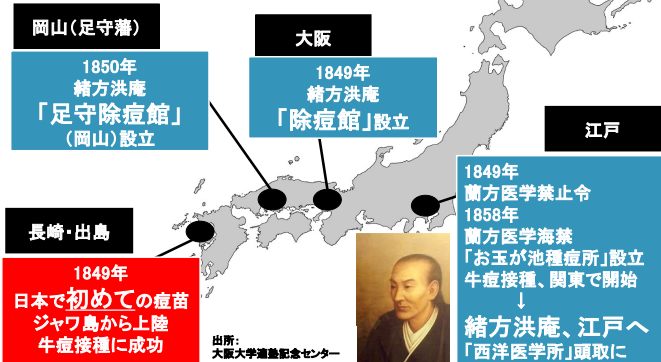
17世紀～ 4つの口(琉球・長崎・対馬・蝦夷)  
感染症流入(天然痘・マラリア・麻疹)

## 日本における感染症と「科学発展史」



## 感染症への日本人の貢献①～天然痘と緒方洪庵～

1796年 英・エドワード・ジェナーの牛痘接種法発見から、遅れること半世紀を経て、日本で牛痘接種が広まる。



1867年 孝明天皇、天然痘にて死去

1946年 外地引揚天然痘3,000人死亡

1955年 日本における天然痘撲滅

1980年 WHO 天然痘根絶宣言

2002年 ブッシュ大統領 天然痘バイオテロ種痘接種60万人

## 感染症への日本人の貢献②～ペスト菌と北里柴三郎～



1894年  
6月6日 香港にペスト調査派遣  
6月24日 北里・ペスト菌発見

歴史の絶妙なタイミング

7月 日清戦争開戦

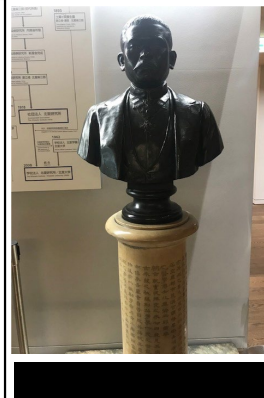
### 【世界への貢献】

- ・ペスト菌発見によりワクチン・治療薬開発
- ・日本では1926年撲滅

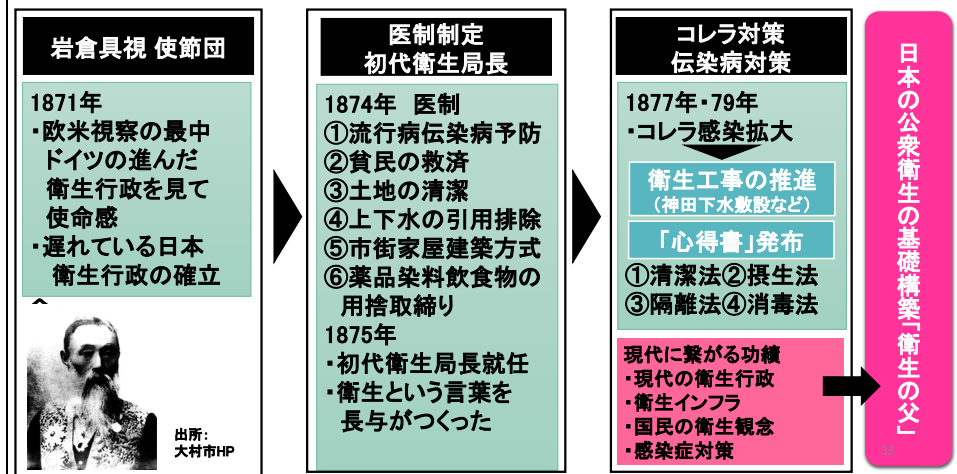
### 1897年ペスト予防対策として【伝染病予防法成立】

- 北里が説いた
- ・上下水道整備
  - ・地域・家屋の消毒
  - ・感染者の隔離
  - ・船・列車の検疫

- ↓
- ・新型コロナウイルス対策に通じる



## 感染症への日本人の貢献③～日本の衛生行政と長与専斎～



## 地政学的視野から見た日本における感染症～フィールドワークより～

|                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                       |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><b>19世紀以前</b></p>  <p>①遊牧民の影響を受けない第一地域(日本・西ヨーロッパ)<br/>⇔影響を受ける第二地域(ユーラシア大陸)<br/>②ユーラシアの「疫病の貯水池」と一定の距離</p> | <p><b>19世紀以降</b></p> <p>開港による感染症流入<br/>①近代医療技術の発展<br/>②科学技術の発展<br/>③公衆衛生の環境整備<br/>④国民の衛生意識</p> <p>ユーラシア大陸からの<br/>感染症をコントロール</p>  |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

出所：世界の歴史まっぴゅ・筆者撮影

脇村孝平教授(大阪経済法科大学)

## 現代に生きる日本人特有の衛生観念と気質・文化

第3章: パンデミックの日本への影響「4つの論点」

2. 日本の地政学的特性

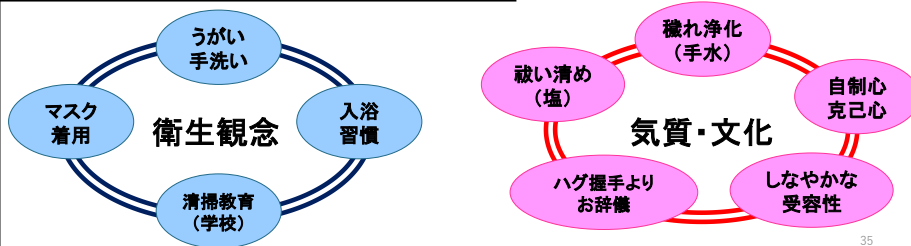
1. 日本の神仏信仰

19世紀

3. 科学の進歩

4. 衛生行政の発展

支える土台: 日本人の「衛生観念」「気質・文化」



## アジア経済史・インド社会経済学専門：脇村孝平教授ヒアリング

### はじめに

- ▶ 脇村孝平「疫病のグローバル・ヒストリー：疫病史と交易史の接点」(『地域研究』Vol.7, No.2, 2006年2月)での問題設定
  - ▶ 「本稿の目的は、疫病史と交易史の接点を探ろうとするところにある。具体的には、世界史における「帝国」の展開過程や世界のグローバル化の進行といった事態と大規模な疫病の発生との関連を問うことになる」と書いた。
- ▶ 本日の問題設定
  - ▶ 主に、「疫病のグローバル・ヒストリー」を、**地政学的な視野**から考えることにしたい。その際、思考のモデルとして、梅棹忠夫氏「文明の生態史観」を採用することにする。
    - ▶ **ユーラシア大陸における遊牧民の影響を受ける地域**(第二地域)
    - ▶ **その影響を受けない地域**(第一地域)

▶ 36

## おわりに

- ▶ 14世紀および15世紀に、中央ユーラシアでは、ペストがもたらした人的被害は、社会・経済に致命的な打撃を与えた。これが、**その後の世界史の帰趨に大きな影響を与えた。**
- ▶ **西ヨーロッパの場合**、ペストから甚大な影響を受けつつも、その後、特に**16世紀以降、基本的には回復過程**に入った。ただし、今日の私の話では、その点を全く述べることができなかった。他日を期したい。
- ▶ 他方で、**日本は、ユーラシア大陸の「疾病の貯水池 (disease pool)」から「適度な距離」を保ちうる位置**にあったと言えるのではないか。

▶ 37



## イデオロギーとウイルスの親和性

- ☐ 自由
- ☐ 個人
- ☐ 人権

資本主義・自由主義的

- ☒ 情報統制
- ☒ 管理

共産主義・社会主義的

ウイルスに国境はなく、またイデオロギーにも左右されない。  
その上で…

確固たる歴史認識と、科学的エビデンスに基づいた上で  
しなやかな受容性を持って行動することが必要なのではないか。  
日本的な行動様式や考え方について再考する機会へつながる。

39

## ヒアリング報告まとめ 脇村孝平教授・黒川知文教授

# ヒアリングの様子

「疫病のグローバル・ヒストリー」試論：  
地政学的な視野に立つて

脇村孝平（大阪経済法科大学）

一時停止 (k)

2020/8/1

2020  
多摩大学・イ  
「アジアダイ

ヒアリング資料〔脇村教授〕



ヒアリングの様子

[illegible]

ヒアリング資料〔黒川教授②〕



(右)バベルの塔の崩壊  
ジョー・マティス、1910年。パリの「アムステルダム」画廊で展示されたこの作品は、当時の芸術家たちに大きな影響を与えた。



黒死病の原因説

- 1 大気汚染説 多数説
- 2 悪い食べ物
- 3 血液が凝固しにくいアサヒと結びつく
- 4 不規則な季節の変化
- 5 気象異常 フェーン現象
- 6 占星術的病因論 木星と火星の「合」により母体のバランスが壊れる
- 7 悪者の魂から来たと言葉
- 8 キリスト教徒の魂(ユダヤ人)が空襲、水、飲食物に毒を投入
- 9 死神説 魔女説
- 10 ネズミ説
- 11 人間の魂に対する神の罰 伝説説



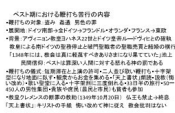
黒死病に対する一般的な応答

- 1 勝利を導び、過度にわたらないことが最上策と考えて実行
  - 2 欲望の赴くままに解放して腹気に暮らす
  - 3 申請を行く 善行のよい花をたずさえて、嘆ぐ
  - 4 逃げずにまいった上策はない 富樹野風
- 村上



標榜も書行証  
1306年とスモレンクの書行証

鞭打ち苦行団(Flagellant)  
「土地雷が暴れ、我々に啓蒙の

[illegible][illegible]

舞打もぎ行燈(1540年)

## ユダヤ人と黒死病

西人が發見してゐたのは14世紀後半、ポルトガルの船主として  
 「大航海家」である「ヴァスコ・ダ・ガマ」が、インド洋を航したときとな  
 びに発見されたのが「スマタラ」であった。「スマタラ」が「スマタラ」  
 といふ名に由来したと見られると、その名は「スマタラ」である。これは、  
 中世後期のユダヤ人が移住したからと見られる。また、スマタラは、  
 ユダヤ教の戒律が健康を保つ一因となつてゐた。

ユダヤ教戒律

- ・食を共にし、共に生活する
- ・食を共にし、共に生活する
- ・一日の終わりに身を清める
- ・安息日や祝祭の日を遵守する

新約「ユダヤ人の歴史と文化」(1)～137頁



ユダヤ人は宗教的寛容を重視しており、宗教的寛容を求めず、寛容の心で受け入れ他人に心をあてずとも、他人にとり、寛容に二面性をもたない寛容ではないユダヤ人の精神)

中央集権的経済発展の導入によりユダヤ人は世界に開かれた結果として寛容精神にたつた。

寛容に寛容 (寛容精神)



重中

図1-1 象徴



① 象徴する象徴：象徴の象徴・象徴の象徴・象徴の象徴・象徴の象徴

② 象徴する象徴：象徴の象徴・象徴の象徴・象徴の象徴・象徴の象徴

重中(重中) (重中)



『ルーシツヴァイヤー』著「シムラキスブルウの物語」(1440年)  
シムラキスブルウのムサヤンが神前に跪き入れ火として、黒煙  
が空高く舞い上がり、さういふムサヤン120人が焼かされた



『ザ・マン・イン・ザ・アイランド』  
『ザ・マン・イン・ザ・アイランド』  
『ザ・マン・イン・ザ・アイランド』

## 黒死病とユダヤ人追放令

メソポタミア文明の中心地として、ユダヤ人の祖先が活動した。ユダヤ人の祖先は、メソポタミア文明の中心地として、ユダヤ人の祖先が活動した。ユダヤ人の祖先は、メソポタミア文明の中心地として、ユダヤ人の祖先が活動した。



ドイツの郷土から運来されるユダヤ人  
1428年頃  
『ウェーグシュエーブル』に於



## ヒアリング資料〔黒川教授③〕



「異名無類」  
ハニーさん  
ドミニコ教会

ローマ教皇でも同  
乗れることは出来  
ないことを知って  
いることだ。ロー  
マ教皇に準拠した  
の地域で話された

同型



水・ガス・電の相互観が実態の  
に定着する

ベストによる欧州人の心性の変容

- 汎ユダヤ主義の先駆化→ユダヤ人迫害→遍在→ユダヤ人の寛容移行
- キリスト教の誕生秘の定義→「死の舞踏」『メメント・モリ』 終末信仰
- 救済秘の救済→信徒による宗教運動の進展……………宗教改革
- 神への信仰の世俗化→人間への注目……………ルネサンス  
個人主義

## 研究計画【年間スケジュール】

春

| 回  | 月 | 日     | 議 題                         | 文 献 調 査                                    | フ ィ ー ル ド ワ ー ク | 備 考                                             |
|----|---|-------|-----------------------------|--------------------------------------------|-----------------|-------------------------------------------------|
| 1  |   | 16    | 初回学長講話<br>自己紹介<br>今年度テーマ方向性 |                                            |                 |                                                 |
| 2  | 5 | 23    | 分担当発表                       | 次回ベース文献疑問など報告                              |                 | 年間スケジュール確定<br>Google driveシェア<br>Facebookグループ作成 |
| 3  |   | 30    | 分担当発表                       | 次回ベース文献疑問など報告                              |                 | アジア班メンバー確定                                      |
| 4  |   | 6     | 分担当発表                       | 次回ベース文献疑問など報告                              |                 |                                                 |
| 5  |   | 13    | 研究計画発表PPT確認<br>分担当発表        | 文献集計・目次                                    |                 |                                                 |
| 6  | 6 | 20    | 研究計画発表PPT確認<br>分担当発表        | 文献集計・目次                                    |                 |                                                 |
| 7  |   | 27    | 研究計画発表PPT確認                 | 文献集計・目次                                    | FW検討(仮)         |                                                 |
| 8  |   | 4     | ◆研究計画中間発表                   | 研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク               |                 |                                                 |
| 9  |   | 11    | ◆研究計画中間発表                   | 研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク               |                 |                                                 |
| 10 | 7 | 18    | 研究計画発表反省<br>中間発表に向けた計画      |                                            |                 |                                                 |
| 11 |   | 25    | 分担当発表                       | 中間発表に向けた討議                                 |                 |                                                 |
| 12 |   | 1     | フィールドワーク                    | 大阪経済大学 藤村先生                                |                 |                                                 |
|    |   | 8     | 休講                          |                                            |                 |                                                 |
|    | 8 | 15    | フィールドワーク                    | 中央学院大学 黒川先生                                |                 |                                                 |
|    |   | 27/28 | ◆夏季合宿(予定)<br>箱根水明荘          | 発表者(役割分担): 1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・FW |                 |                                                 |

47

秋

|    |    |    |                                |                           |  |             |
|----|----|----|--------------------------------|---------------------------|--|-------------|
| 14 |    | 3  | 分担当発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)            |  |             |
| 15 |    | 10 | 分担当発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)            |  | 年間スケジュール再確認 |
| 16 |    | 17 | 分担当発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)            |  |             |
| 17 | 10 | 24 | 分担当発表                          | 各執筆原稿の発表(状況報告)            |  |             |
| 18 |    | 31 | PPT目次レビュー<br>分担当確認<br>論文推敲全体確認 | 各自完成版を持ち寄る                |  |             |
| 19 |    | 7  | PPT目次レビュー<br>分担当確認<br>論文推敲全体確認 | 全体を印刷して確認                 |  |             |
|    |    | 14 | 休講                             |                           |  | 多摩大学学祭      |
| 20 | 11 | 21 | PPT目次レビュー<br>分担当確認<br>論文推敲全体確認 | 全体を印刷して確認                 |  |             |
| 21 |    | 28 | PPTレビュー<br>AL祭・最終発表に向けて        |                           |  |             |
| 22 |    | 5  | PPTレビュー<br>AL祭・最終発表に向けて        |                           |  |             |
| 23 | 12 | 12 | ◆アクティブラーニング祭                   | アクティブラーニング(AL)祭 (多摩キャンパス) |  |             |
| 24 |    | 19 | ◆論文最終発表                        |                           |  | 論文提出22日(火)  |
|    |    | 26 | 休講                             |                           |  |             |
|    |    | 2  | 休講                             |                           |  |             |
| 25 |    | 9  | 最終稿確認                          |                           |  |             |
|    | 1  | 16 | 休講                             |                           |  | センター試験      |
| 26 |    | 23 | ◆最終論文提出                        | 最終論文(完成版)提出日              |  |             |
|    |    | 30 | 懇親会? 最終講義                      |                           |  |             |

48

## 参考文献・論文 全88件

### ➤ 図書全58冊

1. 寺島実郎『日本再生の基軸』(岩波書店,2020)
2. 石坂尚武『苦難と心性——イタリア・ルネサンス期の黒死病』(刀水書房,2018)
3. 黒川知文『ユダヤ人の歴史と思想』(ヨベル,2018)
4. 酒井シヅ『日本の医療史』(東京書籍,1982)
5. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(上)』(講談社現代新書,1996)
6. 宮崎陽弘『ベストの歴史』(山川出版社,2015)
7. Guy Richard (ギ・リシャール)『Ailleurs, L'herbe est plus verte (移民の一万年史——人口移動・遥かなる民族の旅)』(新評論,1996)
8. Jared DIAMOND (ジャレド・ダイヤモンド)『Guns, germs, and steel: the fates of human societies (銃・病原菌・鉄——1万3000年にわたる人類史の謎)』(草思社,2000)
9. William H. McNeil (ウィリアム・H・マクニール)『Plagues and Peoples (疫病と世界史)』(新潮社,1985) 他

### ➤ 論文全30件

1. 寺島実郎「大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト」(『世界』第907号、岩波書店、2018年5月号)
2. 寺島実郎「新型コロナウイルス危機の本質——理性ある対応とは何か」(『世界』第919号、岩波書店、2020年5月号)
3. 脇村孝平「疫病のグローバルヒストリー——疫病史と交易史の接点」(『地域研究』第7巻第2号、2006年2月)
4. 山中伸弥「山中伸弥による新型コロナウイルス情報発信」  
(<https://www.covid19-yamanaka.com/cont11/main.html>) 他

49

## 以降資料

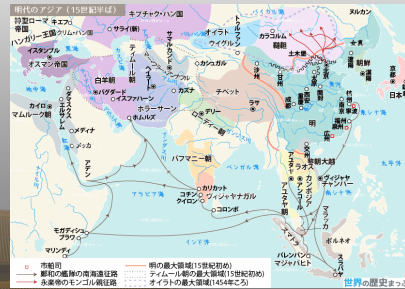
## モンゴル帝国と明朝

### 明朝の特徴

中国固有の論理で国家建設した  
社会の隅々まで統制  
謀反(むほん)や汚職を弾圧  
地主を任命し相互に監視する社会  
秩序維持のための法による強制



朱元璋(洪武帝)  
1368年～1398年



明(王朝) A.D.1368～A.D.1644  
漢民族の中国の王朝。紅巾の乱で頭角を現した朱元璋が1368年、金陵(のちの南京)を都として皇帝位につき、元号を洪武と定めて明を建国(洪武帝)  
元朝の勢力をモンゴル高原に追いやり(北元)、江南を根拠地として中国統一

- 超封建的な社会により秩序を作った
- 国家統制を強め流動性の低い社会に
- ペスト時にモンゴルを追い出した
- 統制によりペスト拡大をコントロール
- モンゴルはペスト被害が大きく北に退散

## 政治思想と感染、そして現代

モンゴルや欧州  
：移動と交流が活発

- 瞬く間に感染が広がり、人命や社会、経済に大きく影響

中国  
：社会統制による国家管理

- 感染は一定程度に抑えられ、影響は限定的

感染対策に関する政治思想の優劣を比較するのではなく、平時と有事に、感染拡大への対応として、歴史の事実を客観的に見つけ、状況に合わせた対応の切り替えが必要か

## モンゴル帝国と明朝～人口からみる～

| 時間 | 13年 (1381)   | 24年 (1391年)  | 25年 (1393年)  | 14年          | 24年          | 25年          |
|----|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 直隸 | 1, 315, 945  | 1, 876, 638  | 1, 917, 833  | 10, 241, 002 | 10, 361, 873 | 10, 755, 918 |
| 浙江 | 2, 150, 412  | 2, 232, 404  | 2, 136, 755  | 10, 550, 238 | 8, 661, 640  | 10, 447, 567 |
| 江西 | 1, 133, 924  | 1, 546, 613  | 1, 553, 423  | 8, 982, 481  | 8, 105, 610  | 8, 993, 481  |
| 湖廣 | 785, 549     | 719, 478     | 775, 851     | 4, 593, 070  | 4, 091, 905  | 4, 702, 660  |
| 福建 | 911, 369     | 816, 830     | 815, 527     | 3, 840, 250  | 3, 293, 444  | 3, 916, 806  |
| 四川 | 714, 900     | 732, 854     | 715, 719     | 1, 464, 515  | 1, 567, 454  | 1, 466, 778  |
| 廣東 | 705, 632     | 607, 241     | 675, 599     | 3, 171, 950  | 2, 581, 719  | 3, 007, 932  |
| 廣西 | 210, 267     | 208, 040     | 211, 263     | 1, 463, 119  | 1, 392, 248  | 1, 482, 671  |
| 雲南 | 75, 690      | 75, 690      | 59, 576      | 354, 797     | 354, 797     | 259, 270     |
| 北平 | 338, 617     | 340, 523     | 334, 792     | 1, 843, 403  | 1, 980, 895  | 1, 926, 335  |
| 山東 | 752, 365     | 720, 282     | 753, 894     | 5, 196, 715  | 5, 672, 543  | 5, 255, 876  |
| 山西 | 595, 240     | 593, 065     | 595, 444     | 4, 030, 454  | 4, 413, 437  | 4, 072, 129  |
| 河南 | 314, 785     | 330, 294     | 315, 617     | 1, 691, 087  | 2, 106, 991  | 1, 912, 542  |
| 陝西 | 705, 355     | 294, 503     | 294, 526     | 2, 155, 001  | 2, 489, 805  | 2, 404, 660  |
| 合計 | 10, 245, 262 | 10, 684, 435 | 10, 452, 789 | 59, 873, 305 | 56, 774, 56  | 60, 545, 817 |

明代の登録戸数と登録人口 <https://ameblo.jp/rindom/entry-12541158361.html>

| 戶口 | 數            |               |               | 口            |              |              |
|----|--------------|---------------|---------------|--------------|--------------|--------------|
| 時間 | 14 年 (1381)  | 24 年 (1391 年) | 25 年 (1393 年) | 14 年         | 24 年         | 25 年         |
| 直隸 | 1, 315, 945  | 1, 876, 638   | 1, 917, 833   | 10, 241, 002 | 10, 361, 873 | 10, 755, 918 |
| 浙江 | 2, 150, 412  | 2, 232, 404   | 2, 136, 755   | 10, 550, 238 | 8, 661, 640  | 10, 447, 567 |
| 江西 | 1, 533, 924  | 1, 546, 613   | 1, 553, 423   | 8, 982, 481  | 8, 105, 610  | 8, 993, 481  |
| 湖廣 | 785, 549     | 719, 478      | 775, 851      | 4, 593, 070  | 4, 091, 905  | 4, 702, 660  |
| 福建 | 911, 369     | 816, 830      | 815, 527      | 3, 840, 250  | 3, 293, 444  | 3, 916, 806  |
| 四川 | 714, 900     | 732, 854      | 715, 719      | 1, 464, 515  | 1, 567, 454  | 1, 466, 778  |
| 廣東 | 705, 632     | 607, 241      | 675, 599      | 3, 171, 950  | 2, 581, 719  | 3, 007, 932  |
| 廣西 | 210, 267     | 208, 040      | 211, 263      | 1, 463, 119  | 1, 392, 248  | 1, 482, 671  |
| 雲南 | 75, 690      | 75, 690       | 59, 576       | 354, 797     | 354, 797     | 259, 270     |
| 北平 | 338, 617     | 340, 523      | 334, 792      | 1, 843, 403  | 1, 980, 895  | 1, 926, 335  |
| 山東 | 752, 365     | 720, 282      | 753, 894      | 5, 196, 715  | 5, 672, 543  | 5, 255, 876  |
| 山西 | 595, 240     | 593, 065      | 595, 444      | 4, 030, 454  | 4, 413, 437  | 4, 072, 129  |
| 河南 | 314, 785     | 330, 294      | 315, 617      | 1, 891, 087  | 2, 106, 991  | 1, 912, 542  |
| 陝西 | 705, 355     | 294, 503      | 294, 526      | 2, 155, 001  | 2, 489, 805  | 2, 404, 660  |
| 合計 | 10, 445, 262 | 10, 684, 435  | 10, 652, 789  | 59, 873, 305 | 56, 774, 56  | 60, 545, 817 |

資料來源：明洪武 14 年、24 年《明太祖實錄》卷 140、216，並參考數字來自臺灣《大書局》卷 10。

資料來源：洪武 14 年、24 年《明太祖實錄》卷 140、214、26 年《明史紀事本末》卷 10  
<http://dushu.qizao.com/m/mingqingshi/LS1997000K24/LS1997000K24026.html>

元の時代の1330年**推定人口は6000万人**

ペストが中国に侵入したのは1331年  
 世界に蔓延したのは1347年

元から明に変わったのは1368年

明の時代の1393年推定人口は**約5000万人**



明の時代はペスト蔓延と重なる

例えば戦争でモンゴルがいかに惨忍としても  
 これだけの人口減少が起こるだろうか  
 (マクニール、バーンスタイン)

剣よりも病原菌の方が致死率の高い兵器とも考えられる。

モンゴルは北に撤退へ

53

## 謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長を始めとする多くの先生方、卒業生より、毎回のゼミにおいて高い視座と広い視野から多くの助言を頂きました。

今年は新型コロナウイルスという未曾有の災禍に世界中がさらされる中、例年とは全く異なる環境下で、アジアダイナミズム班の指導教員である金 美徳教授、水盛 涼一准教授にはテーマ設定から文献研究、ヒアリング、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、モンゴル帝国史から欧州・日本におけるパンデミック世界史、グローバルヒストリーから紐解く現代的意義、現代の私たちがもつべき視座について、大胆且つきめ細かい指導を頂きました。

また、本年は例年行っているフィールドワークについても縮小せざるを得ない中で、大阪経済大学 脇村教授、中央学院大学 黒川教授にはそれぞれの研究からの深い知見、発見、見解を惜しみなく教示頂き、文献研究だけでは得られない歴史的背景を教示頂きました。

この場を借りて、本論文を執筆するにあたりご協力頂いた全ての皆さまに感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2021 年 1 月 23 日

多摩大学インターゼミ・アジアダイナミズム班一同

## 執筆担当

はじめに 半田 敏章

### 第1章

|     |       |
|-----|-------|
| 第1節 | 半田 敏章 |
| 第2節 | 半田 敏章 |
| 第3節 | 半田 敏章 |
| 第4節 | 半田 敏章 |
| 第5節 | 半田 敏章 |
| 第6節 | 半田 敏章 |
| 第7節 | 半田 敏章 |

### 第2章

|     |       |
|-----|-------|
| 第1節 | 池田 賢吾 |
| 第2節 | 三田 大祐 |
| 第3節 | 北山 智子 |
| 第4節 | 北山 智子 |
| 第5節 | 北山 智子 |
| 第6節 | 北山 智子 |

### 第3章

|     |        |
|-----|--------|
| 第1節 | 山内 美恵子 |
| 第2節 | 光永 和弘  |
| 第3節 | 柳沢 悠介  |
| 第4節 | 光永 和弘  |
| 第5節 | 光永 和弘  |
| 第6節 | 光永 和弘  |
| 第7節 | 光永 和弘  |

### 第4章

|     |       |
|-----|-------|
| 第1節 | 塚原 啓弘 |
| 第2節 | 塚原 啓弘 |
| 第3節 | 塚原 啓弘 |



|     |       |
|-----|-------|
| 第4節 | 塚原 啓弘 |
| 第5節 | 和泉 昌宏 |
| 第6節 | 和泉 昌宏 |
| 第7節 | 和泉 昌宏 |

参考文献 北山 智子

年間スケジュール 北山 智子

## 図表目次

### 図目次

|                                             |     |
|---------------------------------------------|-----|
| 図 1 コウモリの生息地 .....                          | 305 |
| 図 2 クリミア半島の都市であるカフファ(現在のフェオドシヤ) .....       | 306 |
| 図 3 ペストの発生地域 .....                          | 309 |
| 図 4 ペストによる人口減少 .....                        | 310 |
| 図 5 各荘園の死亡率 .....                           | 311 |
| 図 6 封建社会の構造 .....                           | 313 |
| 図 7 ペスト医師 .....                             | 316 |
| 図 8 Ars moriendi(往生術の一部) .....              | 317 |
| 図 9 ペストの流行とユダヤ人迫害 .....                     | 323 |
| 図 10 梅毒の伝播経路 .....                          | 338 |
| 図 11 日本国内における感染者数(2020 年 11 月 30 日現在) ..... | 359 |
| 図 12 世界の感染者数(2020 年 11 月 30 日現在) .....      | 359 |
| 図 13 あらゆる業種において自宅で仕事をを行うことが可能に .....        | 367 |
| 図 14 自宅に居ながら都市的サービスを楽しむ(スマートホームの整備) .....   | 367 |

### 表目次

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| 表 1 元との貿易品目(筆者作成) ..... | 335 |
|-------------------------|-----|

### 写真目次

|                                               |     |
|-----------------------------------------------|-----|
| 写真 1 ペスト菌の感染経路 .....                          | 297 |
| 写真 2 モンゴル軍が投石をするために使っていたというカタパルト(投石器)の復元 ..   | 306 |
| 写真 3 東京都墨田区 横網町公園内、関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊碑 .....       | 327 |
| 写真 4 「安政簡労痢流行記概略」より「茶毘室混雑の図」 .....            | 341 |
| 写真 5 アントニー・ファン・レーウェンフックの単式顕微鏡 .....           | 344 |
| 写真 6 1894 年 11 月ペスト菌発見を記念した歓迎会にて寄贈された銅像 ..... | 348 |
| 写真 7 コッホ・北里神社 .....                           | 350 |
| 写真 8 コッホ・北里神社の由来 .....                        | 350 |

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 写真 9 長与専斎碑 .....            | 353 |
| 写真 10 大阪経済法科大学教授 脇村孝平 ..... | 354 |